

---

# ノーグ・コンフェクショナリー

久藤雄生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーグ・コンフェクショナリー

### 【Zコード】

Z3375T

### 【作者名】

久藤雄生

### 【あらすじ】

藤村貴人は巻き込まれ事故で、同じ学校の生徒4人と共に異世界に召喚された。

帰る術はないらしく、貴族に引き取られ生活することになるのだが

……。

日常淡々異世界生活。



ひとりのわかもの よ  
救世主を喚んだらしいけど、現れたのは5人の男女。

「ふざけてんじゃないわよー。さつさと家に帰してー。」  
激昂する同級生の女子。

「……………ツ」

弱弱しく涙を流す下級生。

「すっげー、魔法って俺でも使えるんすか?」

メモを片手に嬉々として質問を投げかける後輩。

「もつと詳しく説明しろよ…………」

困惑した様子で詳しい説明を求める同級生男子。

それらをただ見てるだけの俺。  
感情がついていかない。

怒りもなく、悲しみもなく、喜びもなく。  
これが確かな現実なのか、それがわからない。

いや。

ああ、そつなんだ、としか思えない。

それから王だと魔術師だと魔女だと色々出て来て何か話していたが。

何だか頭に入つてこなくて、ただ、ぼんやりと見ていた。

取り敢えず今日は休んだ方が良いと案内されたのは、二部屋続きの部屋だった。

入つてすぐはテーブルや椅子のある、食事をしたり談話する一番広い部屋。

次の部屋を男子が、一番奥の部屋を女子が、それぞれ使うことにした。

この世界に来たとき持つていた物はそれぞれの部屋の隅にまとめた。勿論携帯が使えないことなど一番最初に確認済みだ。

ベッドには泣き疲れた春日が眠つており、2人は起こさない様にそつとバルコニーに出た。

夜風が気持ち良い。

ふと空を見上げると二つの月。

青白い月と赤い月。

異世界、か。

ぼんやりと月を眺める。

「フジム、聞いてた?」「

「聞いてた。全部右から左だけど」

「駄目じやん」

「うん」

呆れたように真琴が呟く。

頭がついていかないって「ううう」となんだな、と思つ。

「どうなっちゃうんだろうね」

「さあ」

わからない。

「他人事だね」

「何というか、感情が追いつかない?」「

「ふうん、意外」

「お前はもう落ち着いたみたいだな」

「ま、ね。私がしつかりしなきや、春日ちゃんも不安でしょ」

室内で眠る春日を眺めながら呟く。

相変わらず面倒見がいいというか何というか。

春日が後輩で女子だからだろうか。

自分だつて、現状を不安に思つてゐるだらう。

氣を紛らわせるため、他愛のない話を交わす。

学校のこと、部活のこと、バイトのこと。

そうしてくるつたり春日が田を覚ましたようで、部屋に戻る」と

した。

「春日ちゃん起きたし、一旦階で話そつよ」

男子2人がいる一番広い部屋に移動する。

これからのこと話をなくては、というのが真琴の弁だ。

全員が円形のテーブルにつく。

紅茶らしきものがあつたので、5人分淹れる。

「ま、自己紹介って言つてもさ。大半が顔見知りなんだけど」

茶に息をふきかけ、冷ましながら飲む。

うん、普通の紅茶みたいだ。

全員同じ高校に通つているので、顔見知りなのは間違いない。

「じゃあ私から時計回りでね。体育科2年の早良真琴。さわら まいこ 全員顔見知りだけど一応ね」

真琴とは中学で3年間同じクラスだった。

それもあって、今でも交流のある数少ない女子のうちのひとりである。

意思の強そうな目、長い髪をポニー テールにしている、（色んな意味で）男子にも負けない気の強いヤツ。

「……及川、あいかわ 光太郎。進学科の2年で、剣道部」

及川は校内で有名人なので、話したことはないが顔と名前は知っている。

確かに生徒会副会長でもあり、剣道部では副主将。

顔立ちも良いため、女子の人気が高いのだ。

クラスの女子が話していたのを覚えている。

「進学科1年の富尾滋郎みやお しじゅう つす」

ノッポな眼鏡の割に茶髪といつこの後輩も、中学の時に知り合つた。高校に入つてからはバイト先でもある兄貴の店で、毎日のように顔を合せている。

ゲームや漫画、小説が好きで、よく語られる。

最もマニアック過ぎて話の半分もわからないのだが。

「調理科2年、ふじぢゅう きいと 藤村貴人」

別段言つことはない。

部活はしていないし、バイト先を言うのも何か違つ。

「英語科1年の春日かすがみなみです。よろしくお願ひします」

頭を下げたことで、ふわりと長い髪が揺れる。

そういうえば今年の英語科1年に美少女がいると噂になつていていたことを思い出す。

小さくて華奢で、何かぽきっと折れそうだ。

「さてまずは現状把握ね」

言いながら、大きく溜息をついた。

「私だと疑つた言い方しか出来ないし、ジロ、お願ひ」

「俺つか。えーと、フジム先輩、話聞いてなかつたすよね」

「聞いてたつつの」

右から左なだけで。

「はいはい、聞き流してたんすよね。じゃあ詳しく述べましょっか」

ひどい後輩である。

滋郎は眼鏡のブリッジを押し上げて、おもむろに口を開いた。

「ここは日本ではなく、ましてや地球でもない、『異世界』。そこに俺達は“召喚”されました」

あれだ、コイツの好きそうな設定だな。

いつもの語りを聞いているのだと錯覚しそうだ。

「本来は一人召喚されるはずだったのが、周辺にいたことにより巻き込まれたようつす」

確かにここに来る直前、5人とも渡り廊下にいた。

突然光の渦に巻き込まれたので、あまり細部までは見ることが出来なかつたが。

「誰が召喚される筈だつたんだ？」

問いかけるが、滋郎は首を横に振つた。

「異世界からやって来たひとりの若者が、ヒーラン国の助けになる”とい

う言い伝えがあるそいつす。何でも“アカの英雄”が残した予言だとか

何だその傍迷惑な云い伝えは。

そしてその根拠は？

世紀末の世界滅亡くらい不明瞭じやないか？

「それで今回、“宫廷魔術師”と“魔女”が協力して“召喚術”を行なつた」

そこまで言つたところで、春田が目を伏せた。

「日本に帰るための“逆召喚”は“不可能”」

そうだった。

それで春田は泣いてたんだつた。

「生活の保障は十分にされるよつですが、“若者が<sup>ヒトツ</sup>国を救つよう働く”のが前提つすね」

「具体的には？」

「現在東隣の国が、海を挟んだ東の国と戦争をしているよつです。そのどばっちりを防ぎたいそいつすよ」

「阿呆じやねーの。ふつつーの高校生が戦争に役立つわけねーし銃器が身近にあつたり、兵器を作れる専門家なわけでもない。全員日本人だし、戦争を生で見たことすらないのだ。戦争といえば人が死ぬだらうじ、そんな場面に耐えられるとは思えない。」

「そうつすね。ただこの<sup>一ヶ</sup>世界には、“魔法”があるそいつす」

「は？」

「異世界間を渡ることによつて、それが急激に増幅されるらじく」

「は？」

「俺達全員、魔法の才能があるそいつす」

説明が終わつた。

今日は休み、明日の午前中から色々検査とか説明とかあるらしい。  
「そういえば、何年か前に商業科の生徒が行方不明になつたよね。

それも5月」

「何か聞いた覚えあるわ。まだ見つかってないんだろ?」

「うちの学校、呪われてるんすかね」

噂で聞いた程度だが、数年前の5月、商業科1年の女子生徒が行方不明になつたらしい。

確かGW中で、学校での神隠しではなかつたと思うのだが、  
その噂から何故か学校の七不思議に脱線する。

きっと今年から渡り廊下の神隠しが追加されるに違いない。

「ちょっと、いいか? ……提案があるんだけど」

及川が重々しく口を開いた。

「何?」

「……救世主は誰かわからない、だつたよな?」

真琴が頷く。

「もしも、明日の検査つてやつで救世主が誰か特定出来ないなら」

その時思つたのは。

「俺を救世主にしてほしい」

「いいつ、大丈夫か?  
つてことで。

いや、うん、すっげーいい奴だな、及川つて。

翌朝。

水を貰い顔を洗つた後、支給された服に着替えた。

麻のような素材で、襟元が緩めの服だ。

下もゆつたりめなズボンで靴は柔らかい革靴。

動きやすそうだ。

女子は女子で白のワンピースなのだが、嫌がつた真琴はレギンスの  
ようなものを履いている。

「普通で良かつた」

「そうつすね」

確かに普通だ。

元の世界でもあつそつナチュザインで、違和感はない。

着替えが終わり、食堂に移動する。

この世界初の朝食は、シリアルもどきだった。

ミルクじゃなくて白湯だし、しかも薄ら塩味である。

残念ながら好みじゃない。

パフェの底に入っているとつい残したくなるくらい、好みじゃない  
のだ。

さりげなく周りを見ても誰も何も言わず、もくもくと食べている。  
お前ら、不満はないのか。

気に食わない朝食をもそもそ口に運んでいると、若い男が現れた。  
何となく昨日もいたような気がする。

後輩がこいつそり耳打ちしてくれた。

男の名前はエドワード・カネル。

魔術師らしい。

昨日名乗つてましたけど、聞いてませんでしたよね、つて一言多いんだよ。

「今日はまず、魔法の適性を調べようと思います。朝食を終えたらさつそく始めましょう」「う

シリアルもどきを無理やり胃に詰め込み、ミルクと果物で口直し。朝は米がいいんだけどな。

藤村家の普段の朝食は、和食が基本である。

女子が食べ終わるのを待つて、部屋を移動することになった。

昨日の召喚があった部屋とは別で、3列の長机とそれぞれ5脚の椅子がある。

パイプ椅子じゃなくて木製だけど、学校の多目的室みたいだ。魔術師に促され、全員揃つて最後尾に座る。

椅子に座ると、白い石が配られた。

よくわからないが白い石を握り、力を込める。

そうすれば属性によって色が変わる、というものらしい。

白い石は片手で握ると隠れるくらいの大きさだ。  
それを握りこみ、力を込める。

力を込めるといつても、物理的な力ではない。

力を流し込むようなイメージ、らしい。

まあ実際は魔力を流すらしいのだが、そんなもん知らん。  
何事もやってみないとわからない。

しばらくすると石がほんのり温かくなってきた。

そつと開くと白い石がマーブル模様に変化していた。

周りの様子を窺うとやはり皆マーブル模様のようだ。

「さすがですね、世界を渡るところも違うのか……」

この世界では、人間ならば誰しも魔法が使えるという。

火・水・風・地・光の5属性があり、大抵一人一つ適性がある。勿論中には複数の適性がある人もいるらしいが、割と珍しい。

このエドワードという魔術師は、珍しい3属性持ちなのだそうだ。が、この世界では魔法と魔術は別物らしく、この男は魔術師であつて、魔法使いではないのだと言い張る。

「中でも光の属性は稀少です。……ほつ、5人中3人もいるとは「光」というだけあって、イメージ通り黄色らしい。

貴人と春日以外の3人の石は、黄色の混じつたマーブル模様だ。ちなみに貴人の石は青、水色、赤の混じつた3色に見える。

「つうかお前のすげえな」

滋郎の石はそれはもう見事に5色混じつていて。

「ほほう。もしやあなたが救世主なのでは」

「いやいやいや、違うつす。俺より及川先輩の方が断然強いつす」

滋郎が顔の前で手を振りながら答える。

「及川先輩？」

及川に興味を持つたらしい魔術師が、手元の石を覗き込む。

及川の石は黄色・赤・緑の3色だ。

魔術師はそれぞれの石の色を書き込んでいるようだ。

紙は再生紙のような薄茶色、ペンは万年筆のような形のものを使用している。

「及川先輩の剣は国で一番といつても過言ではない腕前で」

実際、及川は去年新人戦で優勝している。

魔術師の意識は及川に向かつたようだ。

この調子なら順調に及川を救世主にもつていけるのではないだろうか。

「……そう、正義感も強いから、向こうで代表もしていたし嘘ではない。

今月末の選挙で、及川はおそらく生徒会長になつていたはずだ。

お、魔術師がその気になつてきたみたいだ。

言い伝えに根拠はないし、救世主が誰かもわからない。

そもそも救世主が本当にいるかどうかもわからないような状況なのだ。

それらしければ誰でも問題はない。

結果オーライ。

「俺で良ければ力になります」

魔術師がその言葉に目を輝かせる。

及川の手を掴んだかと思うと、ぶんぶんと上下に振った。

「ありがとう！ 早速師たちに報告に行つてくれるよー。」

バタバタと遠ざかる足音を聞きながら溜息を吐いた。

「行つたな」

「上手く行きそうですね」

「そうね」

及川が救世主になると語った理由。

それは、女子2人を守るため。

このまま救世主が決まらなかつたら、全員戦場に行く可能性があるので、という考えに至つたらしい。

男子はともかく女子が戦場だなんて、ところどりしき。

及川、すげえ。

でも本音は駄々漏れだけどな。

この状況でそこに考え至つたこともそうだが、それで自分が犠牲になろうというのだから恐れ入る。

実際その状況になつて実行に移せるやつは早々いないだろ？。

「……ごめん」

真琴が眉を潜めてほつと頬ぐ。

「謝んなよ。俺が選んだことなんだから」

「……ありがとう」

男前だな及川。

魔術師が関係者を数名連れて戻ると、及川が別室へ移されることになつた。

救世主なので訓練などの苦労もあれば、優遇もされるということだ。及川はこのまま王宮住まい、騎士団に混じつて訓練に参加など、忙しくなるらしい。

そして残りの4人がどうなるかだが。

「まずは大陸共通語の学習ですね」

「……え？」

「関係者の一部は翻訳魔道具を身につけていますが、皆さんに配布出来る量はありません」

言いながらエドワードは左手親指の指輪を掲げる。黒い石のついたその指輪が、翻訳魔道具なのだろう。

「ですので、王宮にいる間に共通語の学習をして頂き、その後しかるべき後見人に引き取られるという形です」

「ちょっと、引き取られるってどういうこと?」

「そのままの意味ですよ。理由なくこのまま王宮に住むことは出来ません。それなりの地位を持つ貴族に後見してもらい、その屋敷で保護されることになります」

「それって皆一緒にや……ないわよね?」

エドワードは首を横に振る。

「無理でしようね」

まあそだうだう。

4人も一気にお荷物抱えるとかどんだけだ。

「共通語の学習に加え、常識や文化などの知識も必要ですし、基本魔法の勉強も必要です。もし何か他にもやりたいことがあれば申し出て下さい」

「えーっと、俺ら元の世界じゃ 学生だったんすけど、いっちじゅう うなるんすか？」

「こちらの世界では成人後に通う学校はありませんよ」

「へ？」

「こちらの学校は未成年しか通えません」

言い方がまずかったと思ったのか言い直された。

だけど滋郎が聞き返したのはそういう意味ではないと思つ。そもそも……。

「この世界の年の取り方は？ で、何歳で成人？」

「ああ……24時間で一日、30日か31日で一ヶ月、12ヶ月で一年。そして1年で1つ歳を取り、16歳で成人ですね」

成人年齢以外はほぼ同じか。

16歳で成人。

それだと1年生2人はおそらく未成年である。

よく海外では日本人は幼く見られるというが、ここではそんなことないらしい。

まあ海外じゃないけどな。

「皆さん成人されますよね？」

これで1時間の長さが違うとまた狂つてくるが、まあいい。成人に見られるってことは成人してるんだろう。

「俺はしてるみたいですね。春日さんは？」

「わ、わたしはまだですが、学校はちょっと……」

緊張しているのか、か細い声で答える。

「ではやはり学校は通わないということで。貴族の多くは18歳くらいまで働く、社会勉強をすることがよくあります。皆さんもとりあえずそうされではいかがでしょう？」

約2年か。

いきなりじゃあどうしたい？などと言われてもわからない。

猶予があるのは助かった。

「それでは、今日は立ち入り出来る場所の案内ということで、明日

から講義を致しますね。講師は私が勤めます。ビツヤーにエディ  
とお呼び下さい」  
そう言って魔術師はこつこつと笑った。

適性検査終わった後、城内を案内してもらひつゝことになつた。

及川は早々に別室に移動となり、4人だけだ。

説明を受けながら散々歩きまわつて、昼食を挟み、5時間以上掛かつたのではないだろうか。

滋郎が質問しまくるものだから余計に時間が掛かつたのだと思つ。あのメモの内容が気になる。

アイツは常に片手にメモ。

普段何書いてるんだ。

夕食後から就寝まで学習時間らしい。あまり時間に余裕がないようだ。

与えられている部屋の一室で、授業が始まつた。

今日は語学そのものではなく、予備知識を習つといつ。

この国で主に使われているのは大陸共通語。

エトランのある大陸の名前をウナカーサといつ。

ウナカーサ大陸共通語。

他にも大陸はあるようだが、大陸と言えば一番発展してゐるウナカーサを指すらしい。

この大陸は上を向いた三田円のような形をしており、エトランは切れ目から西2つ田に位置する。

切れ目から西1つ田が問題の国である。

逆にエトランの西の国はリダインと書じ、いかりとほほとんじ関わりがないらしい。

「その翻訳の道具、もつとあればいいのに……」

授業の合間に真琴がぼやく。

視線はエディの手元である。

翻訳の魔道具を持つのは王族や魔術師の一部、割と上層部の人間か、自分たちの専属侍女たちだけだ。

即ち後見人となる貴族は勿論、買い物するにも店の人間と言葉が通じないのである。

「高価な上に制作にとても時間が掛かる物なので……手に入る頃には必要なくなつていいでしょうね」

そんなにか。

「諦めて勉強した方が良いつすよ」

「ぐう……ジロに言わると何かムカつく」

「ははは、それでは続けますね。……エトランは大国です。資源も豊富ですから、他国から欲しいと思われてもおかしくない」

「資源つて何すか？」

「これです」

卓上にあつたランプの下部から石を取り出した。  
あの白い石と色が違うだけの、ただの石に見える。

「灰色……」

「ええ、魔動石といいます。このランプでこうといふ、ですね。こ

「に石をいれて、それを動力にして灯りがつく、といつわけです」

石油や電池といった役割か。

「廊下のランプにも石が入っています。数日」とに入れ替えてますのでそのうち見ることもあるかもしませんね」

数日で交換なんて面倒だな。

電気は通っていないのか？  
つて存在しないのか？

「国内のエネルギーはその魔動石だけですか？」

「そうです。個人の魔力を使つことも出来るのでしょうか、とても間に合いませんからね」

部屋にはポットのようなものもあつたし、元の世界でいう家電も割と開発されているのだろう。

照明、調理器具、洗濯、掃除、移動手段などなど。

どれだけ普及しているかはわからないが、そうなると間に合わない

とこう発言も納得できる。

初授業が終わり、一息吐く。

エディは退室し、部屋には自分たち4人だけだ。

「どうなるのかな……これから」

真琴が呟く。

「大丈夫ですよ、どうにかなりますって！」

「……アンタは楽観的でいいわよね」

「」している滋郎を真琴は横目で睨む。

「ホラ、茶あ入つたぞ」

厨房から頂いてきた焼き菓子を茶請けにティータイムだ。  
この世界の焼き菓子も元の世界と変わらないようで安心した。

「ありがと、フジム。……ジロと違つて気が利くわあ」

「えー、ひどいっすよー」

その遣り取りを見て、春日が微かに笑つた。

この世界に来て初めて笑顔を見せたのではないだろうか。  
でもあれだよな、きっと春日の反応が“普通”なのだ。

「及川先輩には申し訳ないっすけど、俺らは俺らで身を立ててかな  
いと」

「大丈夫なんでしょうか……」

春日が不安げに呟く。

「後ろ盾があるのならどうにかなります。及川先輩次第な」といふは  
あります

「他人に全部負んぶに抱つこなんて、性に合わない」<sup>ひと</sup>

滋郎の言葉に真琴は眉を顰め言い捨てる。

真琴らしい言い分だ。

「それならそうならないようにすればいいんじゃないっすか」

ありをうと言ひ滋郎。

普段の明るい表情に戻った。

二二

バルコニーに出て息を吐く。  
月が大きく、赤い。

「異世界ねえ……」「

事実は小説よりも奇なり、か。  
室内では3人とも就寝している。

「店、大丈夫かよ……」

元々 そう大きな店ではなく、従業員もぎりぎり。

その中から主戦力である自分と滋郎が抜けてたぶん店は忙しく。  
2人ともほぼ毎日働いていたのだ。

店長が身内だと中々扱き使われるものである。

「寝るか……」

夜風は気持ち良かつた。

翌日は午前中から授業。

みっちりである。

とにかく詰め込みと言わんばかりに授業は進む。  
学校で習う外国語と違い、モロに生活に影響してくる。  
日常の生活で身につくものも大きいだろう。

よく使う単語さえ覚えていれば割とどつにかなるもんだ。  
春日の提案で単語カード作りに勤しむ。  
こぞとなればこれを見せれば通じるだろうとこいつことで。

ちなみに服は色々もらつたので、それぞれの制服はきちんと保管してある。

毎日2~4時間、制服をきているというわけではない。

こちらの服も元の世界の服も大きな違いはなさそうだ。

普段着に関しては落ち着いた色が多いが、ドレスや騎士服は派手な色合いのものも見掛けた。

昼食はオープンサンドとサラダとスープ。

使われて いる 食材は 至って 普通 (に見える)。

サラダは……ホウレンソウか?

生の ホウレンソウに 玉ねぎ ときゅうり。

オープントーストは マトスライスに チーズ、ハムと 至って 普通。スープは マトスープの ようで、細かく 刻まれた 具が 色々 入っている。

「……米?」

「だな」

スープには 米が 入つて いた。

見慣れてる ものより 長細い 感じが する けど。

だが しかしこれ っぽい ちの 量だと 雑炊 ではない。

「Hトトイさん、 いの白いのつて」

「それですか? 米は スープや サラダによく 使われる 食材ですよ」

Hトトイは 指輪を 嵌めているので、米は 元の 世界で 使われる 米と 同じ つて ことだよな?

指輪を 外すと 違う 単語に 聞こえる のだろうが、米は 米。

「どうせなら 単品で 食べたいんだけど」

真琴の 提案に 一同頷く。

「単品? ですか?」

「炊いた 米が 食べたい」

「えーっと、」の国の料理ではありますけれど、でしょつか  
？」

「ペリカフでもなんでもこっす。とりあえず」飯ものが食べたいっす

同意。

米があるなら米が食いたいよな。

今はまだ良つけど、そのつけ麺絶対恋しくなるつて。

「わかりました。夜はペリカフにするよ!」

「やつた!」

「さて、それでは続きをしまじゅうか。夕食まで、頑張りまじゅう  
ね」

「鬼!」

「あ、そりや。」れは文字の練習帳です。自主勉強にてお使いください

「つて、またこれがよー。」

どつやらの薄塩シリアルもどき、朝食の定番らしい。  
勘弁してくれ。

「あー、Hティさん？ 明日から朝食変えてもうえないっすか？」

先輩の我慢がきかないようす、と続ける。

失礼な。  
だが事実なので否定はしない。

「どんな朝食が良いのですか？」

「つねはパンだなあ。トーストに目玉焼き、ベーコンと野菜とか」

「あー、俺んちもパンっすね。って言つても総菜パン1個置いてあるだけっすけど」

真琴と滋郎はパン食か。

「あー、白米と味噌汁に弁当のおかずの残りとか」

学校に弁当を持参していたため、どつしてもおかずが残る。  
基本的に朝はそれを食べ、おかずが少ない場合は何か足す。  
さすがに自分一人のためだけにわざわざ朝食を作るのは面倒だった。  
朝からバイトの時はバイト先で賄いが出るので問題なかつたし。

「米でもパンでも良い。」これだけは止めてくれ……」

シリアルもどきを指差して言った。  
エティは楽しそうに笑いながら頷く。

「明日から違うものにしましょう。では朝食後、魔法の適性を調べた部屋でお待ちしております」

1日みっちり勉強した。

言葉は勿論、時間の概念や時計の読み方、周辺の地理、簡単な歴史など。

暦は現在大陸暦760年。

これは“アカの英雄”と“魔女”的出現の年らしい。

「何ソレ?」

「……フジムは見てなかつただろうけど、魔女はいたわよ。私たちを呪いした人もあるし」

うん、覚えてない。

魔女という単語には聞き覚えがあるが。

「同じ年くらいに見える人の人つすよ。実際は760年以上生きてるらしいんですけど」

「は?」この世界つてそんな長生きなわけ?」

「いや魔女だけらしい。何でも“精霊の血”を浴びたせいだと。で、“アカの英雄”っていうのが魔女の師つす。この人はもういないみたいっすけど」

大陸で一番長命な魔女の出現から760年。あれか、キリストみたいなものか。

しかし精霊。

またファンタジーというかメルヘンな単語が出て来たな。

「不老不死らしいよ。何かあつたら魔女に聞け、っていうのがこの国のやり方みたい。つまり私たちの召喚もそういうこと。迷惑な話よね」

逆に魔女さえ味方につければってことか。

帰れない以上、別に国と敵対しているわけでもないしその必要はないわけだが。

大変そうな立場だな、と漠然と思つた。

この世界に来て数日が経つた。

1日みつちり勉強でかなり疲れる。

運動不足解消のため、訓練場の出入りも解禁となつた。

アスレチックのようなものもあり、わりと楽しめる。

何より娯楽がないことがつらい。

元の世界ではバイト三昧でテレビもあまり見なかつたが、まったくないとなると逆に見たくなる。

そうなつてくると簡単に出来そうなボードゲームの作成に手が出る。主に真琴が欲しがり、滋郎が作るのだが。

滋郎は元々手先が器用で時計やペンを解体したりもしていた。いずれ開発系を体験したいつす……とにやにや亥いていた。意味がわからん。

もう少ししたら週に何日かは休みになり、自由に行動出来るらしい。それから語学の授業は大分減り、魔法の授業が始まる予定だ。滋郎がものすごく嬉しそうなのは分かり切っていたことだが、意外にも真琴が楽しみにしているようだ。

一度訓練の見学に行つたのだが、及川はすでに魔法を使える。エディは素質がある、天才だと讃めちぎつていた。いや楽しそうで何より。

自由行動が出来るようになつたら、城下町で食べ歩きしたい。この世界のケーキ屋とかもの凄く興味がある。

城下町だけでケーキ屋が5店舗以上、カフェも数軒あると聞いた。人口が数千人の町としては多い方なのではないだろうか。

元々ケーキ屋の家に生まれ幼少の頃から手伝つており、両親が亡くなり店を畳んでからは歳の離れた兄の店で働いていた。

兄の店は養鶏場である義姉の実家の卵を売りにしていた。

ケーキ屋なのだがイートインも出来、そちらではランチセットもあつた。

バイトは主にケーキ製造だが、ランチのピークには料理も担当していた。

滋郎の担当はケーキ製造と接客である。

「先輩、俺も行きたいっす」

「そうだな。最初は皆で行つた方が良いかもな」

「やつでもしないと春日は引き籠もりそうだし。共通語の学習は春日が一番進んでいる。」

さすが英語科。

しかし積極性がないので会話が出来て いるかといえば出来て いない  
ような気がする。

うか。

さすが積極性の力タマリ。

真琴は部屋付きのメイドに翻訳機を外してもらってまで実地で勉強する徹底振り。

「食べ歩きもいいけど買い物したーい！」

真琴の訴えに春日も頷く。

「服とか小物とか色々見たいです」

女の子だな。

「俺武器屋とか行つてみたいつす」

滋郎は堪能しそうだよな。

早速エディに話したところ、エディ引率で町見学に行くことになつ

た。

実地で語学学習というわけだ。

城から出るのは初めてだ。

緩やかな坂道を下り、門を潜れば城下町。人が多く、朝から活気がある。

「朝市がありますので、この時間は賑やかなんです」

通りは野菜や果物、魚介類など食べ物が多い。板に大きく値段が書かれており、物価はわからないがどの店も人が溢れている。

パンや串焼きなどの軽食も並ぶ。

良い匂いだ。

城で朝食を食べずに出ているので腹が減っている。

「さてそれではコインをどうぞ」

コインを数枚渡される。

何かの実を刻印された、小振りな銀色。

「朝食はそれぞれ買って食べて下さい。最悪言葉が通じなかつたら、コインを渡して指差せば良いですから」

何て無茶振り。

鬼か。

この人混みの中放り出すか普通。

エディからだと魔力感知でそれぞれの所在地がわかるので問題ないらしいが……。

そういう問題か？

「マインを持つて軒先を覗く。

「ホツトドックっぽいな」

板に2と書かれてあるので、おそらくマイン2枚だろう。

『ひとつだわ』

『はいよ。 と びつちが良い?』

「は?」

聞き取れなかつたのか、新しい単語か。  
まあいいや。

『おまかせします』

わからなかつたらこれで良いじやん。

渡されたホツトドックに醤り付く。

千切りキャベツにトマト、ローストハムに塩胡椒。  
ちょっと物足りないけど皿に。

シリアルよつ断然皿に。

果物が並ぶ軒先でそのまま食べられる果物を教えてもらつた。  
明るい黄色で皮ごと食べられ、食感は洋梨のような感じがする。  
皿の実とこつりっこ。

朝食後合流し、女子リクエストの衣服や小物を取り扱う店へ。日本に比べるとシンプルで落ち着いた色の服が多い。服は支給されているので必要ないが、女子は違つらしく数点購入していた。

こりいう金は城から出でいるらしい。

税金か？

真琴は出世払いだと言つてていたが。

滋郎のリクエストでもある武器屋にも寄る。城の武器庫にあるもので十分だ。

買う必要はない。

しかし値段の高さや武器の重さにはしゃぐ一同。呆れつつ見守るエテイ。

昼食は生パスタだった。

聞けば乾麺はあまり普及していないらしい。魔法の発達で早くから冷蔵庫もどきがあり、食品の保存に関して不便がなかつたからだらう。

同じ理由で保存食の種類が少ない。

クリームを和えた生パスタにサラダとスープ。デザートに皿盛りのケーキ3種。

「エリのケーキは城下町で一番人気のあるお店のものなんですよ」

店で出すケーキを違うケーキ屋から仕入れる」とはわざとよくあるが、こちらでもよくあるのだらうか。

「あとでそちらのお店にも行つてみましょうか」

それはぜひとも。

ケーキ屋は見事に女性ばかりだった。

「居心地悪いっす」

同意。

滋郎の咳きにエディも頷く。

居心地が悪い男3人。

客は女性ばかりだがちらりと見える従業員は男が多い。  
そこは日本と変わらないようだ。

父の店も兄の店も正社員は男ばかりでむさ苦しかった。  
逆にパート・バイトは2人以外、女性ばかりである。

「フジム、色々買って皆で食べようよー」

「やうだな」

ころんとした形のクッキーに、アーモンドたっぷりの薄い焼き菓子。  
花型の焼き菓子は味にバリエーションがあるのか、3色並ぶ。  
ブレーゲンにココア、ベリー系だろうか。  
定番の貝型は見当たらないが、これが近そうだ。

わざとよく見るお菓子もあれば見たことのないお菓子もある。

生ケーキも同じで、見たことのあるケーキも、ないケーキもある。素材 자체が少し違うだろうし、当たり前といえば当たり前のだが。

さすがにすぐに食べないといけない生物は少しだけにして、焼き菓子を中心に購入。

語学学習も兼ねて、素材や消費期限についてなど色々話を聞いてみる。

朝市でも見掛けたが、果物に関しては違うものが多いようだし、要研究だな。

「次はどうに行きましょうつか」

「本屋に行きたいです」

エディの問いに滋郎が即答。

本屋に決定した。

重い扉を押して店内に入ると、そこには本でいっぱいだった。つて当たり前か。

背の高い棚が立ち並び、中にせきつてしまつと本が詰められている。各分野の専門書から小説まで色々とあるようだ。

漫画や画集、写真集などは見当たらない。

「フジム先輩、お菓子の本があるです」

「えーっと……菓子作りの、基礎……か?」

嬉々として滋郎が本を差し出して来る。

タイトルを読む。

しかしここでまだ文字に慣れていないので、時間が掛かる。  
読みに関しては滋郎と春日が早い。

「つす。内容も結構おもしろいわつすよ」

ページを捲つてみるがやはり写真や絵はついていない。  
ちょっと欲しいが、本はわりと高価なようだ気が引ける。

「出世払いっすよ、先輩。ここでもケーキ屋で働くんじゃないす  
か?」

忘れてた。

言われて気付く。

この世界で何か職に就かないといけないんだった。  
この世界に永住するんだった。

「滋郎はどうすんだ?」

「俺は開発とかしたいんすけどねえ」

「開発?」

「はい。家電でも良いしエネルギーでも良いし……せつかくなので  
色々してみたっす」

まあ滋郎なら頭脳職だよな。

肉体労働という感じではないので、ケーキ屋にバイトで入った時は  
吃驚したものだ。

高校でも進学科だし、元々中学時代から成績が優秀なことは知っていたので、塾通いか家庭教師をつけるかで学業に専念するものだと思っていた。

「経営も良いつすね。フジム先輩の店の経営担当」

「ああ、それは良いな。

製造は好きだが原価計算や費用や利益の算出は面倒なのだ。

「それなら私は接客ね」

真琴がひょいと棚の裏から顔を出した。

「春日ちゃん、めっちゃ真剣に本見てんの。さすがよね」

確かに真剣に本を読んでいる様子だ。

「もつ小説読めるレベルって。私とフジム、やっぱくなー?」

「俺らが普通。こいつらが天才過ぎるんだよ」

普通に考えてみる。

一ヶ月も経たずに英語の小説原文で読めるやつなんていないだろ。辞書片手にならともかく。

「それもそうよね。うん、良いんだ！ 私は私のペースでいい！」

「おー」

「あ！ フジムのとこのケーキも好きだけど、オムライスも美味しいよね！ オムライス食べたい！」

何で女子ついにこの間の話題が変わるのか。

兄の店は、店の名前がたまご工房でそのまま卵が売りだ。ランチメニューも自然と卵料理がメインとなる。

女性客にはオムライス、男性客には親子丼が人気だ。

「そうだよな。じつちの料理もそりゃ皿にけど、食い慣れたもん食いたいってのはある」

「醤油とか味噌とか米とか、特別好きってわけじゃないけど恋しくなる。

米とか大豆はあるみたいだし、似たような調味料もあるかもしけない。

エディに頼めば探してくれるだろうか。  
頼んでみるか……。

さすがに買ったものすべてを一日で消費できるわけもなく、夕食を終え、腹ごなしこと散歩に出ることにした。

部屋から見える中庭に出てみた。

よく見えないが色々花が咲いていたような気がする。

月が一つ、夜空に輝く。

「今日は両方青いのか」

前と違い、月が一つとも青白く発光している。  
何か法則があるのだろうか。

まだまだこの世界は知らないことばかりである。

『……誰だ』

木の陰が動く。

耳障りの良いアルトに振り向くと、ちょっときつやうな顔立ちの少女がいた。

薄暗いので色彩はわからない。

『キイト・フジムラ』

誰だと言われたので名乗る。

異世界から召喚されたといつ単語を聞き忘れていた。

説明が出来ない。

『ああ……の  
か』

「は?」

聞き取れなかつた。

まだ習つてない単語だらうか。

『ああ、良い。私の名前はリゲル。……リゲル・ノーグ』

『リゲル』

復唱する。

『“魔女”と呼ばれている、貴方達を召喚した責任者だ』

息を飲む。

“魔女”という単語は滋郎達から聞いている。まさか一対一で会つことになるとは思わなかつた。何で偶然だらう。

突然リゲルは頭を下げる。

この世界の人間が頭を下げているところを初めて見た気がする。風習の違いかと思っていたが。

『貴方達には申し訳ないことをしたと思つている』

眉を顰め苦しそうに吐き出す言葉。

意外だ。

もつと傲慢そうなイメージを持っていたのだが。

それこそ“この世界の役に立てるなんて嬉しいだらう？ふふん”的

な。

『恨んでくれて良い。私が責任を持つて必ず

』

また、聞き取れなかつた。

リゲルは俯き、表情は見えない。

『何か困つたことあれば言ひてくれ。……出来ることなら何でもする』

顔を上げる。

意思の強そうな瞳が射抜く。

「あ……と『わかつた、伝える』

『頼む』

ふとリゲルの口元が緩んだ。

700歳以上だとか言ってたけど、何かかわいいな。  
まあ見た目は同じ年くらいにしか見えないけど。

『ありがとう、キイト』

……花が綻ぶよつこつこつこつとか？

射抜かれたのは、何。



エティに頼んでみた調味料が届いた。

探している醤油や味噌の特徴を口頭で説明できるはずもなく。

“この世界に存在する調味料をすべて”取り寄せてくれたらしい。

すらりと並ぶ、調味料。

並ぶなんでものじゃないけど。

箱に詰め込まれてるけど。

「どんだけだよ」

「研究のし甲斐があるじゃないですか」

滋郎は何故か楽しそうだ。

そしてエティには料理人を目指すと思われているようだ。  
あながち間違いでもないが。

まずはひとつ開封し、ぺろりと舐めてみる。  
オイスター・ソースっぽい?  
炒め物にしてみるか。

炒め物向きやうな根菜や葉菜を手に取り、下揃えする。

「フライパンがない」

そうか、調理器具も違うのか。

同じものも多いが、見たことのないものもある。  
そういえば箸も出て来たことないもんな。

道具も色々頼んでみるか。

出世払いだ、出世払い。

とりあえずフライパンは両手鍋でいいか。

鍋を熱し、油を敷く。

素材をいれ、炒める。

火が通ったところで調味料投入。

「よし、うん、普通」

「ごく普通の炒め物が出来上がり。  
若干中華風といえば中華風。

この分だと道のりは遠そうだ。

箱詰めの調味料を見て、溜息を吐いた。

「それでは今日から魔法の練習をしましょっ」

「キター！」

「待つてましたあ！」

滋郎と真琴のテンションが高い。  
うぜえ。

魔法の練習ということで、場所はいつもの部屋ではなく訓練場である。

「今回はもう一人、講師を頼んでいます」

エディに呼ばれ、入ってきたのは“魔女”リゲルだった。

あの夜わからなかつた髪の色は、銀。  
光の加減によつては白っぽく見える。  
濃い灰色のローブが“魔女”らしい。

「“魔女”……」

ぽつりと春日が呟く。

その表情は暗い。

「へー、“魔女”が講師？」

『リゲル・ノーグだ。リゲルと呼んでくれ』

真つ直ぐに真琴を見てリゲルが言つ。

「ま、責めても仕方ないしね。『私は真琴。マコって呼んで！ よろしく、リゲル！』

肩を竦め、笑顔を見せる。

裏のない笑顔。

『富尾滋郎つす』

『春日です。よろしくお願ひします』

リゲルと田が合つた。

真琴が不思議そうに見ている。  
ああ、自己紹介しないからか。

『髪の毛、銀色』

『ああ。前にあつたときは暗かつたからか』

『綺麗』

『は……』

リゲルが田を瞪る。

その様子を見ていた滋郎たちも驚きの表情で2人を見た。

『……キイトの髪も、綺麗だ。夜の色で』

リゲルがはにかむ。  
やばい。  
かわいい。

「うわあ……フジムが説し込んでる」

「珍しいっすね」

説し込んでるなんて失礼な。  
正直に、本心しか言つていないので

「……あの、とつあえず魔法の授業、始めても良いでしょ」つか

エディが苦笑いでつぶやいた。

魔法の授業が始まった。

魔法には分類がある。

攻撃系魔法や防御系魔法、補助系魔法など、属性とはまた別の分類である。

まずは難易度の低いもの、簡単な攻撃と防御からとことじだ。

初歩の初歩の魔法は掌もしくは指先で、自分の属性の魔法を出現させるというもの。

「水にしましようか。ここにいる6人全員の共通属性ですか？」

エディが掌を上に向けた。  
注視する。

「」

水の塊が出現する。

液体なのでそれが流れ落ちる様子を黙つて見ていた。

「……ちょっと待つて」

「何でじょっか」

「今の、何？」

真琴がふるふると震え、問う。

エディは質問の意図がわからず、首を傾げながら答える。

「水の基礎魔法ですが……？」

「そうじゃなくて！ 何今の、呪文なの！？」

「え？ 呪文？」

「そうですよ！ 何すか今の！ もっと！ ついでねー？」

ねつて。

「今のは水の出現を表す魔記号ですが」

「魔記号?」

「ええ。魔法に魔記号は欠かせません」

「……期待外れもいとこだわ」

「うう。つまんないつす」

「お前ら話進まねえだらうが」

「つす」

ゲームや漫画でよく見掛ける、長い呪文を唱えるものを想像し、期待していたらしい。

「気を取り直して……／」

「…………」

真琴の顔がひどいことになっている。

お前女だろ。

「これが出現した魔法をその場に留める魔記号です」

水は流れ落ちず、エディの掌にある。

「留められる時間は魔力の流し方や量によって変わります。個人によつても違つて色々試してみるしかありません」

水が消えた。

エディがまた新しく魔記号を呴く。

「 / ; 」

掌の水が放出される。

「あ、駄目っす。イラつとして来た」

「抑えろ滋郎」

滋郎は夢が壊れたせいか苛立つてゐる。  
普段へらへらしてゐるが意外と短気だ。

「今のは留めた魔法を飛ばす魔記号です。方向は魔力を流した方向  
と逆に行きます」

「次は……リゲル」

『どうぞ』

「 / : 」

『 re : 』

「これが防御ですね。魔記号は順番を入れ替えたり省略することで  
違う魔法になつたり、効果が変わらなかつたり色々ですが、最初は  
まず基本的な魔記号を覚えることから始めましょうね」

面倒になってしまったんだが。

これは避けられないのだろうか。

子供でも魔法が使える世界だと言っていたので避けられないんだろうなあ……。

エーティやリゲルに見てもう一つ、魔法の練習を始める。

「 / 」

意外と難易度は低いらしい。

子供も使えるので当たり前なのかもしれないが、しかし魔法のない世界から来た身としては感動モノである。

別に魔法にあこがれも何もなかつたが、これは中々。

基本は の部分を他の属性の魔記号に変えるだけだ。それぞれの属性の魔記号を教えてもらい、練習する。

全員難なく魔法の基本を習得した。

咄嗟に使えるかは別であるが。

練習風景を見て何を思ったのか、夕食後、滋郎が唐突に話を切り出した。

「 フジム先輩リゲルさんが好きなんですか？」

何故。

「いや好きついでいうか……まあ、正直なところ見た目は好みだ」

嘘ではない。

きつめの顔立ちなのに笑うとかわいいなんてモロ好みだ。

「…………」

「ちよ、フジム、春日チヤンひいてるじやんー」

「何でだよ、正直に答えただけだる。大体中身が云々いつつもま  
ず見た目からじやん」

見た目が受け付けないと中身も見えないだろ。

「え、そんなことないでしょ」

「いやお前、いくら中身良くても小学生とかじいさんとか好きにな  
ることないだろ?」

性別、年齢を含み見た目の一印象は大切だと思つ。  
それにどんなに美人でも不潔だつたらひくだらつし。

「そりゃあ、まあ、そうだけど……」

「つていうか“魔女”は老女じゃないんすか

確かに700歳は老女だろうが。

「見た目は若いから良いんじゃね。つか見た目は好みだけど好きと

は言つてないだろ

「えー……」

つうか何だこの会話。  
色々おかしいぞ。

語学と魔法とその他色々。

午前中いつぱいは座学、昼食後は魔法を詰め込む。

夕方からは自由時間になるので、滋郎や真琴と訓練場で体を動かすことが多い。

中でも魔法で作った水球を投げたり打つたりが最近のお気に入りだ。春日は体を動かすのが苦手なようでもつぱら見学である。

イメージ通りだ。

たまに一日中自由な日が出来、城下町に行くようになつた。引率はなしである。

大抵4人一緒に行き、女子が服や小物を見ている間、町を探索する。服選びになんか付き合つてられるかつつの。

「先輩、今日はこの店どうつすか？」

「そうだな。つうかこの店で最後なんじゃね？」

今のところ毎回違うケーキ屋に寄つてゐる。

一番最初は一番人気のケーキ屋だつたが、次からは寄りやすい順に回つた。

城下町にあるケーキ屋は全部で6店舗と聞いてゐる。この店が6店舗だ。

意外と多い。

お菓子という風習があり、特別な日にケーキを食べる人も多いのだとか。

木製の看板、色の剥げた扉。

埃こそないものの、薄暗い店内にケーキや焼き菓子が並ぶ。  
といっても、今まで行つた店に比べ、格段に種類が少ないのだが。

何ていうか……期待出来そうにない。

いやいや見た目だけで判断はいかん。  
食べるだけは食べよう。  
食べるだけは。

生ケーキを4種類と焼き菓子を数点。  
いつもより量は控えめである。

やる気のなさそうな猫背の青年に清算してもらい、店を出た。

「何か微妙つすね。やる気もなさげでしたし

「だな」

女子と合流し、城に戻る。

今日はこれから及川の訓練を見学するのである。

及川は春日を誘つた。

春日は真琴を誘つた。

真琴は滋郎を誘つた。

滋郎は貴人を誘つた。

何だこれ面倒くせえ。

しかも誘つたんじゃなくて巻き込んだの間違いだろ。

春日と真琴がレモン水を作り、それを差し入れに騎士団の訓練場に行く。

「及川先輩、強いっすねー」

金属のぶつかり合う音が響く。  
気合の入った声、怒号、声援。

及川は副団長と思わしき人物と模擬戦を行つていた。  
剣と魔法を駆使して戦つているのだが、互角に見える。

貴人はそれよりもその横で模擬戦をしている若い騎士の剣が気になつた。

剣の色が透明に見える。  
透けているのだ。

「及川先輩の腕なのか補正なのか」

「は?」

「何でもないっす

「すごいね、ミッキーかっこいいじゃん! ね、春日チャン!」

真琴の目が爛々と輝く。

真琴の持つていき方がちょっと強引な気もするが。

「そうですね、及川先輩が人気なの、わかる気がします」

まあ春日が同意しただけ良いか。

でも春日の性格上、否定することはない気がする。

「誰がミシチーだ！」

いつの間にか及川が近くまで来ていた。  
心なしか顔がにやけている。

「あ、及川先輩、お疲れ様です。これ、良かつたら……」

春日にレモン水を手渡され、嬉しそうだ。

わかりやすいデレデレ具合。

それをにやにやと面白そうに見学する滋郎と真琴。

元々及川が春日に好意を持つていることは、周知の事実。  
バレバレだ。

初日から田線がずっと春日を追っている。

そして何かと春日を気遣う。

わからないはずがない。

しかし春日はまったく気付いてないようだ。

春日も及川も人気があるので似合いだと思つ。  
貴人にとってはどうでも良いことだが。

「あー、血が騒ぐ！ 混ざりたい！！」

真琴がふるふるとふるえ、叫ぶ。

—混ざれば?」

「うう……下手に畠立つてもあれかなあつて」

確かに、不思議なことで救世主候補にわれても困るたゞ一人

一  
ま  
あ  
な  
「

あ  
しゃあ魔物討伐とかどうですか？ しるんですね  
魔物」

「あー、もうござれば言つてたな。町の外には出なこよひにひて」

自由行動の範囲は城下町の中だけだと言われている。町の外に出れば魔物の出る区域もあるからだそうだ。そのため魔物討伐の職もあるという。が、滋郎の期待したギルドは存在しないということで、ショックを受けていた。

「魔物つて……スライムとか？ レベルとか上がるんじゃないのかなー」

「ゲームじゃあるまいし……呪文もあれだつたら、期待すんなよ」

「……………」

「そもそも魔物つつつても、生き物を殺すつてことだからな」

その覚悟はあるのか。

真琴が落ち込む。

3人で話している間に、及川は訓練に戻つて行つた。

「やういえばさー、春日チャンつてどんな人が好きなの？」

ぱつと顔を上げ、にやにやと春日に話しかける真琴。

「え」

途端に春日の顔が赤くなる。  
色が白いのでわかりやすい。

「えつと……あの……」

湯気出そう。

「わ、たし……は……その……」

春日は意を決したかのように顔を上げ、真剣な面持ちで語り始めた。

「男の人ってあんまりしゃべらない方が良いと思うんです。無口つていうか、落ち着いてる雰囲気で、クールな感じが格好良いなって。ちょっとぶつきらぼうだけど優しくて頼りになるし、力もあって。すごく真剣に働いてるのも格好良いんです。人気あるのに相手にしないところも媚びてないっていうか」

目を丸くして、春日を見つめる。  
つうかそんなに喋れたんだな。

「それに目付きがあんまり良くないのに笑うとかわいいどこのとか、  
大きい手とか、」

「ストップ。そろそろ戻ろうぜ」

止めないとどこまでいくのかわからん。  
何だか目立つているようだし、そろそろ夕食である。

「そうっすね。夕食後に買って来たケーキ、食べましょ」

「まさかの！」

「つすねー。せっかく救世主立候補したのに及川先輩カワインウつ  
す」

ケーキの味がイマイチで、気分転換にと貴人は散歩に。

春日は奥の女子部屋で休んでいる。  
部屋には滋郎と真琴の2人のみ。

春日の、それ、貴人のことだよね？的な語りを聞き、二人は突っ込  
みたくて仕方がなかつた。

「えーでもフジムねー。まあ中学の時は結構モテてたけどさあ。まだ一ヶ月くらいなのに、意外に惚れっぽい？」

「あー、いや。たぶんもつと前からつすよ。春日さん、たまむ工房の常連つすから」

「えー？」

真琴は驚いてテープルに身を乗り出した。

「フジム先輩は覚えてないかもしれないっす。確かに前に転びそうになつた女の子をキャッチしたことがあつて、それが春日さんだつたと思つんすよね」

「へー……何それ少女漫画みたい。ていうかミッキー知らないよね。バレないようにならないとかわいそすぎむ……！」

「そうつすね。及川先輩には頑張つてもらわないと」

当事者丸無視の恋愛トークである。

いたところで止められない氣もするが。

「マコ先輩は？ ないんすか？」

「興味ない」

一刀両断である。

真琴は本気で興味がなく、交際歴どころか初恋？ 何それと鼻で笑うような状態だ。

「まあ俺も興味ないっすけどね」

「2次元だけで良いつて？」

「その通りっす。その2次元も見れなくなっちゃいましたけど

残念そうに溜息を吐く。

滋郎はどこまでも滋郎である。

魔物討伐の職は、討伐隊という。城に属する騎士団の中にある部署のひとつである。大きくわけて3つ。

王宮騎士隊・警備隊・討伐隊。

花形は王宮騎士で、及川はこの王宮騎士隊である。この隊も色々細分化されているらしいが、詳しいことは聞いてない。

そんなわけで、4人は討伐隊に臨時参加することになった。自衛のための訓練として少しきらいに経験しておべきだといつてだ。

異世界から召喚されたことは、城の人間は大体知っている。すなわち、騎士も知っているということだ。及川が救世主として扱われているので、残りはオマケだという認識。当然、舐められる。わかつてた。

「先輩、」

「駄目だつつの」

苛々した様子の後輩に駄目だしつつ、滾るぜーとはしゃぐ真琴を抑えつつ。

こんなキャラじゃないのに、と貴人は溜息を吐いた。春日は俯いたまま、もくもくと歩いている。

討伐隊はいくつかの班にわけられている。

一番優秀だという班に、まとめて放り込まれた。

初めての魔物討伐の標的は3本の角の生えた、大ネズミっぽい魔物である。

この魔物、一匹ずつは強くないが集団行動をとるので面倒なのだと

いう。

生き物を殺すこと。

その覚悟。

「ざとことにかく自分の身を守れないようでは、困る。

城下町から一歩も出ないというならそれもありだと。  
だがそういうわけにもいかないだろ。

自分の身を自分で守るために、出来ることはしておかないと。  
幸い全員それなりに魔法が使えるので、直接手にかけずにすむ。  
上手くやれば死体も残さないように出来るだろ。  
一応貸し出されている剣はあるが、訓練すらしていない。

前に見た透明な剣は私物らしいので借りることは出来なかった。

「この辺りでサウンマスが田撲されている。やつらは群れで動くので油断しないよ。」「

隊長の注意があり、それぞれ周囲の探索に出る。  
個人で動くと危険なので班単位で動く。

今回は4人一緒に、この班だけ人数が多い。

魔物を目撃したらホイップルを鳴らし、討伐隊全体が集合するのである。

最も参加している班が、今回は多くない。

探索開始。

森というほど鬱蒼としてないが、足場は安定していないし、見通しも悪い。

張り切つている滋郎と真琴は班長達と共に前方を歩く。

その少し後ろに貴人と春日。

そのまた後ろにベテランの騎士が一人。

「大丈夫か？」

さつきから春日は一言も話さない。

「……はい」

「別に戦わなくて良いんだぞ」

現実を見ておくことは大事だと思う。

だけど戦わないといけない、ということはない。

特に春日は戦わないで欲しい。

及川が何のために救世主になつたのかという話だ。

「でも」

「！」で戦おうが戦つまいが、いざとなつたらどうにかなるつて

樂観的だが、春日は「」で戦つても向にもなりなこと無いのだ。

「竹の」

「え？」

「及川もこるし、滋郎もマロもこる。春日は戦わなくて良こ

「わたしひとりだけそんな、」

「俺が良こつて言つてるんだから良こんだよ」

「田の前でひじひじわれるといだれこ。

」で戦つてその罪悪感とか嫌悪感とか負の感情でまた落ち込まれることも田に見えていて。

「お前は守りれてる」

春日の頭に手を置き、前を見据える。

「来たみたいだな」

春日もつられて前を見、息をのんだ。

笛がある。

集合、そして戦闘開始の合図だ。

「来たあ！ ジロ！」

「はいっす！」

走り出す二人。

楽しそうで何よりだ。

「 / : 「

真琴の放った水球が、勢い良く魔物にぶつかる。

魔力を多めに乗せればその分威力もスピードも上がる。

一番最初に覚えた基本中の基本だが、真琴が使えばかなりの威力だ。

「 / : 「

滋郎の放った風の刃が魔物を切り裂く。

魔物の体は真っ二つに裂け、血が吹き出る。

青い。

魔物の血液は青か紫が多いのだ。

「 / ; 「

繰り返し、繰り返し。

滋郎が風の刃を無数に操り、魔物を細切れにしていく。

その様子を見て、春日が涙目になる。

顔色も悪い。

何で当事者があいつらは全然平気そうなのに、何もしていない見ているだけの春日がこうなのか。

不思議だ。

二人が調子に乗ったおかげで、貴人を含め他の騎士たちは出番なし  
だ。

「いやー、大丈夫だつたわ。余裕余裕

魔物の強さと、生き物を殺すことに対しての両方か。

「そうっすね。魔法で攻撃つていうのと、モンスターの形状がかわ  
いくないからつていうのもあるんすかね」

あつさりと言つてのける一人。

まあ吐かれたり鬱になられるより全然良い。

「お、お強い、ですね……初めての戦闘だとお聞きしておりました  
が」

班長が頬を引き攣らせながら言つ。

「魔物討伐は初めてつすけど、まあ、慣れてますから

滋郎はおそらくゲームや漫画で耐性があると言いたかったのだろう。  
しかし班長はそういう意味で取つていない。  
取れるはずもない。

「意外と魔力使わなかつたね。つていうか火の魔法使いたかつた!」

真琴は火の魔法が一番相性が良いようだ。

しかし森で火を放つわけにもいかないと、今回は禁止されている。

「でもこの程度じゃあ救世主になんてなれないから、ここにいるんすけどねー」

厭味だ。

お前たちより遙かに多いこの魔力を持つてしても、救世主ではないのだと。

にっこりと爽やかそうな笑顔で言い放つ。

滋郎は根に持つタイプである。

「あ、先輩は良かつたんすか?」

「別に良い」

魔物討伐は何回か参加予定になつていて、進んで戦いたいとは思わない。

見ている分には気分が悪いこともなかつたが、自分の手に掛けるとまた違うのだろうか。

「それよりも終わつたなら早く帰りづ。春日がヤバイ

口元を手で押され、蹲る春日。

「わ! 春日チャン大丈夫! ? ジロ、おぶれ! ?

「え、俺つか! ?

「当たり前だる、わしだら! ?

滋郎は渋々嫌がる春日をおぶり、歩き出した。

その様子を奇異の目で見る騎士たち。

貴人はこつそりと溜息を吐いた。

魔物討伐が終わり、翌日は休日。  
エディが気を遣つてくれたのだが、貴人は何もしていない。

春日は体調不良でベッドの中で、真琴は一層火がついたらしく、とうとう騎士団の訓練に混じつている。  
及川と同じところだ。

そんなわけで男一人、ぶらり城下町。

「あ、この店閉めたんだな」

前に寄つた薄暗い店だ。  
扉には休業のお知らせが貼つてある。

「まあ無理もないっす」

他の5店舗に比べ、格段に人気がなかつたのは見ればすぐにわかつたことだ。

「どういつ意味ですかああああああ

突然の大声に驚き振り返るとそこには、号泣する猫背の店員がいた。

「こんなに、こんなに頑張つてるのにいいい」

じろじろと町行く人に訝しげに見られ、2人は慌てて店内に逃げ込んだ。

青年を引き摺つて。

「いや、すみません、取り乱しちゃって……あ、僕はイグレッシィオと言います。どうぞグレッシとお呼び下さい」

ようやく落ち着いたらしい。

差し出されたお茶を啜り、息を吐く。

「じつは僕、外国で絵の勉強をしてたんです。でも父親が亡くなつて、店をどうするかって話になつてそれで」

画家の卵なんて儲からず、副業でどうにか食べていた日々。

突然の訃報。

父の店を閉めてしまつのも嫌だという兄弟との話し合つによつ、一番条件の合つイグレッシィオが店を引き継ぐことになつた。遺されたレシピを見て店を開け、副業としてケーキ屋を営みつつ、絵の勉強をすれば良いと。

しかし、この有様である。

人に押し付けた癖に兄弟たちには詰られるしで最悪だ。

「「……」

再びぼたぼたと涙を流す青年に、貴人は慰めの言葉をかける。

「今までケーキ屋で働いてたわけじゃなかつたんだろ？ 頑張つたな」

「結果は努力だけでどうにかなるもんじゃないし、しょうがないですよ。売れないもんは売れないっす」

「「……」

「バツカ滋郎、落とすんじゃねえよ、上げろよ」

「あーせん」

滋郎に口無じこされた。

うざい。

「それでこれからどうあるんすか？」

茶請けに出されたクッキーを食べ、お茶を啜る。うん、硬すぎる。

「それなんですね……」

落ち込むイグレッシュイオに、滋郎が優しく声を掛ける。

「それなんですかね、職人を雇えれば良いと思つたよ」

「おい、まさか」

「やうつす。俺たちを雇いません?」

「え?」

滋郎の言葉にイグレッティオは目を丸くした。

「じつは職人なんすよ。雇つてもうえればこの店、立て直しますよ?」

「ほ、本当に……?」

「本当つす。任せて下さー」

滋郎のその自信は、一体どこから來てるのか。  
人に押し付ける気満々なんじゃないだろつかと思つのだ。

結局こうなるんだよな。

貴人は溜息を吐いた。

面白そうではあるが、どうなつても責任は取れないぞ。

「それで、この店のウリは?」

「はい?」

「セールスポイントとかコンセプトとか」

「そんなものあつません。父親の残したこのレシピを見て作つてゐるだけですから」

イグレッシュ・イオは自慢げにレシピを掲げながら言つたが、それは自慢して良じところではない。

「……それでよく頑張つてるとか言えたつすね」

店内に滋郎の呆れた声が響く。

氣を取り直して。

「あー……前の店と大分変わつても大丈夫か?」

「ええ、それはもちろん! 店があるつてだけで兄弟たちは満足なんですよ」

「それなら良いけど」

この世界に来てまだ日も浅く、前の店舗の情報も少ないとなると、おそらく全然違う店になる。

立て直せればそれだけで良いつていうのなら、なんとかなるかもしない。

まず敵を知りう。

イグレッシィオに他店のお勧めを色々買つて来て貰つた。

胸焼け胃凭れと戦いつつ、他店の傾向を探る。

「これが一番人気の店のだな。全体的に小さめで作りが丁寧。値段も高め、高級感がある」

「で、こいつが一番近い店つすね。素朴な味わい、若干大きめ、安い」

「この店はマフィンの専門店です。種類がたくさんあって人氣です」「こいつの店は……フルーツをウリにしてるんすかね。フルーツの使用量が多いっす」

「つうかこいつのケーキは全体的に甘めだよな……この店は作りは丁寧だけど手頃な値段設定。立地が良ければもっと人氣でそう」

ミント系のすつきりしたお茶を飲む。

「そこまで特徴のある店はないか。こいつの世界はあんまりコンセプトとかないのかもな」

「そうっすね。逆にやりやすいかもしないっす

被る心配がないという意味ではやりやすい。

「まずは品揃えからな」

どの店にも置いてある商品を滋郎に書き出してもらひう。

城下町で「定番中の定番」ということだらうし、この店でも外せない。

「やついえばこれ」

花型の焼き菓子の赤色のものを摘む。

「何味？」

味はベリー系なのだが、形は残つていなし、何よりこの世界の素材に詳しくない。

「ああ、アカの実ですよ。この町ではアカの実の人気が高いので」

イグレッツィオが指差したのは、ケーキの上に乗つた飾りだつた。赤すぐりによく似た赤い果実。

一回り大きく、酸味が若干少なく、甘みが強い。

「どのくらい人気なんすか？」

「そうですね……年中取れて値段もお手頃で、お菓子の定番といつか欠かせないものですね」

日本でいうと苺のような扱いか。  
味も良いし色味も良いから使い易いな。

「商品の種類の最終決定は試作してからだな。まずは設備に慣れた  
いし、明日から厨房借りるぞ」

「どうぞどうぞ」

「オヤジさんの遺したレシピも貸してくれるか？」滋郎<sup>シロ</sup>しておこう

てくれ

日本語で。

「はこつす」

「う、あとは店なんだナビ」

店内を見回す。

穴が開いていたつとこつ」とはないが、壁の色が剥げてこるのが気にな。

ところが、染みもある。

「改装とこつよつ塗装しよつせ」

「良こんですナビ、資金が……」

「資金つけての？」

「向つて塗装代ですよ」

色遣いが地味な世界なので、ペンキも高いかもしない。

「あー、ペンキ代はハイに値つよつ」

魔法の呪文、金利なし、出世払い。

自分達の職のためとこえば済むことはないと思つ。

「ペンキ代ではなく塗装代ですよ。塗装だけでも結構な額が掛かる

んです「

「……ペンキは調達するんでグレッシさんが塗るつて」とつすよっ。」

囁み合つてない会話に滋郎が注釈を入れる。

「え？」

「絵描きなんだろ？ 壁をキャンバスだと想つて塗れば良いんだよ」

「わー先輩無茶振り。でもよろしくつす

むらがあつても手作りっぽくて良いんじやないだろつか。  
いつそそういう風にしてしまうのも良いかもしない。

ただ手作り風が日本で受けっていたのは、それが一般的ではないからだ。

この世界ではむしろ手作りが一般的である。  
受けるかどうかはわからない。

「あ、そうだ。グレッシ、アンタの描いた絵を見てみたい」

この世界初の絵描きの絵だ。

書籍には一切絵がなかつたし、城に肖像画の類もなかつた。  
スケッチブックを見せてもらつ。

「いいね」

風景画や人物画が描かれている。  
色遣いは意外と大胆だ。  
良かつた、抽象画じやなくて。

「お、この花、アカの実の花？」

その風景画にはアカの実になりつつある、大輪の花が描かれていた。

「はい、そうですが」

「この花をさ」

新しい紙に、アカの花を描く。

細部を描くのではなく、デフォルメされたイラスト調のもの。縁は太めでオレンジ掛かった茶色、中は少し渋めの赤。中心は暗めの黄色である。

「これを真似て描いてみて」

さすが画家の卵。

貴人も下手ではないのだが、断然上手い。

「これ口<sup>ノ</sup>にしようぜ。」こういふイメージで外壁と店内の壁に絵を描いて

「壁に絵、ですか？」

「そう、直接な。どの店も普通の壁だったからインパクトあるだろ。外壁はアカの花が良いけど、店内は風景画が良いか」

店内には商品の色もあるので、少し落ち着いた絵が良いか。

「壁は任せゆからな。ちゃんとボロいと隠せよ。そのための絵で

「さあ、なんだか

むしろそのための絵である。

夕方になつてから店に籠り、試作を始めた。

菓子作りの基本の本と、イグレツツイオの父親のメモを参考にしている。

滋郎は原価の計算と売価の設定、店の飾りなど細かい部分を見直しを頼んでいるが、商品が決まらないことには動けない。

グレツツには勿論壁に絵を描いてもらつ。

看板や焼き菓子を置くテーブル、ベンチにもアカの花。

包装材はどの店も同じものを使つていた。

印刷技術が発達していないので、オリジナルの包装紙はひとつしても高くつくからだ。

高いなら作れば良い。

ということで、スタンプを作成。

アカの花と店名だ。

包装紙に押すだけなのだが、中々良い感じである。

包装紙が薄茶色なのでインクの色は赤みのあるオレンジにした。

この世界では包装紙で包み、茶色の紐で閉じ、花を飾るというのが一般的なようだ。

リボンというか布製品が高め。

さすがにもう少し安くないと導入できそうにない。

仕方がないので紐はそのまま、ただし包装の仕方に変化をつけるこ

とで妥協。

こちらの世界のオーブンは、見た感じ石釜だ。  
少しクセがあるものの、温度調整も出来るし性能はオーブンと変わらない。

ただ燃料が魔動石なので、うつかり燃料補充を忘れるといつもオーブンが止まる。

「よし、試作第一号の完成つと」

第一号はプチシューである。  
どの店にもショーケースが置いてあったので、それをアレンジしようと思つたのだ。  
カスターと生クリームを合わせ、アカの実を入れてアクセント。  
仕上げに粉砂糖を篩う。

プチにしたことも意味がある。

第一に食べやすさ。

第一に残つたときの処理、である。

「第一号も完成。マロ、試食よひじく」

「任せでー。」

出来るだけ色々と意見を聞きたいので、真琴を誘つてみたのだ。

「おこしーー！」の赤いの、クリームに合ひつねー。」

「アカの実だつてさ。そのまんまますぎる」

「確かに！　私この実好きだわ。ベリー系良いねー」

ベリー系が好きな女子つて多いよな。  
逆に男子は好きな人が少ない気がする。

偏見か？

「で、第一号な」

「うん、こつちも美味しい。軽いしサクサクいける。たまご工房にもあつたよね」

「そ、あれのサイズ違い。ラスクは小さい方が食べやすいしな」

第一号はシューの皮を使ったラスクだ。  
売れ残つたシューの皮をうまく処理するための商品でもある。

「ラスクがある店はなかつたし卖れないかもしけなけど、とりあえず捨てるよりはマシだろ」

試食を出せば売れる可能性もあるし、何事もやつてみないとわからない。

真琴の反応は良いし、グレットにも試食してもらつてから商品に加えるかどうかを決める。

美味しいか、美味しいか。

売れるか、売れないか。

作業効率が良いか、悪いか。

色々考えて商品を決めていく。

本日の試作はこれで終了。  
日中に授業がある日はそんなに長く時間を取れない。  
試作品の残りを持って城に戻る。

「あ、リゲル」

「マコ、キイト。出掛けたのか」

「俺と滋郎が城下町のケーキ屋で働くことになつたうなんだ。  
試作に付き合つてもらつてた」

「ケーキ屋？ 意外だな」

「フジムは元々家がケーキ屋さんなんだ」

イメージに合わない、とはよく言われる言葉だ。

「あ、そうだ。これ、試食してくれるか？」

貴人はリゲルにプチシューを渡す。

リゲルはこの世界の女性なので、試食にぴったりの人物だ。

「アカの実か。私も好きなんだ」

プチシューを口に運ぶ。

「美味しい。こんなに美味しいショーキャラムは初めて食べたな」

「大袈裟。でも、ありがと」

あまりお世辞を言いそうなタイプと思わなかつたので、少し驚いた。  
素直に嬉しくもある。

「クリーム、ついてる」

リゲルの唇の端を、親指で拭う。

「うわあ……」

真琴が微妙な表情で呻く。

「何?」

「何でもない」

苦笑いだ。

リゲルも不思議そうにしていて、真琴は私がおかしいの?...どうひかる。

「そういえば、何で“魔女”なんだ?」

ふと不思議に思つたことを聞いてみる。

前に少し聞いた氣もあるが、この際色々聞いてみよう。

「“魔女”は単なる通り名だが……そうだな。その昔精靈の血を浴  
びた事で不老不死になつた。それだけだ」

「不老不死……700年も？」

「こままの姿で700年以上生きている。皆先に逝き、私だけが永遠に取り残される。……だが、後悔はしていない。大切な人を守れたことが、むしろ誇らしい」

穏やかな微笑み。  
やさしい表情。

「大切な人？」

何となく引っかかる。  
もやつとするというか。

「師だ」

師。

そういえば前に聞いた気もするな。

しかし精霊の血を浴びると“魔女”なんだとすると、他にも“魔女”がいてもおかしくないのでないだろうか。

「精霊の血を浴びて不老不死になるなら、リゲルの他にもいるんじゃないのか？」

「いない。精霊は元々、人の手で傷つけられる存在ではないのだ」

「じゃアリゲルは何で……？」

「精靈によつて作られた武器でない、精靈を傷つけること」が出来る

「精靈つて武器なんて作るの？」

確かに。

貴人の中で精靈は自然と一体化して暮らしていくよつた、そんなイメージだ。

妖精でも妖怪でも言葉は何でも良いが、人前に出てこないといつたか。

「……かなり特殊なことなのだが、この世界に精靈の作った武器が5つある」

「へえーーー！」

ますますゲームみたいだ。

勇者がその武器を集めてラスボスを倒す、なんてよくある設定。

「今は封印されているが……そつだな、いざれ向かわなければならない。時が来れば……」

リゲルと別れ、部屋に戻つた。

春日はまだ寝ているよつた。一番手前の部屋だ。

滋郎は解体に行つて来ます、と日本語でメモがあつた。待て、何を解体する気だ。

「何かさ。武器が5つって出来すぎでない？」

「俺も思った」

「私達、本当は巻き込まれて5人なんじゃなくて、わざと5人呼ばれたんじゃないかって思える」

それには同意だ。

「何があるんだろうけどな」

現時点ではそれが何なのかはわからない。だがどう考えてもその5つの武器が怪しい。怪しそう。

「ま、いつか。その時になればわかるでしょー。」

軽い。

軽すぎる。

ただ今それを考えても答えは出ないのは確かで、それなら他に時間を割いた方が良い。

「それよりも今は店の再建よねー。」

その通りだ。

店の再建が第一である。



「わたし、これからどうすれば良いんでしよう……」

春日は目を伏せ、力なく咳く。

貴人はりあえず茶を淹れた。

試作のシユーラスクも添える。

魔物討伐で一人だけ気分が悪くなってしまったことを気にしているらしい。

大丈夫だ、たぶんそれが普通。

普通じやない2人と比べてはいけない。

「及川先輩やマ」「先輩みたいに戦えないんです」

「戦わなくて良いって」

「藤村先輩や宮尾くんみたいに、働くお店もない」

高校1年生の5月だし、アルバイトもしたことがない春日にいきなり働き口を探せというのは難しいだろう。

本来ならば高校3年間と大学の4年間という期間があつたはずなのだ。

しかも春日は英語科。

この世界で活かせるというわけでもない。

その上いきなりの異世界召喚で、将来のビジョンなんてそうそう浮かぶはずもない。

一番普通の反応をしてくるはずの春田だが、周りがおかしそうで思  
い悩んでいるようだ。

「貴族に引き取られるまでもまだ時間はあるんだし、急ぐことないだ  
う」

そもそもビーの家に引き取られるかといつことも決まっていないの  
だ。

「引き取られた貴族の家業を手伝うことになるんじゃないかな?」

引き取る方も、視界に入る場所にいたほうが助かるだろ?」

「それが嫌なら……他の職に就くか」

城下町に住むことになるのなら、騎士団に所属か飲食店や販売店。  
町の一角にある工場地帯で働くのも良いだろ?」  
この工場地帯は魔動石そのものや魔動石式の道具、紙、木工品など  
が作られている。

原料となるものはHTラン国内の地方の村などから運ばれてくる。  
市場や中卸といつものは特になく、それぞれ商人が個人で切り盛り  
していたり、生産者が直に店に売り込んだりする。  
地方でも良いのなら原料の生産という手もあるが。

貴人の中で春田のイメージは衣服系の販売店だ。

布は遠方の村や町から運ばれてきて、それぞれの店舗で衣服などに  
加工される。

よつてそれぞの店は単なる販売店ではなく、製造も行う。  
全体レベルで見ると効率は悪いし、費用は掛かるし、価格の変動が  
激しいと良いことがない。

しかし店によってかなり特徴が出るので、それはそれで面白い。

「春日は何がしたい?」

「何がしたいって言われてても……」

「じゃあ何がしたくない?」

「たたかいたく、ないです」

「あそ уд аよな。」

「一番良いのはケーキ屋に引き込むことなんだろうが、自分の店でもないし、そもそも現段階で人が増えてもどうしようもない。」

「とりあえず引き取り先が決まるまで、色々見て回つてしてみたいことを探そう。ないなら自分で条件言つてHiteiに探してもいいつても手だし」

『氣落ちした春日の頭を撫でる。』

「大丈夫だつて」

「考えすぎだ。」

『真琴と足して2でわればちょうどいい感じである。』

春日と別れた後、貴人は調味料試作の昼食を持つて、滋郎とエディに合流した。

昼食を食べながら滋郎の開発成果を見る。

「先輩！ 遅いっすよ！」

「悪い」

本日の昼食は魚介系焼き飯だ。

透明の魚介系調味料の試作である。

こちらの料理は煮込みとグリルが主流なので、あえて炒め物を多く作ることにしている。

フライパンはなかつたが、パスタ鍋という似た様な鍋を発見したのでそれを購入したのだ。

出世払いだ。

本来の用途は炒めるのではなく、軽く火を通し絡めるものらしい。

やはり鉄製の鍋が欲しい。

フライパン、中華なべ、強い火力。

炒め物には必須だ。

「じゃーん！ こっちの試作一号も出来たっすよ

「万年筆？」

エディが使っていたペンと同じ型だ。

「ここの世界のペンはインク内蔵型の使い捨てか補充型なんで、日本と一緒になんすけど」

滋郎は誇らしげにペンを掲げる。  
テンション高いな。

「じつはこれ、初の魔術式なんです！」

「噛み砕いて話せ

何だその魔術式って。

この世界の道具は基本的に魔動石を使用する。  
もちろん手動式もあるが。

滋郎の言つ魔術式とつのは、魔動石を使用しないものの総称らしい。

まず、魔法とつのは魔記号を使つ5属性の攻撃・防御・補助。  
魔術とつのは魔法とは別もので、使う魔力は同じだが質が違う。  
大雑把に言えば5属性に当てはまらないものが魔術である。  
魔記号を刻み、魔法を発動させる道具の類は厳密にいつと魔術にな  
るらしい。

つまりこのペンはそういうことだ。

「使用者の魔力を使ってインクが出るんすよ。つまり半永久的に使  
えるペン！ 補充いらす！」

使用魔力も微々たるものらしいので、この世界なら赤ん坊でも使え

る。

「たかがペン、されどペン。初めてこしては中々だと思つりますよ」

開発開発言つてたからな。

嬉しそうだ。

「これなら今までのペンもそのまま使えるし」

なるほど。

日本から持つて来たペンも魔術式にしてしまえば、インク切れにならないわけか。

とは言つてもキートは筆記用具の類を持つていないのでが。

「あー早く大物作りたいっす」

「あ。もしかしてあの透明の剣もそういうことか?」

騎士団の訓練を見学したときにみた、あの透明の剣。

「ええ、そうです。あれは氷の魔法を組み込んだものですね」

やろうと思えば、魔法で氷の剣を出現させることは出来る。  
しかしそれだと戦いにくいので、ああいう魔術式の剣を使うのだと  
うだ。

媒体となる剣に氷の魔記号、刃の魔記号、維持の魔記号などを刻む。

あとは使用の際に魔力を流すだけで良い。

慣れれば魔力を流しつつ、他の魔法を使えるので便利である。

「 セウカ…… 良こよな、 あれ」

炎の剣とかちよつと憧れる。

「 待つてて下さい、 先輩！ 俺が作るつす！」

それいつになるんだよ。

「 滋郎君ならばすぐに作れるんじやないでしょつか」

「 技術革命王に、 俺はなる……！」

「 あはは！」

異様にテンションの高い滋郎を抑えつつ、 店に向かった。

アーリー・ヒーリング・セラピーハンマーリング

## 石造りの町並み

## 海と夕日の見える風景

「すごいっすね、さすがプロ。俺、萌絵しか描けないっす」

「それもすごいと思つけどな」

集中しているようなので挨拶は後回しにして、試作を始める。

「今田さんは、なんですか？」

「とりあえずシート焼くか」

シートというのはたまご工房で使用していた天板型のスポンジだ。ロールケーキの生地なのだが、丸型で抜いて重ねればテコレーションケーキにも出来る。

「んじゃ 計量しますね」

「頼むわ」

計量を滋郎に任せ、貴人は買出しに出た。  
目的は果物である。

「こちらの果物の旬はよくわからないが、アカの実・ヨシの実・ブルーベリー・モモなどが並んでいる。

元の世界にあったものもあれば、見たことのないものもある。見た目が同じでも味が同じとは限らない。

試食のためにも一通り買ってみよう。

ついでに近くのケーキ屋にも寄つてみた。

10種類以上の生ケーキとたくさん焼き菓子。

この店に限らず、生ケーキよりも焼き菓子の種類が多い。籠の中に焼き菓子を入れたギフト品もあり、焼き菓子に力をいれていることがわかる。

「ギフトか……」

売れるのであれば何か考えないとな。

元の世界にもあつた乾燥剤や脱酸素剤の役割を持つものもあり、賞味期限はさほど変わらないだろ？

「その前に焼き菓子か」

マドレーヌが花の型になつているくらいで、他はそんなに変わらないように見える。

エトランはあまり他国の文化が入つてきていないので全体的な種類はそんなに多くない。

定番の商品は早めに試作してみよう。

店の改装が終わつたら早めに営業を再開したい。

シートを冷ましている間に、果物を試食してみることにした。  
ブルーベリー やモモは見た目通りの味だった。

拳大くらいの緑の実はスイカ味、ただし食感がメロン。

そしてこちらのバナナは中身は一緒なのだが皮は茶色だった。

「……うん、まあ味覚が同じで良かつたすよね」

確かに。

味覚が違つたら食べ物の確保が厳しくなつていたかもしれない。

冷めたシートにクリームを塗り、巻く。

ロールケーキである。

これの上にクリームを絞り、フルーツを飾りテコレーションしたロールケーキも作つた。

クリームにアカの実を混ぜ込んでみたり、チョコクリームにしてみたり、バリエーションも様々。

カットしたものとロールのままのもの、両方を売り出す。

「普通の白と、アカの実が美味しいです」

「俺はチョコがいいです」

これは単純に好みの問題だと思うので、出来るだけ種類を並べたい。  
あとは売れ行き次第で絞つていけば良いし、期間限定品にしても良い。

基本は一緒なので試作はしないが、丸型の「コレーションケーキも並べよう。

このシートはタルトや他のケーキにも使うので多めに焼かないといけない。

冷凍保存が出来るので、焼けるときまとめて焼いておいた。  
残りを冷凍庫に入れる。

「え？」

貴人が振り返ると、イグレッシュイオが目を丸くしていた。

「何だ？」

「そこ、冷凍庫ですよ？」

冷凍庫を指差して、首を傾げている。

「うん」

当たり前だ。

冷凍保存するのに冷凍庫にいれずにどうするところなのだ。

「え？」

「え？」

「……この生地、冷凍保存出来るんですよ」

見兼ねた滋郎が助け舟を出す。

「ええっ！？」

何その驚き様。

「冷凍技術はあるのに冷凍保存はしないのか？」

不思議だ。

もしかしたら「」につが知らないだけで他の店ではしてるんじゃないだろうか。

「え、だつて、でもそんなことメモには……」

確かにメモには作り方しか書いてなかつた。

菓子の基礎の本にも冷凍保存のことは載つていない。

「まさかと思うけど……ケーキ、毎日一から作つてたのか？」

「え、はい」

「…………す」「」つすね

「ありえん。だからこの店だけ種類が少なかつたんじやね？」

「たぶんそうですね」

「え？　え？」

よくわかつていないので、イグレツツイオは滋郎と貴人を交互に見ておたおたしている。

「まあいいや。この生地は焼いたあと、冷凍保存出来る。他にも冷凍出来るもんは教えるから」

一人で毎日、よく頑張った。

すゞ、すゞよつん。

「とつあえず今日は帰るわ。また来る」

お土産兼試食にケーキを持って帰る。シュー、ケーキと来たら次はタルトかパイか……。そういえばメモにも本にもパイがなかつたなと思いながら、2人は帰路についた。

「帰りたい……帰りたいよう……」

膝を抱え、蹲る。

この世界で暮らしていける気がしない。

春日はひとり、泣いていた。

今春日いるのは地下の一室。

室内なのに泉があり木も生えているという不思議なところだ。人も来ないので春日のお気に入りになつていてる。

「うへへ……」

泣き言を言つてもどうにもならない」とくらいわかっている。そつは思つても、涙が勝手に出てくるのだ。

この世界に馴染めない。

戦うとも出来ないし、かといって働くことも出来ない。異世界の人の中に入つていくことが、怖い。

どうして皆、入つていけるんだろう。自分がおかしいのだろうか。

勉強は好きだけど、趣味という趣味はなく、特技もない。テレビや映画、雑誌は好きだし、買い物も好き。だけどそれが仕事に繋がるかといえばそりじやない。

魔法だつて先輩達は3つ以上属性がある。それなのに春田2つ。

それも水と風で、光という貴重な属性でもない。

どうしたら良いのだね。

春日は溜息を吐いた。

冷たい水に手首を浸す。

気持ちいい。

ちやぱちやぱと遊んでいるうちに水底の文字に気が付いた。

「ん……？」

詩だろうか。

興味本位で読み上げてみる。

覚えたての言語が楽しくて、つい色々読みてしまつのだ。

「えつと……」

『チカラが欲しければ 我を呼べ 我が名は  
なり』

「名前、ないのかな」

名前の部分が読み取れないようになつていて、  
文字が消されているといつも、削り取られているのだろうか。

「名前かあ」

家で飼っている子犬を思い出す。  
白いロングコートチワワだ。

「藤花、元気かな」

きやんきやんとかわいらしい子犬。

春日がソファに座ると、膝の上に来たがるのだ。

まだ小さいので自力で登ることは出来ず、抱きかかえるのことが常だつた。

また目が潤む。

帰りたい。

家族も心配しているだらう。

帰れないと説明されたが、どうにかならないだらうか。  
富尾君なら出来そうな気がする。  
なんとなくだけど、富尾君だし。

『帰るために、チカラが欲しい。チカラを下さい。……白く氣高き  
わん』

何がなく、咳いてみただけだつた。

その一言で、何かが起きるとも思わずには。

驚愕で見開かれた目、そして叫び声。

その声を聞きつけて騎士が、及川が、走る。

そしてその場に駆けつけて来た時見えた光景は

。

人を丸呑み出来そうなほど大きい白い蛇と

。

「フジム！ ジロ！」

部屋に戻ると真琴が慌てた様子で一人の腕を引いた。

「来て…」

一番奥の女子部屋に連れ込まれ、一人はその光景に目を瞠つた。

「ぶふつ」

「……」

笑いを堪えて滋郎を叩く貴人と、我慢出来ずに噴出す滋郎。

「え、何それ。笑うとこ？ 他に反応ないの？」

2人の目に映るもの、それは。

小さな白蛇と楽しそうに戯れる春日と、蛇にびくびくしながらも一緒に戯れようとしている及川。

春日に絡んだ白蛇が動くたび、体を大きくびくつかせるのが面白い。

「いやーあいつよっぽど春日好きなんだな」

健氣だよなあ。

貴人は2人に聞こえないように小さく呟く。

「え、そこー？ ちうじやなくて、春日チャンが白蛇巻いてる」と  
に反応しない？」

「あ、そこか」

「ペツトツですか？」

「……もつこい」

真琴が拗ねた。

「あ、おかえりなさい！」

こちらに気付いた春日が、満開の笑顔で出迎えてくれた。  
こんなに明るい春日を見るのは初めてのことである。

「それ、どうしたんだ？」

「地下の泉でもうつたんだ」

「そういえばあつたな。

室内に泉があるなんてす」いなと思つた覚えがある。

「もひつたつて誰につすか？」

「えーっと……大きい白蛇なんですねけど……精靈らしきです。泉の精靈」

「精靈つて白蛇なんだ。イメージと違つた」

「IJの世界は俺に厳しいつす。IJといぐとく夢を破壊……」

そんなに落ち込まなくてもいこと思ひつたが。

「精靈すべてが蛇つてわけじや……。それで泉の精靈にこの子と、精靈の巫女の力つていうのをもひつました」

「へー」

精靈の巫女の力。

よくわからんが、もひつて困るものではないだひつ。

「精靈の巫女つすか。やっぱ回復系？」

「もうみたい。Hディさんが回復系魔術の才能が開花したはずだつて」

「おもしろひつすねー」

滋郎は好奇心満載の顔でメモを取り出す。  
いつも持つてゐるけど、そのメモは一体いつになつたらこいつにならぬのだらうか。

「あ、そうだ。フジムもジロも、明日から回復系魔術つてのやることになったから」

「俺らもつか？」

「そ。春日チャンひとつじや寂しいでしょ。少しでも使えた方が便利だし、一緒にやつてみようつてことになつたの」

「すみません……」

落ち込む春日元氣たえる及川が面白い。

こつそり笑う。

「あ、そーだ！ マコ先輩、これこれー！」

「何？」

滋郎が自作のペンを取り出した。

午前中に魔改造していたペンである。

「使用者の魔力を微量ずつ使うタイプで、インクいらずなんすよ。

今日改造したんす」

「へえー！ おもしろいー 私のもやつて！」

真琴は自前の筆箱を漁り、ペンを数本取り出した。

学校で配られた入学記念の万年筆に、女子の支持率が高いカラフルなペンが数本。

いつ見ても何に使うかわからない色のバリエーションだ。

自分の赤と黒しか入ってない筆箱を思い出し、苦笑いする。

「フジムは？」

「俺は筆箱持つて来てない」

皆渡り廊下で召喚されたのだが、そのときの持ち物は様々。貴人は手ぶらで、ポケット中に携帯と財布が入つていただけだ。他の4人は何かしら荷物がある。

「あ、これも忘れてた。試作のロールケーキなんだけど、」

「食べるー！」

「はえーよ」

珍しく及川も加わり5人揃つてのお茶だ。  
騎士団の話や戦争の話など、色々と聞く。

エトランには侵略が始まつていないが、やはり時間の問題だという。  
もしも東隣の国<sup>アステ</sup>が勝てば侵略はないが、おそらく負けるだろうというのがエトランの見解らしい。

「あ。トーカー！」

白蛇が春日の肩からテーブルの上に移る。  
及川がさりげなく距離をとる。  
そして白蛇がロールケーキを、食べた。

「……蛇ってケーキ食うんすね」

「変わった蛇だな」

「トーカは一応、魔物に分類されるらしいので……蛇とは違つんじやないかと……」

魔物がケーキを食べるのも、十分不思議だけどな。

翌日、回復系魔術の授業が始まった。  
春日の腕には白蛇が巻きついている。  
及川がいなくて良かつたと思つ。

「あまり得意ではないのですが、一応教えることは出来るので……」

元々回復系魔術の使い手は多くない。

都合がつかなかつたのか、回復系魔術の講師もエディのようだ。

「回復系魔術の種類から説明しますね」

回復系魔術はその名の通り、回復する魔術である。

怪我の治癒だつたち疲労回復だつたり、その内容は様々。

この2種類に關しては“精靈の巫女”と呼ばれる回復系魔術の才能の持ち主でなくとも、使い手がいるらしい。

あとは解毒や浄化といったものもある。

解毒の魔術もそのまま、毒を解す。

浄化の魔術もそのまま、浄化。

が、この浄化は種類があり、衣服の汚れを落とすものから呪いの解除まで含まれる。

「カスガさんは今後、白の塔で生活してもいいことになります。そこで仕事も『えられます』

「白の塔?」

「はい。城の敷地内にある、その名の通りな白色の塔ですね。精霊の巫女が住まう場所です」

要するに、寮?

「精霊の巫女は外に住むとわざと面倒で、白の塔での生活を推奨しています」

「面倒って何なの?」

「毎日癒してくれと殺到されますよ」

「.....」

「あの.....それってわたし、ひとりですか.....?」

不安げにエティを見上げる。

「うつ.....そう、なりますね」

春日の攻撃。

エティはダメージを受けた!

などと妄想しつつ、説明を聞き流す。

「私も白の塔に住みたいんだけど」

「アーティスは精霊の巫女ではないので……」

「特例作つてー。」

「そんな無茶な！ 白の塔は精霊の巫女と侍女しか？」

「はいけつてー。」

早いな。

しかしこれで全員の方向性が決まつたことになる。

「認められるかどうかはわかりませんが、話は通しておきます。それはそうと今後のことですが、共通語と魔法の授業はもう十分ですので、魔術について少し授業して……そうですね、一月後くらいにはそれぞれ後見人を紹介できるかと思います。まあ大体決まつてるんですけど」

「決まつてるのに一ヶ月？」

「書類とか手続きとか黙らせるとか色々あります」

黙らせるのか。

「虽然アーティスの四大公爵家に引き取られることがなつますので、不自由はしないと思つますよ」

「それは良かつたつす。色々道具開発したいんで援助あてにしてるんすよ」

「才能もあるし、ジローさんの開発は面白やつですね」

道具つくりのための基礎である、魔記印を刻むこと。  
これは中々難しきものらしく、滋郎には才能があるといつ。

「まずは先輩の武器を作りたいっすからね」

「おお、武器ですか。どうこうする所ですか?」

ヒーリーと滋郎が嬉々として武器の話を始める。  
回復系魔術の授業はビリした。



本日の試作はタルトである。

タルト生地にアーモンド生地をいれて焼き、スポンジとカスタードクリームを挟み、フルーツを飾る。

空焼きしてリアチーズを流しても良いな。

同じ生地でクッキーも作れる。

これにはチョコレートクリームを挟もうか。  
それからプレートにも利用しよう。

クッキープレートに文字を書くのだ。

お誕生日おめでとう、とか結婚記念日、とかそういうプレートである。

イグレットティオに確認したところ、文字を書くサービスといつのは  
ないようなので売りにしてみることにした。

サービスといつても有料である。

クッキープレート1枚購入で文字入れ致します、と。

この世界ワールドというよりエトラン国は、無料なものが少ない。

日本でも買い物袋やごみ袋の有料化が進んでいたが、レジではさら  
にケーキの箱までも有料だ。

紙が高いからかもしれない。

そうなると持ち込みも多いらしく、中には鍋を持つてくる強者もい  
るとか。

ちょっと見てみたい。

「大分商品も揃つたな」

壁にも花や風景画が描かれ、明るい雰囲気になり他店と比べ遜色のない程度に種類も増えた。

焼き菓子の陳列も籠などの小道具を使い、ギフトも用意してある。どうにか箱が安く手に入れば、もつと色々出来て良いのだが。

「オープンが楽しみです！」

「客、戻つてくれればいいな」

「！？」

元々評判が落ちてこの様なわけで。  
そう簡単に戻つてくれるかどうか。

と、いうわけで試食と売り込みを考えた。

試食は単純に店の前で配るというだけなのだが。

この町のレストランで、料理はおいしいのにナガートはマイマイ、  
という店をピックアップ。

その店にケーキを売り込むという案である。

それだけで売り上げになるし、そこで評判になれば集客になる。  
オープン前に売り込んでおきたいところだ。

候補は現在、滋郎と一人で食べ歩きをしながら探している。

「あ、そうだ。俺明日からちょっと籠りますんで」

候補のレストランから出で、滋郎が弾んだ声で宣言する。引き籠もり発言つて嬉しそうにするものだつただろつか。

「は？ 店どうすんの？」

「先輩に任せます！ 僕ちよつと急いで武器作りたいんですよ」

「何で」

「魔物討伐2回目、そろそろじつにます。先輩が無双する武器をちよといと」

ちよことつてそんな簡単に出来るものなのか。

「なんでリゲルさん誘えばいいんじやないつすかね。ここの人だし、一応女の人だし」

「一応つてお前……でもそうだな。それも良いかもな」

この世界では初デートである。

リゲルが誘いにのつてくれれば、であるが。好意の有無はどうであれ、かわいい女の子と2人で出かけるといつのはちよつといい気分だ。

戻つたらせつそく誘つてみよ。

「マコも来るのか？」

誘つてみて第一声がそれつてどうよ。

「いや一人で行きたいんだけど」

「マコも誘いたいんだが」

「わかった。今回はマコも誘つ

でも次回は誘わない。  
何が何でも誘わない。

つかこれ脅ないよな、完全に。

「いやー何が「メン」す「」期待に満ちた目で誘われたから断りにへへへ」

確かにあれでは断れまい。  
真琴に罪はないと思つ。

城下町の大通りを歩きながら、真琴は手を合わせた。  
前を行くりゲルは、おぼろげな記憶を頼りに田印を探している。  
いつもは連れて来られているらしい。  
一体誰に。

その店は何でも、大通りから細い路地に入つたところにある、知る人ぞ知る隠れた名店であるといつ。

メニューはなく、おまかせの料理しか出てこないその店は、デザートがないらしい。

中々好都合である。

日本の飲食店は「デザートがない店を探す方が難しいが、こちらでは逆だ。

それがケーキ屋が6店舗もあり成り立っていた理由なのかも知れない。

「この国で「デザートは家で寛ぎながら食べる、という人が多い」

なるほど。

道理でイートインの出来るケーキ屋がないわけだ。

人数に余裕があればイートインもしてみたいが、今のところは無理である。

そもそも売り上げがないと今の人数から増やすことも出来ない。

ようやく探し当てたその店は、黒い重厚な扉の向こう側。革張りのソファのある、高級感のある店だ。

「いらっしゃいませ、リゲル様」

「いつもの席は空いているか?」

一番奥の仕切られた個室風のソファ席がいつもの席らしい。

「好みの食材や嫌いな食材を言えば考慮してもらえる」

「あ、私、味が濃いものが食べたい」

確かにこの国は薄味だからな。

「じゃあ魚介系で」

「ではそれで頼む」

「かしこまりました」

一礼して、従業員が下がる。

出て来た料理は魚介のトマトクリームスープと塩の効いたフリット。野菜サラダのドレッシングはナッシュのペーストが入っているようで濃厚。バケットのトーストはガーリックとトマトの酸味が効いている。

「美味しい！ フリット最高……！」

「皿」

素材は新鮮。

味は濃い。

特にこのドレッシングはかなり好みだ。

食後にお茶を頂く。

すっきりとした味わいで、消化を助ける効果があるらしい。

「今度滋郎を連れてくるか……」

「それがいいね！」

濃い目の味付けというだけで高ポイントである。

「好評な様で何よりだ。」その後はぱりぱりする?」

「んー……結構来てるしなあ。リゲルのおすすめは?」

ネタギレのようだ。

「せうだな。町の外になるが、案内したい場所がある

城下町の正門を出て右に曲がった。

城下町の外に出たのは2回目。  
前回は左に曲がり森へ入った。

ゆるやかな丘を上り、見下ろすと城下町が一望出来る。

「おーー!」

丘には巣穴のようなものがあり、その横にはアカの実がたくさんなつていた。

「リゲル、これは?」

巣穴を指差し、尋ねる。

「それは以前話した武器がある祠だ」

なるほど。

その祠は侵入出来ないよう結界が張られているようだ。  
貴人はまだ結界の魔術を使えないが、知識としては知っている。

「ここは、すべてのはじまりの場所。英雄の生まれし場所」

「英雄？」

「ああ、アカの英雄だ。すべてを、エトランを創った人物。」

すべてを創ったと言われる人。  
国を作った人。

「とても。とても素晴らしい人だった」

リゲルが少し悲しそうに微笑む。  
リゲルは700年以上生きているけど、英雄はおそらく普通の人間だ。

700年。

それだけ生きていれば数多くの別れを経験しているはずだ。

「私は英雄の意志を継ぐもの。召喚は英雄の意志であり、私の意志」

「そうしなきや、いけなかつたんでしょう？ 別に私達は恨んでないよ」

「……ありがと」

恨んでいなくても、真琴はきっとつらい。

春日も、及川も。

滋郎は微妙だが。

「なあ、逆召喚つて本当に出来ないわけ？」

「……今のところ、出来ない」

「ふーん」

今のところ出来ない、ねえ。

つづいては研究すれば出来るかも知れないってことか？

「 もう もの、 もう 無いわ。」

リゲルと別れ、 部屋に戻る途中。  
真琴が声を潜め唐突に言い出した。  
なぜここで。

戻つてからで良くないか。

「 何かあつそうだよな」

「 やつぱんやつ思ひへ、 どひするへ、 既に思ひへ。」

「 滋郎にひきおいた方が良いだ。 及川と春田は顔に出る」

「 うん、 賛成」

そのまま滋郎が籠つている部屋に向かつ。

籠る宣言をしてから、 仮眠用のベッドのある簡易工房を借りている  
のだ。

本気で籠るひしへ、 昨晩は戻つて来なかつた。

簡易工房は地下にあつた。

泉のある部屋の斜め向かい、 軽く防音が入つてゐるひしへ、 音漏れ  
が少ない。

「 ジロー、 はかどつてる?」

元気よく真琴が扉を開ける。

「こりゃ休憩中だつたらしい滋郎と田が合ひ。

「こりゃしゃー。今試作品が出来たと」ひつ

作業台の上は乱雑。

工具の類やよくわからないものが散乱している。

ちよつと楽しそうだ。

工作は嫌いじゃない。

「これと、これが先輩の武器の試作品つす。今度外か訓練場で試してみてください」

渡されたのは物差くらいの、筒状の棒が二つ。

「鍛冶屋の人に原型の武器作つてもうつてゐるん、まだかかるんすよ。特注なんで手間取りそつつす」

特注つて一体何を頼んだといつのか。

「楽しそうだな」

「樂しそうですよー。先輩もやつましょひーーー。」

「それも良いな。

「やうだな、ちよつとやつてみたいかも」

「まじつすかー。じゃあ時間取れそつな時来て下さつやー。」

「えー、じゃあ私もやつてみよつかなあ」

「マ」「先輩もやつましょーよー。楽しいですよー。」

真琴は細かい作業を面倒くさがるのだが、大丈夫だろ？  
まあ飽きたら止めれば良いだけの話なのだが。

「あ、そうだ。ジロ、帰る方法つてあると聞つ？。」

「あると聞つ？。」

「根拠は？。」

「ないつす。でも行きがあるなら帰りがあつてもおかしくないつす  
よね。リゲルさんも何か隠してる感じがするし」

「滋郎もやつ思つのか」

「リゲルさつすか？ そつすね。でも悪じよつはなうないと  
思つ？。」

「まあ悪意があるよつては見えないよ

確かに悪意はなさうだ。

罪悪感はあるようだが。

「何にせよ協力体制でいた方が良いつすね。戦争が終われば帰れる  
可能性も高くなつそうつす」

一応そのためによばれたのだ。

目的を達成しないと、あちらも困るだろ？。

そしてやつてきました、魔物討伐2回目。

今回は貴人・滋郎・真琴の3人だ。

精霊の巫女となつた春日は、討伐の参加が免除となつた。

滋郎の作つた試作品を預けられているので、今回はきちんと戦わないと。

一応訓練場で少し触つてみたので使い方はわかっている。

前回は森の中で見通しが悪かつたが、今回は草原。木がところどころに生えているが、見通しは良い。遠くでウシ型の魔物の群れが草を食べている。食べている先から毒沼が広がつていてるようだ。

「と、いつわけで今回はフビイだ。見ての通り毒をもつてるので気をつけるよ！」

魔物の討伐は、無差別ではない。

攻撃しない限り無害な魔物も多いので、その辺りは無視。討伐は有害なものに限る。

人を無差別に襲う魔物、作物を荒らす魔物、毒を撒く魔物など。

今回はその毒を撒く魔物だ。

「戦闘開始！」

隊長の声掛けに一斉に動く。  
四方から囲い、一気に叩くのだ。

全員がポジションにつき、構える。

魔物が周りに気付いたようだがもう遅い。

貴人が魔法を放とうとした、その時。

傍らの木に実がついていることに気が付いた。

「ゆ、ず……？」

形も色も、香りも柚子だ。

その大きさだけが違う。

貴人の知る柚子の2倍ほどの大きさ。

「でっけえな

味をみたい。

一つもいで噛り付く。

皮は苦く、実は酸っぱい。

そして独特の香り。

「うん、柚子だ」

店には並んでいなかつたが、この世界には柚子があるらしい。  
森や山は私有地ではないので持つて帰つても問題ないと聞いている。

「ラッキー」

じつは柚子、好物である。  
焼き魚に絞るのも良し、ゆず系ドリンクも良し。

大量にとつてゐるマーマレードにしてや。

などと考えてゐる間に、魔物は絶えていた。

「やべ

また何もしていない。

翌日。

引き籠もり中の滋郎を引き摺つて、例の店へ行つた。案の定滋郎も気に入つたらしく、さつそく交渉開始。一日限定10食分、デザートの売り込みが決定した。売れなかつたら払い戻しするので、相手に損はない。そうでないと人気も知名度も何もないケーキ屋は相手にされなかつただろう。

まずは様子見、10食。

もしもこれが完売するのであれば仕入れを増やしてもらえる。  
安定した売り上げとなれば払い戻しもなしとなる。

「あのお店につきり閉めたんだと思つたら、新しい職人さん呼んだのねえ」

このピーストロ風のお店は店主である渋いおじさんと奥さん、その娘さんと息子さんの4人でまかなつてゐるらしい。

「若いけど腕は良いのね。美味しいわ」

娘さんは20代後半くらいのスレンダーな美人。

他国に嫁いでいたが最近戻ってきたとか。

あつからかんと本人が話していた。

息子さんは前回店にいた人である。

素早いし動きも綺麗、営業スマイルも完璧。

女受けしそうで羨ましい。

少なくとも丑つき悪い、怖いとは言われたことないだろ? な。

「これだけの好条件なら」ちらりとしては不満もないしね。よりしく頼むよ」

渋い。

口髭も渋いが声も渋い。

「よりしく、よりしくお願ひします」

滋郎と二人で頭を下げる。

オープൺはまだ先だが、まずは一步。

店のオープンはまだ決まっていないが、ビストロへの搬入は決定した。

向こうの担当者である娘さんのメリッサさんと話し合って、5日後の最後の魔物討伐を終えてからと「うじ」と。

魔物討伐が日を開けた5日後と決まっているのは、魔物の活動期間の都合らしい。

よくわからん。

とにかくオープンの日取りはビストロの様子をみて、タイミングをはかる。

それまではがつつい仕込み。

宣伝活動としてエティやリゲルに話しておいた。  
こうじうことやるらしい、といつ口口口である。

顔が広い一人なのでそこそこ広まるのではと見込んでいる。  
紙媒体を使った広告チラシがない世界なので、これが一般的だ。  
さてうまくいけば良いが。

「三度目の正直って、豈ひじやん？」

「豈ひな」

「フジムさ、3回とも何もしてないよね？」

「そうだな」

「……せっかく武器作ったのにいいいい

部屋の片隅で嘆く滋郎。

滋郎の作った武器は一度も実践で活躍していない。

貴人の武器だけしか作っていないからだ。

「だからごめんって言つてるだろ。しょうがないじゃん、カボチャがあつたんだから

3回目の魔物討伐中、通常の3倍くらいの大きさのカボチャを見つけたのである。

中身もずっしり入つていて重い。

大きいカボチャは薄味大味なことが多いので、これもその可能性が高い。

しかしあま煮詰めれば使えるだろと一つ、持つて帰つて来たのである。

「フジムの中では重要なんだね、そこ……」

「ホラ、お前カボチャ好きだろ。かぼちゃプリン作るしさ」

「ううつ……！」

「パンプキンパイも作るか？」

「くつ……一生ついていきます、先輩！ なんでカボチャコロッケもー！ 是非に！」

「早つ！ 早いよジロ！」

カボチャの菓子に釣られる男・富尾滋郎。

真琴がずずつとお茶を飲みながら思い出したように言つ。

「そういうえばジロがフジムに懷いてるのってなんで？ 中学時代部活違つたよね？」

貴人は途中で辞めたが野球部、滋郎は文芸部の幽霊部員だった。もつとも文芸部は幽霊部員しかいないような部活だったが。バイト先は同じだが、それは高校に入つてからのことである。「俺が自殺しようとしてたとき、先輩に助けられたんすよ

「うわ、いきなりヘヴィ！」

「やー、先輩いなかつたら俺確実に死んでたつす」

「え、フジムが死んだら両親が泣くぞ、みたいなこといつたの？」

「まさか」

「むしろお前が死んでも何も変わらないし、無駄死にだら的な感じ  
つすね」

「……ひどい、ひどいよフジム」

「いや自殺前とか知らねえし。偶然、偶然」  
しかもそんなこと言つてない。

だいぶ違う。

滋郎の中でそうなつてているのか、ごまかしたのか。  
まあどつちでも良いけどな。

「なんにせよ救われたのは確かにんっす」

「あー！ あーあー、わかつた。なるほど、うん」  
真琴の中で何か閃いたらしい。

何か思い当たることがあつたのだろう。

「というわけで先輩！ カボチャプリンとパンプキンパイ、食べた  
いっす！」

「はいはい。ついでに夕飯も作るか。調味料もスペイスしか残つて  
ないしな」

そうなのである。

液体系・ペースト系の調味料はすべて試食した。

なのに残念ながら醤油も味噌も存在せず。

これはもう開発しろつてことなのか。

溜息を吐きながらスペイスを開封。

結構種類があるので舐めてみてから考えよう。

色々組み合わせも出来るだらうし、今日は無難に鶏肉のスペイス焼  
きでも作ろうか。

上手くいけばカレーも作れるかもしれない。

スペイスを種類ごと器に入れる。

一つずつ舐めていく。

何となく食べたことのある味、まったく知らない味、色々だ。

「ん？」

懐かしい風味を感じ、再度舐める。

「違うか……」

どうやら氣のせいだつたらしい。

残念すぎる。

鶏肉に合ひそうなスペイスを数点選び、調合してみる。  
無難な味。

下処理をした鶏肉に塗り込み、冷蔵庫で冷やす。  
その間に副菜やカボチャ菓子の準備も進める。  
パンプキンパイはさすがに間に合わない。

今日はカボチャプリンにしよう。

大きいが味が薄いカボチャは蒸し焼きにして濾し、鍋で煮詰めた。  
面倒だがこうすれば水分がとび、味が濃くなる。

副菜は何にしようか。

せつかくだらスペイス全種類使ってみたいんだよな。  
まだ使っていないスペイスを適当に調合していく。  
味をみて、合ひそうな副菜にしよう。

今日は組み合せ云々は気にしないでもらいたい。

「あ」

そういうことか。

スペイスは個々の味がしつかりしているが、組み合せでかなり味  
が変わるようだ。

日本で手に入るスペイスとはだいぶ違う。

「これは……いいな」

面白くなつて来た。

色々実験しよう。

「フジム！ これ！ ！」

軽く興奮状態の真琴がぶんぶんと手を振り、何かを伝えようとする。わかる、わかるけどわからない。

「先輩！ これ！ ！」

「真似すんな」

本日の献立は鶏肉のスパイス焼き、野菜炒め、ほうれん草のお浸しもどき、白米、味噌汁もどきである。

「醤油！ あつたんすか！」

「スパイスの調合で味噌とソースと醤油は何とかなる」

問題はスパイスな点だ。

粉末なのである。

水で溶かすと薄くなるので、醤油をかける料理が難しい。刺身に粉末つけて食べるって何か嫌だし。

柚子果汁で溶かしポン酢にするのならいいけるかもしねない。

「フジム最高！ 春日ちゃんとミツチーも喜ぶね！」

「おう。組み合わせを厨房の人伝え使ってもらえうつに頼んでおく」

春日は一緒に生活しているがまだ帰つて来ておらず、及川は騎士団の専用の食堂を利用することになっている。自分達もそれぞれ別の貴族に引き取られるのなら、各自持つて行きたいところだ。

「デザートはカボチャプリンな。パイは明日作るから」

ああでも良かった。

これで食生活はおおむね満足である。



翌日、道具作りの日。

滋郎の籠つている部屋で色々教えてもらい、実際に作つてみよつと  
いうことだ。

真琴と貴人、エディと何故カリゲルもいる。  
春日は精霊の巫女として色々修行中らしい。

部外者禁止なのでさすがに真琴はついていくとは言い出さなかつた。  
「わかりやすいもので説明しますね」

そう言つてエディは滋郎の試作品を取り出す。  
貴人が使わなかつた筒状のアレだ。

「キイトさんが訓練場で見た透明の剣と同種ですね。……」

筒の先から水の刃が出てくる。

「手元に彫つてあるこの魔記号が、この武器を維持するためのもの  
です」

刃と固定を意味する魔記号などが彫られている。

ただ属性は指定されていない。

属性は自分で指定出来、発動させなくてはいけない。

「この手のタイプは自分の魔力をを使います。が、魔記号だけでこの  
武器を出すよりも消費量は少なくて済む利点があります。もちろん  
魔動石を使うように改造も出来ますが、そうすると戦闘中は面倒な  
上、重くなりますからね」

確かに。

魔動石を持ち歩くのは大変そうである。

「次はこちら。魔動石を動力にした一般的なものですが  
以前見たランプである。

下部に魔動石入れがあり、そこからエネルギーを抽出、稼動する。

自分の魔力を使うものと違う部分は、エネルギーを抽出する部分の魔記号だけだ。

これは魔法も同じで、魔力が少ない人間が魔力消費の多い魔法を使う場合、魔動石を使って補うことも出来るらしい。

現時点で貴人たち5人には不要な知識であるが。

「基本はこれだけですので、簡単です。魔記号を彫る専用のナイフがこれですね」

一見彫刻刀である。

違う部分は習っていない魔記号の羅列。

「大抵のものは魔動石で動きます。魔力で動くものは使い手を選んで特注が多いんですよ」

以前魔力が多いのは異世界を渡ったからだと言っていたので、こちらの世界の人はそう多くないのだろう。

「このペンのように魔力の消費が少ないものは使えますけどね」

滋郎が改造した万年筆である。

エディとリゲルも持っているようだ。

「ナイフは高いものでもないし数もあるので、お一人一本ずつ持ち帰つて結構ですよ」

有難く頂戴して、さつそく道具作りである。

エディの延々と続く魔動具蘊蓄をBGMに着々と作業を続ける。

衛生面が整っているのも魔動具何だとか。

風呂とかトイレとか、確かにあつて良かつたよな。

手元に集中していると、真琴に声を掛けられた。

細かい作業が得意ではない真琴は、さつそく飽きてきたようだ。

「フジム、何してんの？」

「いやちょっと実験……よし」

出来上がったものを軽く投げてみた。

魔動石が床に落ち、発光する。

「おーバッヂリじゃん」

なるほどなるほど。

彫られた魔記号が自分に適性がなくても稼動することはわかつていた。

家電もどきが良い例だ。

実験したかったのは魔動石に直接彫り込んで大丈夫かどうかだ。使い捨てで良いのでいちいち器の用意なんで面倒だし。

「防犯に良いかなと思って。店に置こうかと」

ペイントボールとか田くらましとかそういう類。

イグレッジオは戦闘向きじゃなし、ちよづよせそうだ。

今のところあの店に強盗が入ることはなさそうであるが。

「何？」

気が付くとエディとリゲルが呆然と貴人を見ていた。

「……いや……その発想は無かつたな、と」

「逆に新しい発想だ」

魔動具で真っ先に出てきそうなものだけだな。

「非常用の水とか火とかにもなるな。属性外のものじゃないと意味無いけど」

「良いですね。キイトさんもジローさんと一緒に開発部で働きませんか？」

「いや俺ケーキ屋だし。滋郎はその開発部で働くわけ？」

「臨時職員つて形で良いのでつて誘われてるんつす」

「おー、いいじゃん。お前向きだな」

「なんで兼業考えてるつす。あと他にも色々やりたいこともあるつすよ」

「まあケーキ屋は俺一人でも良いし、好きなことやれよ」

忙しくなつたら人員を増やせば良いし、滋郎は滋郎でやりたいことをやるべきだ。

「やりたいことは全部やるんで、ケーキ屋でももちろん働きますよ」

見た目に反して活動的だ。

いや元の世界でもやたら活動的だつたけど、  
インドアな部分で。

「そろそろメシ作つてくる」

真琴リクエストのオムライスだ。

「見学しても良いか?」

意外だ。

料理に興味があるとは思わなかつた。

リゲルと共に厨房へ。

材料は頼んでいたので揃つてゐる。

チキンライスの味付けはトマトソース。

それにスペイスを混ぜた。

この世界にケチャップはたぶんない。

トマトもあつてスペイスもあるし、似た様なものは作れるだろうが  
頻繁に使うものではないので作つていないので。

たまごは半熟ふわふわを被せ、最後にスペイス多めのトマトソース  
をかける。

サラダとスープを添えれば出来上がり。

「手際が良いな」

「元の世界で働いてたからな」

オムライスはたまご工房の人気メニューだ。

休日の昼間など何食作つていたことか。

「そういえばリゲルつて普段何してんの?」

「普段……? 来客の対応とか、書類整理とか……」

何か魔女っぽくない。

「魔法も魔術も得意だ。この国で一番の実力だと自負してゐる。だが  
がそれと普段の仕事とは結びつかない」

魔法を使う仕事、魔術を使う仕事、色々あるだろうがそれ全部を一  
人でまかなうことは出来ない。

何人分か出来たとして、あまりやりすぎるとあぶれる人間も出でく

るだらう。

「地位はあるが引退しているというか……相談役、といつのか」

引退。

むしろ退職。

確かに定年退職してゐる年齢ではあるよな。

見た目はともかく。

リゲルを見る。

同じ年頃の女にしか見えない。

銀色の髪がさらりと流れ、綺麗だ。

猫目で美人系。

いいな。

欲しい。

「リゲルは今まで独身？」

現在独身なのは知つてゐるが、今までがそうであつたのかはわからない。

700年以上生きていれば結婚したことが数回あつてもおかしくない。

「伴侶を持つたことはない。いずれ死に別かれるとわかつていて、一緒になろうとは思えない。それに……大抵は赤ん坊から知つてゐる相手だぞ？ 意識出来るわけもない」

「あー どうか、犯罪っぽいわ」

下手すれば相手の両親、祖父母も赤ん坊の頃から知つてゐるパンもがあると。

懇意にしていればなおさら会う機会もあつただらうじ。

「それでいうとさ、俺は？」

「は？」

「俺の赤ん坊時代は知らないだろ？」

「知らない、が……」

意図をわかりかねてゐるのか、迷惑してゐるのか。

返答が鈍い。

「だから、俺を好きになれば良いんじゃないかな  
リゲルの手を握る。

細くてさらさらしている。

「死に別れるって、は年月は違えど誰でも一緒に  
リゲルの顔が若干赤い。

良い兆候だ。

「俺を意識して、俺を好きになつて」

その指先にキスしてみた。

結果。

フラれました。

とはいっても顔は赤いまま、「何を言つてるんだ!」と怒鳴られただけだ。

フラれたというより相手にされなかつたというべきか。しかし意識はしているようなので、今はこれで良い。

今は、ね。

「フジム、何あぐどい顔して笑つてんの?」

「あぐどい顔つて」

「何かサディスティック?」

「変態か」

気を取り直して。

いよいよ貴族に引き取られる日である。

そのことでHディが部屋を訪ねてきた。

「それでは説明致します」

小さく咳払いし、話を始める。

「まずミナミさんはフレネス公爵家を後見として、白の塔にて生活して頂きます」

白の塔については以前聞いていた。

てつくり貴族の後見はないものと思っていたのだが。

フレネス公爵夫人は結婚前、精霊の巫女として白の塔で暮らしてい

たらしく、是非にということだ。

春日にとつて悪い話ではないだろ？

「マコトさんはランル公爵家です。騎士団の訓練で顔を合わせてると思いませんが、

真琴がたまに訓練に参加している王宮騎士団には、女性騎士が少数存在する。

その中で一番の実力者であるシャナル・ランルが、真琴を是非と父親である当主に頼んだようだ。

真琴はランル公爵家の屋敷には住まず、春日と共に今日から白の塔に住むことになっている。

表向きは侍女なのだが、騎士団にも所属し、護衛も勤めるという。「そして最後にジローさんとキイトさん。お一人はわがカネル公爵家です」

「え、2人一緒に？」

「まあ色々あります」

聞き返した真琴にエディは苦笑いで答える。

その様子を見て、貴人は唯一戦つていない自分が問題だつたのだろうなど中りをつけた。

過ぎたことはどうしようもないが。

さてそんなわけで、正式な名前はキイト・カネルとなつたわけだ。

年齢的に貴人は三男でジローは四男。

領地は城下町より大分遠くにあるらしいが、住まいは今エディが住んでいる屋敷に居候である。

城下町の一角にある貴族の多い屋敷街。

2人とも仕事があるので考慮してくれたのだろう。

貴人はケーキ屋だけだが、滋郎は結局ケーキ屋と開発部、他にも色々やることがあるので城下町にいる方が都合が良い。

それぞれの住居へ、今から引越しだ。

借りていた部屋は念入りに清掃され、客室になるのだらう。

「それでは屋敷に案内します」

エディに連れられ、城下町を歩く。

今ではすっかり見慣れた風景。

城を出てすぐに屋敷はあり、エディと滋郎には便利そうだ。

残念ながら店からは結構距離がある。

歩けない距離ではないのでかまわないが、自転車とか原付とかあれば便利なのに。

門を潜れば庭園。

石畳を歩き、玄関へ向かう。

小さな池とその周りには背の低い植物が生えている。

花はあまりなく、華やかというより青々しい感じだ。

「門番はいません。ですが不審者が入り込めば魔力が感知されるのでわかる仕組みです」

人間すべてが魔力を持っているので生体反応と同じようなものか。

「この屋敷には私と、住み込みの使用人が3人とその子供が一人いるだけです」

言いながら扉を開ける。

ちょっととぼつちゃりとしたかわいらしげメイドが出迎えてくれた。

「おかえりなさいませ、エディ坊ちゃん」

「坊ちゃん……ッ」

噴出さないよう堪える貴人と笑う滋郎。

「坊ちゃんまつて！」

「マチルダ、坊ちゃんはやめて欲しいと……」

「ですが坊ちゃんは坊ちゃんですから。はじめまして、メイドのマチルダです。キイト様、ジロー様、よろしくお願ひします」

「キイトです。よろしくお願ひします」

「ジローです。よろしくお願ひします」

「ジローです。よろしくお願ひします」

揃つて頭を下げる。

「まあまあこれはは」丁寧に。お部屋に案内いたします、こちらへどうぞ」

若く見えるが言動がちょっとおばけやんっぽい。

じつは若くないのかもしれないが、聞くのは失礼だろう。やめておこう。

「右がキイト様、左がジロー様のお部屋です。荷物を置いたら屋敷内の案内をいたします」

部屋は城で借りていた部屋と同じような感じだ。さすがに一部屋だが、かなり広い。

扉近くにテーブルと椅子、奥にパーテーションがありベッドがある。美術品の類はない。

椅子の上に荷物を置いて、部屋を出た。

トイレや風呂、食堂などの場所を聞き、使い方などの説明を聞く。一応食事の時間は決まっているが、事前に伝えておく」とどうりしてもらうことも可能。

風呂も声を掛ければいつでも使える。

勿論非常識な時間に使うつもりはないが。

この屋敷の主はエディなので特に挨拶もなし。

当主であるエディの父親は領地にいるため、そちらの挨拶は見送り。それで良いのか疑問に思ったが、エディの父親はそういうことを気にしない変り種のようだ。

納得。

そもそも遠いのでエディも仕事があるしで連れて行けないとのこと。食事はエディの計らいでスペイスや調味料を使ってくれるらしい。

ありがたい。

マチルダの母親のメイサが料理人で、父親のヨハンは執事。一家で使用人で、マチルダの娘と息子もこの屋敷に住んでいる。旦那は早くに亡くしたらしい。

元々領地の屋敷に勤めていたらしいが、娘の学校のためにこちらに来たという。

何でも有名な女子学校があるらしい。

学生向けのケーキも考えるか。

「あ、言い忘れてましたが、貴族には騎士に属する義務があります。本職がある場合、臨時の騎士という扱いですが」

「は？」

「お二人は討伐隊の所属になります。一定期間」と、その期間に人手が足りなくなつた場合に呼び出されます。所在地出現地次第なのでその半年に10回出動する人もいれば0回の人もいます。ちなみに私は長男ですので、免除です」

殺意が湧いた。

会議室に宰相と魔女、それから四大公爵家の代表者が集まつた。

魔術のカネル。

武力のランル。

人脈のフレネス。

資産のロア。

エディことエドワード・カネルはカネル家次期当主としてこの会議に参加する。

現当主の父親はこの会議、といつより救世主召喚すべてに關して面倒臭がり、引き籠もつてゐる。

おそらく午前中のこの時間は惰眠を貪つてゐることだらう。

救世主云々に關して、というよりほぼすべてなのだが、カネル家の実権はエディが握つてゐる。

「さてそれでは、改めて救世主と共にこの世界にやつて來た4人の後見を頼みたい」

リゲルの言葉に真つ先に反応したのは、ランルだ。

「マコト・サワラとジロー・ミヤオはランル家が責任を持つて保護しよう」

やはりか。

魔物討伐で先陣を切つた二人だ。

強い人間が好きなランルらしい選択。

しかし個人としてもカネル家としてもそれはまずい。

四大公爵家とは名ばかりで、実際に権力を持っているのはカネル家だ。

続いてランル家という具合だ。

権力云々に固執したくはないが、魔術の研究にかなりの国家予算を割いているので仕方が無い。

もしもランル家がカネル家の上を行ってしまえばその予算は削られ、騎士団に持つていかれるることは明白。それだけは避けねばなるまい。

予算に関しては譲れない。

「せつかく公爵家も四家なのです、一家に一人保護すれば良いではありませんか。ジロー・ミヤオはカネル家が保護します」

「私もそう思います。我がフレネス家はミナミ・カスガを保護しましょう。妻は元々精霊の巫女ですから、その方がミナミ・カスガも助かるでしょう」

ランルは悔しそうに顔を歪め、睨んでくる。

これだから単細胞は。

「それではロア家にキイト・フジムラといふことでよろしいか?」

「……まあ、仕方ないでしょ?」

渋々といった風に了承する。

予想通りの反応だ。

「不服ならキイト・フジムラもカネル家で保護しましようか?」

ロア家は四家の中で一番資産が潤沢だ。

税で潤い、商売で潤い、何より出費にも頗り。

つまり無駄な人員など要らない、とそう考えるはずだ。

今回召喚された4人は使用人として引き取るのではない。むしろ優遇しなければならず、本人が希望すれば大きな出費もある。ロア家がそれを厭わないはずがない。

「まあ、当方としても、それは助かりますが」

「ジロー・ミヤオとキイト・フジムラは仲が良いようですから、一緒に

緒だと知れば喜ぶでしょうし」

「力ネル家がキイト・フジムラを保護するのならば、ジロー・ミヤ

オはランル家が……！」

「何を言っているのです。一人が一緒に喜ぶだらうと言っているのに。それにもう一人というならばキイト・フジムラを保護するのが筋でしょう」

「くつ……」

「決まつたな。キイト・フジムラとジロー・ミヤオは力ネル家だ」

溜息を吐き、リゲルがどうでも良さそうに宣言する。

個人の権力は持つが、家族はなく、公爵家でもないリゲルにはあまり関心のない話なのだろう。

しかし、当初の予定通り、一人を確保出来て良かつた。

キイト・フジムラが魔物討伐で活躍しなかつたおかげである。エディはひつそりと笑った。

キイト・カネルになつて数日。

ようやくリゲルとデートに扱ぎ付けた。

マコが仕事で予定が合わず、偶然2人になつただけであるが。

前回同様ビストロで食事することになつたのだが、今回はアルコール込ミランみだ。

この国イタリアでは16歳は成人なので、アルコールも注文できる。ボードに書かれているおすすめの食材の中から好きなものを選ぶ。今回はピグウという獣肉をアルコールのつまみに呑つようと注文した。

濃い目の煮込み料理に薄くスライスされたバケットのようものが、浸したあとハーブを乗せて食べるらしい。

アルコールはアカの実のワイン。

酸味があり軽い口当たりで飲みやすい。

「店はどうだ？」

「ぼちぼちかな」

店の売り上げは3人分の給料を十分に払えるくらいとぼちぼちだ。店の純利益分はほとんどないが、給料が出るだけ上々である。

「まあ少しずつ客足は増えてるかな」

前に来ていた人が戻つて来たり、この店から流れて来たり。順調である。

「それは良かった。マコとミナミも問題なく過い」しているよ……ああ、ワインのおかわりはどうだ?」

そうか。

一人とも何もなくて何よりだ。

特にマコの侍女なんて不安すぎるからな。

「いや、そりそりやめておく。明日は討伐隊に参加しないといけないから」

そう。

初の臨時の討伐隊参加である。

登録されて即とはどういうことか。

ジローの呪いか。

「魔物討伐か。明日はどこに？」

「あー……確かに西つってたかなあ。ピグウ討伐だつてさ」

「ピグウか。となると……また近いうちに食べられるな」

「食べられる？」

「ピグウが大量発生すると討伐隊が組まれるんだ。群れは危険だからな」

草食動物だし、むやみに攻撃してくることはない。

ただ1匹に手を出すと群れで襲ってくる。

攻撃は単純だが力が強いこと、数が多いことがネック。

慣れていないと大変だろう。

「量が多すぎるからその後食堂なんかに配布されるんだ。それ目当てで一般人が暴走しないように。まあ一般人に被害が出ないよう取りられた対策だ」

なるほど。

個人が狩りに行って負傷者が出ないように、か。

ピグウは繁殖率が高いため、よく大量発生するらしく、よく臨時の討伐隊が組まれるようだ。

ピグウの好物もあるアカの実も、一年に何度も収穫出来る。成長が異様に早いのは、魔力の影響ではないかといわれているが、まだ判明していない。

個人的には、この世界の食べ物と元の世界の食べ物で違うものは、魔力の影響があるんじゃないかと思う。

その証拠に同じ食べ物を食べても変化がないが、違う食べ物を食べると微量ながら魔力が回復していくように感じるので。

「せっかくだから、デザートプレートを頼もうか。キイトは？」

「俺は良いわ」

リゲルがデザートプレートを注文する。

デザートプレートは日替わりで、チーズケーキを2種類とアイス、果物とソースを添えたものだ。

今日はシューとチーズケーキでアカの実のソースと季節の果物を添えてある。

これは意外と人気があり、最初こそぎりきり10、といった具合だつたが、最近では20、30と出るようになつた。

ありがたい。

美味しそうに食べるリゲルを見て癒される。

ああかわいい。

しかしあれだ。

髪の長くて邪魔なのか、耳の辺りで押さえる。

その仕草も食事の時に結ぶ仕草もどちらも良いよな。

頃も良い。うん。

「リゲルさん、お久しごりです」

「ターシャ」

ビストロの女性店員が食べ終わる頃を見計らい、近付いて来た。

「お元気そうで何より。……ちょっと色々あって、戻つて来ちゃいました」

「そうか」

「ふふ、やっぱり実家は良いですね。これからはもっとお店に来てくださいね！」

「どうやら顔見知りらしい。

それはそうか。

元々この店はリゲルの紹介だ。

「ああ、また来る」

「ところで、お一人はどういづれ関係ですか？」

「え……」

リゲルが言い淀む。

珍しいな、即答しそうなのに。

「恋人候補」

「へー！ そうなんですか！ いいなあ、青春だなあ

「ちょっと……！」

しつと答えてみると、リゲルが慌てだした。

何故。

嘘は言つてない。

「俺が今一方的に口説いてるといんですけどね」

「がんばってね！」

「勿論」

「…………」

恥ずかしかつたのか、顔が赤いまま、睨みつけてくる。全然怖くないが。

「そろそろ恋人に昇格つてどづく？」

そろそろも何もまだデート一回目ですが。

「……帰る。明日は早いだら」

残念。

しかし拒否されなかつたので良しとする。  
耳まで赤いリゲルを追い、店を出た。  
ツケが通用するつて良いな。

「リゲル、送る」

「良い。すぐそこだ」

「そういう問題じゃないから」

強引に手を取り、そのまま繋いだ。  
指を絡める。

「戦況はどう?」

「芳しくない」

せっかく手を繋いでいるところの上、色氣のない話題を出してしまった。

「戦場に行くのは本当に及川だけ?」

「……ああ

「残り4人は何のために呼ばれたわけ?」

「救世主はひとつだ。巻き込んで申し訳なこと……」

「そう言えって、英雄に言われた?」

リゲルがびくんと震え、手を払おうとした。

させないけど。

「5人、必要なんじゃねえの?」

リゲルが俺を見詰める。

会話の内容がこれじゃなかつたら良くなき雰囲気に持つていけたのになあ。

「正直に話してくれれば、協力できるかもよ?」

揺らいだ。

キイトはそれに気付いていないふりをしながら、優しく髪を撫でた。  
「悪いようにはされないってわかつてるから。リゲルを、信用して  
る」

眉をきゅっと寄せ、皿を瞑る。

その眉間に歯を寄せた。

「今すぐじゃなくて良い。マロモジロも、正直に話せば協力してくれると想つ」

しかしこんなにわかりやすくてよく國の裏としてやつていけてたな。  
それほど平和だったってことか。

「いざれ、話す。今は、まだ……」

「待つてゐる」

そのまま無言で城まで辿り着いた。  
ゆっくりと手を解く。

「また、誘つから  
リゲルが小さく頷いた。

さて、ピグウ討伐である。

前回とメンバーも違い、初めて見る顔ばかりだ。  
ジローとは時期をずらしてもらつた。

三人しかないので、一気に二人抜けると店が回らなくなる。

今までの三回は近場だつたので徒步だつた。

しかし今回のピグウの目撃場所までは少し距離があり、移動は走竜ランドラ  
という移動用の魔物を使う。

この魔物は草食でおとなしく、従順ということで好まれて使われて  
いるようだ。

一応二人乗りまでいけるのだが、今日はピグウも乗せることになる  
ので全員一人で乗る。

実はかなり楽しみにしていた。

ジローほど漫画やアニメに興味はないが、小学校の時はそれなりに  
ゲームをしていたこともある。

飛ばないとはいえ、ドラゴンランドラである。  
番号札を受け取り、走竜ランドラを探す。

61番。

それが今回キイトが乗る走竜ランドラの番号だ。

番号順に並んでいるのですぐに見つかった。  
片目に刃物傷がある。

「大きいな」

大きいと言つても馬くらいだらうか。

馬よりもゴツイので大きく見える。

そつと手を伸ばすと、威嚇された。

撫でたかったのに。

大人しいと聞いていたのだが、どうも違うらしい。

窮地に立たされているのでなければ、魔物は自分より強いものに逆らわない。

要するに強いことをわからせれば良いのである。

「よし」

魔力を開放してみた。

人間版の威嚇である。

走竜は小さく唸り、その場に伏せた。

「勝つた」

大人気ないが、ようやく撫でることが出来た。  
鱗に覆われた緑の体はごつごつとしている。

鱗なのに滑らかではないのが不思議だ。

「おー」

感動。

帰つたらジローに自慢しよう。

「さあ行くか」

61番を連れて城門前に集合した。

何か視線を感じるのは気のせいか?

気のせいじゃないな。

かなり見られてる。

口開いてますけど。

走竜ランドラに乗つて小一時間。

ピグウは農村近くの小高い丘に集まってアカの実を食い散らかしていた。

騎士約20人に対しピグウは約50。

一人頭2か3つてことか。

一斉に囲んで、一斉に叩くらしい。

何て安直な作戦。

作戦といえるのか？

ピグウは単純な動きしかしないし、一回に手を出すと他も一斉に向かって来るので一気に叩いた方が安全とのこと。キイトはジロー印の武器を腰に下げ、あとは借り物の革の鎧で軽装備だ。

重い騎士鎧を着ると動ける自信がない。

「今までと違い、一人前としてここにいるんだ。しつかり戦えよ。

今回はピグウ討伐だし危険は少ないと思つうが」

隊長から告げられ、頷く。

今まで戦闘に参加していないので言われて当然だ。

だがしかし、笑いながらこちらを見ている騎士たちは気に食わない。

顔を覚えておこう。

走竜たちを一部に集め、騎士だけがピグウを囲む。

162

ピグウは食用になるため、丸焼きの恐れがある炎の魔法などの攻撃は禁止されている。

そのため物理攻撃か、刃状の魔法など、出来るだけ死体に損傷がないものでないといけないのだ。

キイトの武器は条件に合っている。

武器を手に、構える。

「

風の刃が出現し、剣が出来上がる。

これで斬れば良いわけだ。

もちろん魔法を使っても良いのだが、人数が多いし外すと面倒である。

隊長が一発目、軽い魔法を打ち込むと、驚いたピグウたちが散り散

りに突進してくる。

それをバサバサと斬り捨てる、ただそれだけ。  
特に何の感慨もなく、向かつて来たピグウを斬りつけた。  
要は屠畜。

もちろん好んでやりたいことではないが。

それにしてもジローの作った武器は軽い。

刃の部分が魔法なので当たり前といえば当たり前だ。  
おかげで片手で軽々と操作出来て、かなり助かる。  
他の騎士が持つていてるような剣は、確実に両手持ちになるだらう。  
片手で持つとブレる。

笑っていた騎士に何か仕掛けられるのではと思つていたが、そんな  
ことはなく。

非常にあつたりとある意味初の魔物討伐は終了した。  
後は血抜きしたピグウを走竜ランドリクに乗せて帰るだけだ。  
このピグウは一番近い農村と、城下町などで配布される。  
きっと騎士の宿舎ではピグウ料理が振舞われるだらう。

「よつやくー よつやく使つてくれたんすねー！」

屋敷に戻ると、ハイテンションなジローが部屋を訪れた。

「おー、滋郎、ありがとな。軽いから助かつたわ」

「ふ、ふはははは！ もう先輩のためなら何でも作るつす！ 参考  
になりそうな魔術書選んで来ましたから何でもリクエストしてほし  
いっす！ 無双しましよう、無双！」

ジローがどさりと本を積み上げる。

つうかどんだけ持つて来てんの。

その中の一冊をペラペラと捲る。

時の魔術とか空間魔術とか飛空魔術とか中々面白そだ。

斜め読みだし詳しく述べはわからないが、猫型ロボットの道具とか再現

出来そうだ。

「まあそのうち読むけどさ。……俺今欲しいものがあるんだよね」

「え？ 何すか？」

「電気」

「え？」

「電気」

「……え？」

ジローが武器防具関係の開発のことを言つてゐるのはわかっている。だがそこはあえて空気を読まない。

今一番欲しいものは電気だ、まずそれを開発してほしい。

電気といつても電気そのものが欲しいわけではなく、単純に魔動石の補充が面倒、それだけだ。

「ええ……電気って……電線引いたり家電作つたり……？」

「それなんだけどさ。魔動石を魔力に変換つて出来ないわけ？」

「え？」

「魔法使つ時は魔力使つだろ？ 魔動具使つ時は魔動石。似たようなもんじやん？」

「その発想はなかつた……ツ！」

ジローは一人ぶつぶつと呟き始めた。

おそらく何が考えているのだろうと放置する」として、マチルダにお茶を貰つ。

「ん……魔動石の魔力化、出来そうつす！」

「おー」

「電線ならぬ動線か……中継作つて飛ばす方法を考えた方が早い

か……」

「おー」

「どつちにしろ大掛かりになるな。ヒーティさんに企画書出してみるつす！」

「おー、期待してる」

魔動石補充本気面倒臭い。

「からか客も増え、リピーターもじわじわついてきた今日この頃。

壁絵に反応があるとイグレッティオのテンションがあがる。それを見てお客様さんがちょっとひく。うん、店は今日も平和です。

「あ、グレッツ。今日はテートだからさくっと仕事終わらせたい」そう宣言して、仕込みに集中。

昼頃開店し、夜早めに閉店するので、営業時間は日本の一般的な店に比べて短い。

この世界ではどの店でも大体そうだ。

24時間営業の店は今のところ存在しないし、全体的に労働時間が短い。

「つうわけで、閉店したら上がって良いか？」

「はい。仕込みに問題なければ大丈夫です」

仕込みは問題なし。

元々余裕を持つて仕込んでいるし、仕上げは朝にやっているので構わない。

店側の清掃関連は、イグレッティオが担当している。ジローとキイトが厨房の清掃だ。

仕込みは2人が担当しつつ、イグレッティオにも少しずつ教えていふところで、いずれは厨房に入つてもらい、接客は接客で人員を増やしたい。

そろそろもう一人雇つても良いんじゃないか、と話し合いで中。

販売メインで簡単な製造補助もしてもらひ、ところが今の希望である。

それにジローは城の仕事もあるので、キイトの休みの時や仕事量の多い時にしか出勤しないのだ。

2・5人はさすがに少ない。

厨房の片付けは早めに終わらせ、閉店してすぐにビストロに向かった。

ターシャに奥の席へ通される。

「今日は？」

「リゲルとデート」

商品の搬入などでターシャとは度々顔を合わせており、今では色々と雑談する仲になつていて。

特にリゲルに関してよく話す。

お勧めのデータースポットや人気のあるプレゼント、城下町の流行などを教えてもらつていて、

あまり活かせていないのが残念だ。

「どう？ 上手くいつてる？」

「ばちばちかな。デートには応じてくれるよになつたし」

今回リゲルを誘つたとき、マコトも誘いたい、と言わなかつたのだ。

これは一歩進んだのではないかと、そう思つていて。

実際のところ、マコトが休みでないことを知つていて言わなかつた可能性もあるのだが。

「そろそろこいつ、決定的な一歩が欲しいわよね。やつぱりプレゼント？」

花や宝石、小物などの流行に話題は移り、しばらくしてからリゲルがやつて來た。

「すまない、遅くなつた」

「いや、大丈夫。忙しかつたのか？」

「ああ……」

向かいに座るとターシャが飲み物を運んで来た。

微発泡のベリージュース。

食べ物を注文し、乾杯。

「ピグウ討伐はどうだった?」

「ピグウはまあ特に何もなかつたかな。あ、走竜に初めて乗つたんだけど、良いな」

「そうか。走竜は従順で扱いやすいからな。、やはり人気がある。これからも接する機会はあるだろう」

「俺には最初、反抗的だつたけどな。警戒してただけかもしれないけど」

「警戒はしないと思うが……。城の走竜は人によく懷いている」

「俺がよっぽど胡散臭かつたのか……」

ちょっと落ち込む。

もしかしたら異世界人だから、ということかもしれない。

ジローが走竜に乗つたら聞いてみよう。

香ばしいチキングリルにさくつとしたオニオングライ。クリーミーなマッシュュポテト、具沢山トマトスープ。

食事をしつつ、城に残つたメンバーの近況や戦況などを聞く。大きな変化はないようだ。

「キイトは最近、何があるか?」

「そうだなあ、今は紙をもつと安く手に入れたいと思つてるんだけどさ」

「紙?」

「お菓子を包むときに使う、柄をつけた紙っていうか……」

紙が安くなれば、厚紙で出来た箱にケーキを入れるといつことも出来る。

どのケーキ屋もあまり紙やフィルムを使っていないので、崩れやすいのだ。

消費者側もそれが当然だと思っていて気にしていないが、やはり崩

れににくい方が良い。

「紙か……紙を使うことがあまりないから、生産量も少ない  
「紙の使用が増えれば安くなる?」

「あるいは

「そうだな……紙と言えば本に包装紙にノートに……  
そもそもティッシュがない世界だ。

ティッシュの代わりに布を使い、洗ってまた使つ。  
布も安いものではないが、使い捨てではないのでどの家庭にも必  
ずある。

城の書類は紙だったが、重要ではないものはボードだった。  
城でさえそのだから一般家庭ではますます紙を使つていないだ  
る。」

「本ねえ」

「魔術師は本をよく持つているがな。そもそも本は高価だから貴族  
くらいしか手が出せない」

専門書は読む人を選ぶ。

小説や絵本、漫画なんかは幅広く好まれるだろうが、そもそも低価  
格でないと広まっていかないだろう。

「どうしたもんか」

何をするにも資金が必要か。

世知辛い。

ここはエディに集るしかないのか……。

「本が高いのは書き写す労力が掛かるから、といつものもある  
書き写す労力。

すなわち手書き?

「写す魔術はない?」

「くはない。ただ魔力をかなり使つので好まれないといったところか」  
なるほど。

魔術を使うくらいなら手作業の方が良いと。

部屋にある魔術書もおそらく手書きなのだろう。

「珍しい魔術だからな。城の魔術書にも載っているかどつか……家に戻ればあると思うが」

「家?」

「ああ。私の家だ。隣国<sup>リダイ</sup>との国境に近い山にある」

「ずっと城にいるように見えたが、違ったのか。

キイトの考えが透けて見えたのか、リゲルが付け足す。

「今は城での仕事が多くて城内に部屋を借りているが、普段は山の家に住んでいる。そうだな、戦争が終われば戻ると思うが」

「いいな、行つてみたい。リゲルの家」

「私の家に?」

首を傾げるリゲル。

「そう。ああ、魔術書を貸してくれると嬉しいんだけど」

取つてつけたような理由に苦笑いだ。

「まあいいか。珍しい食材もあるかもしれないし……。そろそろ魔動石の入れ替えに帰らないといけないと思っていたしな。今度の定期日で良いか?」

「もちろん」

リゲルの言葉に上機嫌に頷く。

こうしてリゲルのお宅訪問が決定したのである。

早朝急に城からの遣いがやって来た。

目を擦りながら集合場所である城の広場まで歩く。

ランドラ  
走竜の番号札を受け取り、竜舎へ向かつ。

またもや61番。

「おー、よろしくな」

ぼすぼすと撫でると、小さく鳴いた。

「これも何かの縁ってことで、お前は今日からマサムネな  
心なしか嬉しそうに鳴き、キイトの手に擦り寄る。  
おつと和んでいる場合ではない。

一応緊急討伐なんだつた。

緊急と言いつつも、ちやつかりおやつを持って来る余裕はあつたわ  
けだが。

城から南西の方角に、トープという飛行型魔物の大群が現れた。  
この魔物はすぐ移動するので、田撃次第早く討伐するようにしてい  
るといつ。

害がなければ放つておくのだが、この魔物は肉食。  
食い尽くすまで獲物の上空を飛び回る。

この魔物に滅ぼされた村もあるというから、中々危険なのだ。  
救いなのは空腹時と正当防衛でしか殺生を行わないところか。

そう考えると悪い魔物ではないのだが、やはり人間自分たちの身は  
かわいい。

仕方がないことなのだろつ。

ランドラ  
走竜に乗り、目撃場所へ急ぐ。

臨時であるキイトは見張り役で、目撃場所付近に一般人や他の魔物が入り込まないように警備する。

森中央の上空に、旋回している魔物が見える。

暗いオレンジ色の大きな魔物。

「ウモリのような羽にトゲがあり、漫画に出てきそつだと的外れな感想を抱ぐ。

旋回している魔物は見張り役で、その下は食事中で、交代する瞬間を狙うらしい。

「変わった形の武器だなー」

「ああ、これ？ まあ、そうだな」

突然騎士の一人に話しかけられた。

見張り役って暢気なんだな。

討伐に関係ない話を振られるとは思っていなかつた。

「これはこつちが刃<sup>ブレード</sup>で、こつちが銃<sup>…</sup>放出になつてゐる

この世界に銃はない。

弓はかるうじであるが、放出系の魔法があるせいか飛び道具をあまり見ないのだ。

元々銃剣なんてゲーム内でしか見たことがなかつたが、銃がない世界ではこの武器はもつと珍しいだろう。

「へえー。便利そうだねー、オーダーメイド？」

「あー……眼鏡の……」

何と言えば良いのか。

自分から召喚されたなんていふと馬鹿みたいだし、ジローとの騎士が面識があるかどうかわからない。

「あ。開発の臨時職員の眼鏡に作つてもらつた」

開発の臨時職員はジロー一人だ。

ジローを知らなくてもその説明で何となく理解してもらえるだらう。

「なるほどー、ね、あとでそれ貸して？ 使ってみたい」

「いいけど、たぶん無理だと思つ

「……どうこと？」

説明しかけたその時、旋回していた魔物が降下し始めた。

緊張感が走る。

皆無言で、その様子を見守る。

金属音が響き、悲鳴や怒号、一気に騒がしくなる。

始まったのか。

降下してしまえば木々が邪魔で、その様子は窺えない。  
見張りは相変わらず他の侵入を許さないことが仕事で、トーブと直接対決はなく。

逃げる時は空を飛ぶので、追いかける術もない。

負傷したトーブが羽ばたき、空を逃げる。

放出系の魔法が飛び交い、仕留めようとするが中々当たらない。  
当たったところで丈夫な皮膚を持つトーブは、一撃一撃じや撃ち落せないのだが。

「あつちは城の方か。大丈夫なのか？」

「んー、どうかなー。どうせまた空腹になつたら狩りを始めるだろうし、そのとき動けば良いんじゃない？ どうせもう魔法が届く距離じゃないし」

普段ならそれはそれで良い、と思いつつだが。

今回は少々違う。

今度の定休日はリゲルの家を訪れる予定なのだ。

そんな美味しい機会を魔物討伐なんかで潰す事になつてみる。

「うん、仕留めようか」

人の恋路を邪魔するやつは滅びると良いよ。  
まだ邪魔されてないけどな。

銃剣を構える。

「」

魔力を込め、魔記号を呴き、想像する。

炎は生まれ、トーブを貫く。

それは心臓を貫き、燃やし、地上に落とし。

「；；」

連射。

ただ魔力を込めれば使えるが、自分なりにコントロールした方が格段に性能が良い。

それに気付いたのは製作者であるジローではなく、使用者であるキイトだ。

これはジローが作ったものが特別だということではなく。単純に使用者の魔力の込め方、量、操作でどうとでもなる。どんな武器でも使い方次第。

炎はトープを貫き、その身を燃やす。

一匹、また一匹と落下していく様子を、その場にいた者はただ、見ていた。

「……本当に便利な武器だね。ね、貸してー？」

興味津々なその騎士に武器を渡す。

キイトはその間に休憩だ。

木の根元に座り、おやつに持つて来ていた店の売れ残りを取り出す。賞味期限切れというわけではないが、そろそろ引いておくかと思った焼き菓子である。

騎士が刃を出したり銃を発射したりしているのを見学しつつ、まつたり休憩。

やはりというか何と言うか、刃の長さだつたり維持力だつたり、銃の威力だつたり……キイトとは比べ物にならない。改めて自身の魔力量は多いのだなあと実感する。

キイトだけでなく他の4人も同じなのだが、この武器はキイトしか使用していないため、よくわからないのだ。

「すごいね、これ、かなり難しい……って何食べてるのー

「柚子のパウンドケーキ」

「いやそーじゃなくて……美味しそーだね？」

「食う？」

パウンドケーキを差し出せば、高速で咀嚼し飲み込んだ。

「おいしい。甘いの好きなの？」

「好きつかつか……俺ケーキ屋だから、店の売れ残り」

実際甘いものよりしょっぱいものの方が好きだ。

おやつかはんかと言われば迷いなく」はんを選ぶ。

「あ、そーか。臨時だっけ。……ふーん、ケーキ屋さんなんだ？」

雑談していると、森の中心から騎士達が戻つて来た。

隊長に状況を聞かれ、簡単に答える。

驚かれたが、開発の特注武器だというと納得された。

その後、撃ち落としたトープの死体を確認し、走竜ランドラに乗つて城へと

戻る。

これで安心して定休日を待つことが出来るな。

待ちに待つた店休日。

緊急呼び出しは、ない。

足取り軽く、城へ向かう。

「あー、ケーキ屋さんだー」

「は？」

騎士だ。

緊急討伐で武器を貸した騎士が、小走りに寄つて来た。

冑を手に持つてるので、顔がよくわかる。

ごく普通の茶色の髪は長く、後ろで一つに束ねられている。この国の男は髪が長いことが多いようだ。

「何々？ 今日は臨時討伐？」

「違う。私用で走竜<sup>ランドラ</sup>借りに来ただけ」

「えー」

何がえー、なのか。

「俺今から討伐なんだよね。おやつ期待したの」「ー」

「残念だったな。今日は何も持つてない」

リゲルの話だと曰く自生する果物が豊富にあるといつので、それを貰う予定なのだ。

店で取り扱つていないよつた珍しいものもあるらしいので楽しみにしている。

「えー。あ、そうだ、ケーキ屋さんのケーキ屋さんつてどこのところの？」

「裏通りの角の……」

城からの道を簡単に説明する。

城に住んでいる騎士なら、簡単な説明でもわかるだろう。

「あー、わかつたー！」

「とりあえず、俺の名前キイトだから。ケーキ屋さんじゃないから

ケーキ屋さんって。

臨時の騎士の中にケーキ屋がいる可能性は低いので紛らわしくはな  
いだろうが。

「わかつた、ケーキ屋さん！」

「いや話聞けよ」

「あ、集合だ。またね、ケーキ屋さん…」「おい」「うう

話聞かないというか敢えて無視しやがったよな。  
しかもあいつ名乗つてないし。

まあいい。

気を取り直して走竜を借りに行こう。

戦闘用に訓練された優秀な走竜は1から50までの番号で、それら  
の貸し出しあさすがに出来ないが、その他番号は借りることが出  
来る。

もちろん一般人は借りられないが、キイトは臨時といえど騎士であ  
る。

騎士や魔術師、城の関係者は大抵借りられるよつだ。  
竜舎に行くと、いつも係りの騎士がいた。

何故かぎよつとしたように見られ、首を傾げる。

「走竜を私用で借りられるって聞いたんだけど、どうすれば良い?」

「あ、ああ……ここに名前を書いてくれ

ボードに名前を記入すると、その横に番号を振られる。

「それ、走竜の番号?」「

「そうだが

「61番は空いてないのか?」「

書かれていた番号は78番。

空いているなら出来れば61番、マサムネが良い。

「空いてることは空いてるが

「じゃあ61番を貸してくれ

騎士は61番と書き直し、番札を取り出した。

礼を言って、61番のところまで歩く。

キイトに気付か、マサムネが鳴く。

「おー、おはよ。今日はよろしくな

撫でてやると嬉しそうに擦り寄つて来る。

まだ3回田だところのによく懷いたな。

マサムネを連れて城門付近で待つていると、足早にリゲルが現われた。

いつもの魔術師らしい格好ではなく、膝丈のスカートにタイツとブーツを合わせている。

こうして見ると、元の世界とあまり変わらない服装だ。リゲルが街を歩いていてもおかしくはあるか。

銀色の髪は確実に目立つ。

「すまない、待たせたか?」

「いや、今来たとこ」

走竜は元々二三人で乗れる。

マサムネを連れ、徒步で城下町を出てからリゲルを後ろに乗せた。

二人乗り。

これが原付か自転車だと定番なんだけどな。

街道沿いに走る。

村一つ、町一つを通り過ぎた辺りで、街道から反れる。

しばらくすると隣国との国境近く。

ふもとに町が一つあるらしいが、山だらけだ。

その山の一つに、リゲルの家がある。

麓でマサムネから降り、そのまま徒步で山を登り始める。

手綱を引かなくてもマサムネはちゃんとついて来るようだ。

賢いな。

登り始めてすぐにアカの実の群生があつた。

「アカの実、多いな」

「「」の国と同じにでもあるからな。何故か他国ではあまり育たないようだが」

気候がほぼ同じである隣国でもあまり育たないといふ。

土壤が違うのか何なのか、詳しいことは解明されていない。

アカの実が実っているもの、実が緑のもの、花が咲いているもの。同じ場所に生えているのに、成長具合もそれぞれ不思議な植物だ。

「アカの実は年中あるが、他の実は季節によつて変わる。この時期だと……」

リゲルは辺りを見回し、一つの木を指差した。

「あの薄紅の実が美味いんだ」

数個もぎ取り、麻袋に詰める。

その木の根元にあつた茸や蔓に出来た実も採つた。

「「」のくらいで良いか。」の三つは市場には出回らない、珍しい種類なんだ」

他にも黄色の実や紫の実があつたが、たしかに店で見た覚えがある。そこから少し登つたところにリゲルの家はあつた。

キャンプで使うようなログハウス。

石造りの家が多いので、木製の家は珍しい。

「狭い家だが」

促され、家中に入る。

確かに広くはないが、一人暮らしなら十分すぎる。

一階建ての四部屋で、部屋自体はわりと狭い。

テーブルにさきほど取つた果物を並べ、カットする。

香りや断面図を観察し、種は持つて帰る。

エディの屋敷の庭にこつそり植えておこつ。

リゲルの淹れてくれたお茶を飲みながら、果物を食べる。

薄紅の方は桃に近く、蔓の方は葡萄に近い。

似ているけどどこか違うが、環境の違いの変化なのか品種違うのか、よくわからない。

元々店で使う果物以外の知識は持つていなかった。

「ずっとここに住んでんの？」

「ああ、数百年ほど。生まれた時からこの辺りに住んでいるが、さすがにこの家ではない」

生まれた時から。

要するに700年以上この土地で。

「生まれた時、この辺りは村だった。男は鍛冶を、女は機織を」

懐かしむように目を細める。

「村が襲われて、英雄の丘まで逃げ込んでひつそりと暮らしていた。アカの英雄に救われてから今の城や城下町を作ったんだ」

穏やかに笑うリゲルを見ていると、たまらない気持ちになる。

何でだろ？

「へえ。でもなんであの場所に？」ここにすれば良かつたじゃん

「ああ……地下の泉があるだろ？ あの泉の力を使うために、あの場所に城を建てたんだ」

白蛇の精霊の住処か。

精霊が住んでいるだけあって、やはり特別な力があるのだろう。

「そういえばさ、英雄の意志って結局何？」

「……英雄は、<sup>いま</sup>未来を望んだ」

「現在？」

視線をカツブに落とし、リゲルが呟く。

「五人の異世界人を召喚した、<sup>いま</sup>未来を」

「やっぱり元々五人召喚したんだな。巻き込まれたんじゃなくて」

「ああ。大陸暦760年に、異世界から五人召喚するようにと、英雄に頼まれた」

「予言じゃないのか」

「予言……ではない。英雄はその未来になるとは言わなかつた。私は英雄に頼まれた英雄の望む未来になるように動いている」

「英雄の望む未来……」

「昼食にしようか」

リゲルは立ち上がり、準備を始めた。

先ほど採った茸でパスタを作ってくれるらしい。

しかし。

長期不在にする場合、やはり魔動石は不便だ。

事前に冷蔵庫を空にするか、魔動石の入れ替えを頼むか。

そうなるとやはり電気のような自動供給が望ましい。

ジローも何とか出来そうだと言っていたので、そのうち出来上がる

だらう。

「とにかくでさ」

とてもとても気になつていていたことがある。

過去を気にするなんて小さい男だと笑うがいいや。気になるものは気になるのである。

「アカの英雄つて、イイ男だつた?」

リゲルの一番近くについて。

きっと一番信頼され、一番好意を持たれていた。

大体自分のピンチを救つてくれた男なんて、惚れるに決まつてゐる。

かなり真剣に聞いたつもりだつたのだが。

リゲルは噴出した。

「くつ……くくく……あー……つん、素晴らしいひとだつたよ」

何だよその微妙な言い回し。

「好きだつた?」

「好きだつたな」

その答えを聞いてむつとする。

一欠けらの躊躇もなく、好きだつたと答えたリゲル。

「もつとも、恋愛の好きではなかつたが」

「……本当に?」

「ああ。私は恋愛経験がない」

「は?」

恋愛経験がない?

ない?

ないって言つた?

「不老不死になつてからの私は、意図的にそういうことを避けていた。恋愛が出来そだつた年齢の頃は、生きることに必死だつたし

……そもそも同年代の異性はいなかつたからな  
不思議そうな顔に見えたのか、リゲルが続けた。

「同年代の異性に限らず……戦闘能力の高い人間は、最初に襲われたときにほぼ死んでいる」

悪いことを聞いてしまつただろうか。

淡淡と話すリゲルからは悲しいといった感情は見えてこない。

「私は女子供を避難させていたから助かつたが……異性といえば一桁の年齢しかいなかつたな」

小さく笑う。

「じゃあ俺と恋愛しよう」

正直なところ、話を反らしたかったのかもしれない。

「……私は、好きという感情がわからない」

リゲルの目を見つめる。

嘘を言つていいよつには見えない。

「好きというのは、どういうものだ？」

「人によって感じ方が違つと思つけど、俺の場合は手を伸ばす。

小さなテーブルだから向かい合つているリゲルに手が届く。  
頬に触れた。

「全部欲しい」

全部。

「リゲルが」

ここにも、からだも。

リゲルの顔が赤い。

恥ずかしいとか照れるとか、そういう感情はあるよつだが。

「全部欲しい、という感じではない。私のキイトに対するこの感情が何なのか、よくわからない」

「俺に対する感情？ どんな？」

「言葉にするのが難しい」

リゲルの傍に寄り、抱きしめてみた。

「嫌？」

「嫌じゃ……ない。ただ、恥ずかしい」

恥ずかしいがるリゲルを一層抱きしめる。

「俺以外でも、嫌じゃない？」

「想像がつかない」

枯れている、といつより意図的に封じてくる、といつのが正しいのか。

良いことではないのだろうが、キイトにひとつでは好都合だ。このまま誰もリゲルの視野に入らなければ良い。

抱きしめたまま、額に唇を寄せる。

頬に触れ、項に触れ、耳朶にキスして。

リゲルが小さく身動きする。

「くすぐったい？」

「くすぐったい……何かもぞもぞする」

「もぞもぞ？」

もう一度耳朶にキスし、様子を窺う。

「それ、何かもぞもぞする」

上目遣いって何か良い。

リゲルは耳が弱い？

それつてもぞもぞつつうがぞわぞわって言わないか？

試しに耳朶を食んでみた。

ついでに舐めた。

「ツ……！」

リゲルがびくくりと体を震わせた。

「どう？」

耳を押さえ、真っ赤な顔でキイトを見上げる。

「どうつて……びくくりしたじゃないか。何をするんだ」

「何つて……耳弱いっぽかっただから、実験？」

「実験……何か、わかったのか？」

「うん、リゲルは耳が弱い」「腰に手を回し、耳元で囁く。

「もつと、色々しても良い?」

しばらくして、リゲルが小さく頷いた。

そんなわけで。

リゲルの寝室にお邪魔して色々致したわけですが。  
首と背中と内腿が弱いと判明しました。

手が早いとか軽いとかそんな罵倒は受け付けない。

遊びじゃないし、本気だし。

まあまだ付き合つてるわけではないが。  
色々してたらもう夕方。

リゲルの選んだ珍しい魔術書を借りる。  
主に天候の魔術、時の魔術、目的の転写の魔術が載つているようだ。  
魔動石も入れ替えて、登りと同じく徒步で山を降りる。

「あれ?」

入り口付近の植物が枯れている。

地面が黒く変色しており、空気が淀んでいる、そんな感じがする。

「呪いか

「呪い?」

「ああ……そうだな、理性をなくし凶暴化する病気のようなものだ」

病気なのに呪い。

「簡単に言えば、凶暴化するというのなんだが。強い魔物が呪いにかかり、かなり手強くなる」

普段襲つてこない魔物が突然凶暴化すれば、油断している分、危険度が増す。

「世界中にある呪いの発生地点がこの状態になつた時、どこかで生物が呪われる。呪いは厄介だ。感染するまで呪いがどこにあるのかわからない」

呪いの発生地点で異常が発見された場合、城に報告が入るようになつてゐる。

だがその呪いの現在地点まではわからないので、且撃情報を待つしかない。

今のところ人間に感染したケースはないようで、ひとまず安心だ。魔物に感染した場合討伐するという選択肢があるが、人間に感染してしまえば討伐という方法が取れない。

「大抵は精靈の巫女による呪いの浄化で解決出来るのだがな」

呪いの浄化の魔術は詠唱が必要だ。

これが長い。

詠唱を聞いたことはあるが、その長さと必要性のなさからキイトは一文字も覚えていない。

覚えていたとしても才能がないキイトでは成功率なんて一割もないのだろうが。

「私がこの山に住むのは、この発生地点を監視するためでもある。一応、麓の町からも巡回があるのだがな」

この発生地点を消すことが出来れば、呪いもなくなり少し平和になるかもしれないが、消滅方法は見つかっていない。

「帰つたら報告しなくてはな……」

溜息混じりに呟く。

マサムネに乗り、城に戻る。

「次の店休日も会える?」

「……ああ」

「良かつた。じゃあまた」

抱き寄せ、額にキスする。

城の前だが、辺りは薄暗い。

夜の広場なんか、元の世界じゃちょっと見ないくらいにちやいちやしている人たちが多いのだ。

こちらの世界ではわりと普通なのだらう。



午前中に店に行き、開店までにケーキを仕上げ、ショーケースに並べる。

仕上げが終わったら、仕込みだ。

今日はクッキー種を仕込む。

成型して冷凍し、必要な時に必要な分だけ焼成する。

あとはパウンドケーキとシートを焼こう。

タルト生地も仕込んでおいて、明日型に嵌めて……。

夕方はビストロに配達があるから……。

そこまで考えてイグレッシュオに呼ばれた。

「お密さんだよ」

「あ」

厨房から店側に出ると、騎士がいた。

「やほー、ケーキ屋さん」

「騎士だ」

「……どうして職種で呼び合つてるんですか？」

それはこっちが聞きたい。

つうか名前知らないし。

「おやつ買いに来たんだー。あ、コレだ！」

柚子のパウンドケーキを手に取り、嬉しそうに笑う。

そうか、あれを気に入つたのか。

「他のもおいしそー」

次々と籠に焼き菓子を入れていく。

「そんなんに食うの？」

「うん、討伐つておなか減るよなー。おやつにするんだ」

にこにこと上機嫌に焼き菓子お買い上げ。

普通のケーキは持つていけないので買わないよつだ。

「討伐の時の」はんつて味氣ないしゃー。下手したら非常食のみだし」

討伐時に携帯する非常食は味のないカンパンみたいなやつだ。  
それと定番の干し肉。

この干し肉がまた硬くて味がない。

普通噛めば噛むほど味が出るもんじゃないのか。

何の肉かは聞いていないが魔物の肉のようで、若干魔力が回復する感覚がある。

噛む回数が多いから確かに満腹中枢が刺激されるかもしれないが。  
それはそれ、これはこれ。

味は重要。

量も重要。

腹が減つては戦も出来ぬ。

そんなわけで、前回の討伐では柚子パウンドをおやつに持つていつたわけだが。

討伐地点の付近に町や村があれば美味しい食事を取れる可能性もあるのだが、毎回そういうわけにもいかず、非常食を食べる羽目にになるのである。

「ところで、お前名前は？」

「そつか、名乗つてなかつたねー。ノルマンド・ディスカだよ。ノルつて呼んでー」

「ノルな。俺はキイトだから。ケーキ屋さんじゃないから  
「ディスカつて……まさかディスカ侯爵家の……」

「知つてるのー？」

「そりや知つてますよ！ こんな店に侯爵様が来られるなんてつ。

高位の貴族様なんて初めて見たつていうかつ

「お前の中に俺は貴族として認識されてないのか」

確かに血筋的にはまつたく貴族ではないが、一応高位の貴族なんだけど。

別に自分の手柄でもないし威張りたいわけでもないが、カウントさ

れないのもどうかと思つ。

「へ？」

「は？」

「そつかー。ケーキ屋さんも貴族だもんねー。カネル公爵家だつけてー？」

「へ？」

何故そんなに驚いているのか。

イグレシツィオは皿をまん丸にしてキイトを見ている。

「公爵……？」

「公爵」

「ええええええええええええええ？」

「その反応こそがええええ、だよ」

本田のデザートプレート。

シフォンケーキにアカの実のショーラート、ソース。

それにカラメリゼしたナツツと、砂糖をかけて焼いたステイックパイ。

どうもこの国でパイを見ない。

パイ 자체がないのか、好まれてないから廃れているのかは不明だ。

イグレシツィオは存在自体を知らなかつたのだが、元々詳しいわけではないのでわからない。

ビストロで皿に盛り付けし、大体こいつ感じでと伝える。あとは注文が入つてから盛り付けしてもらつのだ。

キイトがずっとビストロで待機しておくわけではないので、盛り付けは簡単にしてある。

「ああ、そうだ」

「ん？ どうしたの、キイトくん」

「ターシャは付き合つてないのにカラダの関係はあるつてこと、ある？」

「へー? ないナビ……「へーん……でもたまに聞くよ、やつこいつ話

「やつこいつもんか」

貞操觀念なんて色々だしな。

「そもそも、この国は婚姻前にやつこいつ関係になると、少なによ

「マジ?」

「マジマジ。私の前いた国は婚姻前からむしろ推奨、って感じだったけど」

リゲルはこの国にやつこいついるはずだ。

それなのに、応えてくれたということは、やつこいつだ。

ポジティブに考えすぎかもしね。

が、超前向きに考えると結婚しても良いこと思つてるレベルなんじゃないだろ? つか。

「キイトくん、顔がにやけてるよ? リゲルさんと向かあつたね? お姉さん? 」

ターシャがにやにやとキイトを突いて来る。

ああ、やつぱり?

にやけてるだろ? とは思つたが。

「まあ、進展はした」

次のデートでは確実にOK貰いたい。

押せば何とかなりそうな気がする。

ビストロを出で、次に向かうのは城。ジローとHペイの職場である。

最近ジローは忙しいらしく、屋敷であまり会つことがない。

今回はジローに魔動具のテストをして欲しいと呼び出せられてくるのだ。

「せんぱーい」

田のトに隈を作り、疲れた声で出迎えてくれた。

髪の毛もさわせ、服はよれよれ。

大変そうだ。

「ほい、差し入れ」  
パンプキンパイだ。

デザートプレート用にパイ生地を仕込んでいたので、ついでに作つたのである。

「あざつす！！」

途端に元気になる。

菓子でそんなに元気になれるつて凄いよな。  
お茶を淹れ、話を聞く。

今回ジローが作つたのは単なる冷蔵庫とミニキサーだ。  
一から作ったものではなく、改造品。

改造部分は勿論、エネルギー供給部分。

要するに魔動石ではなく魔動力で稼動させよ、である。  
「城から店までなら何とか届くと思つたんですけど。一応中継も作つて  
るつす」

もし失敗していくても、魔動石の補充場所は残つてるので無駄には  
ならない。

魔動力式が普及すれば面倒が省けて良い。

魔動石を売つて商売している人も、魔動力に変換するためにどう  
せ魔動石も使うし職を失う心配はないだろう。

変換所でも人手がいるだろうし、職は増えるかもしれない。  
そこまで普及するにはまだまだ時間が掛かるだろうが。

「あ、そうだ。滋郎、これなんだけど」  
リゲルに借りた魔術書を渡す。

使えそうな魔術のところにキイトなりに考へた原案を挟んである。

「これは……」

「忙しいだろうに悪いな。一応魔動具の原案つていうか。手が空いた時で良いんだ、使えそなのがあつたら考へてみてくれ」

「いいっすね！ これ！！ あ、これもいい！！」

ジローは軽く興奮状態だ。

テンション高い。

あれか、疲れがピークに達しているのだろうか。

「くく……開発王に俺はなる……」

「…………お前普通に寝ろよ。俺が言うのもなんだけど」「でもこれあるとイロイロ問題起きそうっすね」

「確かに。個人的にはすっげー欲しいけど。あと城だけ使うとか

さ、一般には流通しなければ良いかなとは思つ

「そうっすねー。魔動力が完成したらこっちにも着手したいっす。あ、これもいい……」

ジローは魔術書と原案を熱心に見ている。

「あ。忘れるところだつた」

「何すか？」

「エディにもあとで話そつと思つてるんだけどや……ちょっと紙を融通して欲しいというか」

むしろ紙の製造工場が欲しいというか印刷工場が欲しいっていうか。どちらにせよジロー待ちになるのだが。

「魔術書の最後の方の原案あるじやん」「はい」

「その裏」

表は転写の魔動具の原案だ。

「はい……え？」

「大規模だからな、時間がかなり掛かると思つけど」

「そうっすね。でも……うん。いけると思つっす」

裏は紙の利用案、プラス、工場計画である。

冷蔵庫とミキサーが稼動した。

ジローの使う城の一室からケーキ屋までの距離は、魔動力の供給が可能といふことだ。

距離がどれだけのばせるか、一度にどれくらい供給が可能かなど、確認作業は山ほどある。

とりあえず第一段階終了といふことで、ジローは今までの分を取り戻すかのように連休を取得した。

「つて聞いてたんだけど、何でいるの？」

マコトにそう言われたジローは、厨房用の服を着て泡立て器とボウルを手にしている。

「だつて暇なんすもん」

キイトが屋敷を出た時は、まだ起きていなかった。

昼過ぎに起きたらしいが、娯楽が少ないので暇を潰せなかつたようだ。

本を読むなり買い物するなり、色々あると呟つただが。

「マコト先輩は、何しに？」

マコトは侍女服を着ているため、今日は休みではないのだろう。

「何つて……お遣いかな。春田チャンとオヤツにじよつて

「仕事は良いんすか？」

「仕事みたいなもんでしょ。ていうか侍女の仕事ほとんどないけどね。勉強ばつか」

マコトはぶつぶつと不平不満を吐き出したあと、あれこれ楽しそうにケーキを選び始めた。

「おに滋郎、クリームだれるだ

キイトはジローの手から泡立て器とボウルを奪い、冷蔵庫に仕舞う。

「マコ、明後日から遠征だつて？」

今朝突然リゲルが屋敷を訪ねてきたのである。

用件は次の店休み日である明後日、仕事になつたので会えない、と  
いうこと断りと謝罪だつた。

「うん、呪いがどうのこうのつて」

呪いの感染した魔物が発見され、その浄化にミナミが選ばれた。  
一応護衛であるマコトは当然、リゲルや騎士も数人同行するらしい。  
せつかくのデートが潰れてしまい、キイトとしては面白くない。

「あー、くそ、よりによつて明後日とか」

「もしかしてリゲルと約束してた？ 店、休みだもんね」

「まあな。気をつけるよ」

「大丈夫、大丈夫！」

マコトはキイトの言葉に笑顔で軽く返す。

確かに五人にとって魔物は、そんなに危険なものではない。  
だがそれを見ていたジローは真剣な面持で忠告する。

「……油断大敵つすよ。何気ない行動ひとつで運命変わることだつ  
てあるんすから」

「……うん。気をつける、ありがと」

ジローの言葉に、はつとしたマコトは真剣に頷いた。

ジローの表情が、真剣だつたから。

いつもの調子ではなかつたから。

その言葉が何を意味するか、わかつてしまつたから。  
キイトはその様子を見て、黙つたまま息を吐いた。

仕事を終え、キイトとジローはビストロに行くことにした。  
ジローは最近籠りっぱなしだったので、久々の外食である。  
屋敷に戻つたらエディと話し合いをする予定だ。

話し合いというよりは頼みごとと言つた方が正しいか。

とにかく肉が食べたいというジローのロックエストで、注文は鶏肉の丸焼きとなつた。

キイトは肉といえば牛肉だと思つたがジローは違つらし。

鶏肉の腹に野菜や果物がたっぷりと詰められ、ソースもたっぷり。

淡白な肉に合ひつてりとしたソースが皿に。

「そういえば遠征つて、及川先輩も行くらしいですよ」

鶏肉を夢中になつて頬張りながら、その合間にジローが言つ。

もちろんメインは肉である。

「マジか。あー、春日が行くんだもんな」

「つす。健氣つすね。上手くいけばいいんすけど」

「こればっかりはどうにも。

好かれれば好きになるなんて単純なものではない。

「及川なー。なんつうか春日の前では弱氣つつか

「へタレつす。見てておもしろいけど」

元の世界ならともかく、こちらではミナミの傍には白蛇ホワイトがいるわけ

で。

近付くだけでもびくびくしているのがよくわかる。

蛇型の魔物が出たらどうするのだろうか。

「キイトくん、ジローくん、これ

「ん？」

「私から、サービス！ なんて、試作品れんしゅうなのよ。感想聞かせて欲しいなつて」

ターシャに差し出された皿は、デザートプレートだった。

もちろんケーキ屋から仕入れているものだ。

ただしキイトが提示した盛り付けではなく、アレンジされている。

「へえ……かわいいですね」

女性らしい盛り付けだ。

キイトはタルトの横にクリームを添えていたが、ターシャは上にか

わいらしく絞つている。

「つうか絞りが出来るならもうと難しい盛り付けにしても良いよな」

「ふふふ、最近ちょっとケーキいいなあって思つてて。ひそかに練習中。ケーキ屋さんのケーキつてこうやつてかわいく絞つてるよね」

「あーなら暇な時にも店に来れば?」

「え、教えてくれるってこと?」

「うん、凝つたテクノレーション出来た方がデザートプレートの幅も広がるし」

その上、盛り付けの指南をせずに済む。

そうすれば時間の節約にもなる。

ついでにケーキ屋も手伝ってくれれば万々歳なのだが。

屋敷に戻るとエディはすでに夕食を終え、窓いでいるところだった。

「悪い、遅くなつた」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

テーブルにつき、マチルダにお茶を淹れてもらう。

「さて、それでは伺いましょうか」

リゲルに借りた魔術書と原案を書いた紙を取り出し、説明を始める。

「紙の普及ですか……」

「元の世界じゃ、紙はかなり利用されててさ」

紙製品のデザインをさらつと書いているのだが、实物を見たことのないエディには分かり難いかもしれない。

デザインを指差しながら言葉でも補足してどうにか説明する。

「なるほど。製作所にこれを注文したいというわけですね」

「それなんだけどさ、製作所を買い取る、って出来ないか?」

別に買い取りまでしなくても良いのだが、自由に指示出来た方が楽である。

ついでにそのまま人員も欲しいのだ。

ケーキ屋関連にも人が欲しいが、長時間は要らないため兼任にすればちょうど良い。

紙の製作所は城下町では一箇所。

もちろん需要があまりないので、どちらも人員もなく、利益も少

ない。

所持者もあつさりと手放す可能性が高いのではないだらうか。  
キイトが田をつけたのはその片方。

「城に近いこっちの方。土地が広いんだよな」  
城と屋敷の中間にある製作所は、庭がかなり広い。

「魔動力の変換所とかにも使えそうじゃね?」

変換所がどこになるか、まだ決まっていない。

一般に普及できるかも確定していないので当たり前なのが。  
「そうですね……しかしこの紙の製作所、損失ばかりじゃ話になりませんよ?」

「最初は赤字が続くかもしれないけど……そこはぜひうにか頼む。もちろん何年掛かっても返すし」

「金額にもよりますけどね。……これくらいなうにうにかかるでしょう」

「助かる」

エディ様様である。

現在製作所の損益はとんとんといつたところなので、そこまでひどい赤字にはならないと思うのだが。

それに店で使う紙製品を上乗せするところとは、製作所云々というよりは店の方が問題だ。

店で紙製品を使うとその分単価もあがるわけで。

それで売り上げが落ちると赤字、落ちなければ黒字だ。

もちろんキイトは売り上げが上がると見ていくからこそその買い取りである。

ただそつち方面は素人なので、確実とはいえない。

「持ち主は……ああ。買い取りの話はこちらで進めておきましょう」

「何だ、知り合い?」

「ええ。ちょうど手放す話が出ていたので」

タイミング良いな。

この話はここで終わり、あとは魔動力や魔動具の話に移った。

魔動力は普及の目途がたてば国レベルで漫透させたいらしい。

二人は戦争に関してノータッチだが、エディは一応中枢にいるので忙しいようだ。

戦争の準備は着々と進んでいること。

隣国が勝ってくれれば戦争にならずにすむのだが。

「うがあ！ もうやだあああああ

マコトは叫び、机に突つ伏した。

精霊の巫女は浄化の魔術や回復魔術に加え、詳しい国の歴史を勉強せねばならない。

マコトはミナミに付き合つて勉強するよつて強要されたのである。勉強嫌いなマコトはもちろん断つたのだが、ミナミを盾にされ致し方なく頷いた。

歴史は週に数回、リゲルが講師として訪れる。

「歴史なんて巫女と関係ないじゃんん

低く唸る。

リゲルとミナミが苦笑いしているのが田に映つた。

ミナミの肩に乗つたトーカがマコトを馬鹿にしているかのよつて舌を出している。

「蛇に馬鹿にされてる……」

歴史の勉強は巫女の義務だところが、実際活用されていいるかといえば……という感じらしい。

これを機に廃止にすれば良いよと訴えてみたが、却下された。  
760年分の歴史を、かなり細かく勉強するのだ。

日本のことだつてこんなに詳しくないつてほど、ヒトランに詳しくなりつつある。

浄化も回復も使わないのに翻わされ、もちろん侍女の礼儀作法とか騎士の訓練とか、中々多忙だ。

勉強メイン、仕事なし。

精霊の巫女の侍女は、巫女の補助をするらしいのだが、基本的にミ

ナミは何でも一人でしてしまう。

元々一人でしていきたいことをいざ他人にやつてもうえといわれても、確かに抵抗があるだろう。

「マコト、ミナミ。休憩にしようか

リゲルがお茶を淹れてくれた。

熱いお茶は落ち着く。

「でもやっぱり納得いかないい」

「そう言うな。学んだことはいつか必ず、マコトの力になる妙に力強いその言葉が、何故だか心に響いた。

休憩後、みつちりと歴史の勉強をし、マコトは再び机に突っ伏した。疲れた。

かなり疲れた。

一日がこれで終了なマコトと違い、ミナミは今からが大変なのだ。マコトはぐつと伸びをして立ち上がった。

ミナミの巫女装束を用意するためだ。

巫女装束、といつても正月に見るような赤と白の和装ではない。上半身はタイトな作り、下半身はふんわりとしたロングスカート。色は全身真っ白で、ヴェールで顔を隠し、まるでウェディングドレスのようだ。

背中には小さなボタンがたくさんついているので、一人で着替えることが出来ない。

巫女には必ず侍女がついているので問題ないのだが、不便だと思う。マコトはミナミの背中のボタンをとめながら、そんなことを考える。

「よし、オッケ。いこつか」

精霊の巫女の役目、それは人々を癒すこと。

白の塔の一階は聖堂となつており、怪我をした人々が訪れる。

そこで巫女は怪我人を癒すのだ。

病気には効かないのだが、訪れるのは怪我人だけ。

役目は他に不浄のもの、いわゆる呪いの感染が発見された場合、現

場を訪れ净化すること。

元々が攻撃的な魔物の場合は净化せず、そのまま討伐してしまつこともあるらしい。

净化してもしなくても、討伐することにかわりがないからだ。ミナミが聖堂で人々の相手をする間、マコトはその護衛につく。侍女にしか見えないだろうが、れつきとした護衛である。

ごく稀に暴走して巫女を攫おうとしたり、病人が乗り込んできたりするそうだ。

特に大病を患つた人は暴走しやすい。

効かないと理性ではわかっていても、もしかすると、と希望を捨てきれないのだろう。

その気持ちはわからないでもない。

翌日の朝、歴史がないのにリゲルが白の塔を訪れた。  
珍しい。

「ミナミに呪いの净化をしてもらつことになった」

リゲルは淡々とミナミに告げる。

呪いは発生地点が決まっているらしく、呪いが発生するとその地点が変色するのだと净化の勉強で教えてもらつた。  
最近その地点が変色していたので近々……といつ話は聞いていた。  
その話がミナミに来るのは思つていなかつたが。

「じゃあ私も同行するんだよね？」

「ああ。私と救世主も同行することになつていい」

「みつちー……！」

笑いを必死で耐える。

さすがみつちー、やつてくれる。

「私に……出来るでしょつか」

自信がなさそんぽつりと呟く。

「大丈夫だ、難しい規模ではない。ミナミなら問題ないと思つ」

呪いの浄化の練習はよくしている。

特に失敗なく出来ているのだが、実践は初めてだ。

不安に思つても仕方がない。

「今回の一番の目的は呪いを直接見ることだからな。その気配を感じてくれればそれで良い」

「それつて今から?」

今日は訓練の日だ。

休むことを伝えなくてはならない。

世話になつてゐる女性騎士は何故かマコトをとても氣に入ってくれているようで、がつかりするだろう。

マコトの剣術とこちらの剣術はかなり違うので、面白いと思われているのかもしねり。

「明後日の早朝、出発する。呪いには監視をつけているから被害は大きくならない」

現役の巫女は白の塔にしかいないため、近場でない限りどうしても日数が掛かる。

そういう時は対象に監視をつけて被害が出ないようにするのだ。

被害が出そうになれば対象は処分される。

「特に必要なものはない。この部屋まで迎えに来るから用意して待つていてくれ」

となると、明後日は侍女服ではなく騎士服か。

侍女服は戦い難いからね。

久しぶりの実戦だ。

楽しみである。

早朝。

マコトは騎士服を、ミナミは巫女装束をそれぞれ身につけ、迎えを待つた。

騎士服は特殊な製造方法で布製なのに防御力が高いという代物である。

もっとも高いとは言えど金属製の鎧に比べれば低いのだが。軽量化の魔術が掛かっているものが主流といえば、さすがにマコトも鎧を身に着けて動く体力も筋力ない。

それは他の4人も同じようで、誰も普通の鎧は使用していない。リゲルが部屋を訪れ、竜車に移動する。

黒塗りの竜車は想像と違い、高級そうだ。金色の装飾で縁取りされており、揺れを感じさせない仕様になっている。

四人乗りの竜車に乗り込む。

竜車を引く走竜は三四。

番号は100、101、102と連なっている。

中に乗るのはマコトとミナミ、オマケにトーカで、リゲルは前、走竜の手綱を持つ。

自動操縦、というか手綱を持たずとも田的池まで問題なく進むようだが、見張りも兼ねて前に座るようだ。

「みつちー、久しぶり！」

鎧を着用した騎士が一人と、ミッキーが黒い竜に乗つてやつて來た。

鋭い爪を隠し持つ、爪竜という種類の黒い竜だ。

王宮騎士は主にこの爪竜に騎乗することが多い。

「みつちーつて言つたな！」

お決まりのやり取りにミナミが小さく笑つた。  
ウェディングドレスもどきのミナミ、ミッキーが見惚れ、マコト  
は笑いを堪える。

何て予想通り。

二人に報告しよ、といつそり考える。

「さて出発するぞ」

それを合図に竜車が動き出す。

聞いていた通り、揺れがない。

こんなに安定しているのならば遠出も苦にならないなと思う。

三時間程揺られ、湖の畔に到着した。

「リゲルさん、遅いー。疲れたよー」

間延びした話し方の騎士が竜車に近付く。

監視は警備か討伐のどちらかの騎士がするものらしい、今回の騎士  
は走竜ランドラに乗っているので、おそらく討伐隊の方だらう。  
警備は跳竜ジャンドラに乗っていることが多い。

「悪いな。呪いは？」

「対岸。あーやつと帰れるー」

巫女一同が到着し、監視は終了らしい。

竜車を置いたまま、歩いて対岸へ渡る。  
道が悪く、歩きづらい。

さすがに、ホールは邪魔なので、ミナミは後ろに捲つている。  
ふらつくミナミをミッキーが支える。  
しかしその度に田線がトーカに、若干ピクついているのがおもしろ  
い。

渡った途端、ざわりと鳥肌がたつ。

ミナミの顔は青白く、気分が悪そつだ。

「リゲル、何なの……？」

「これが呪いの気配だ」

そういうリゲルも顔色がよくない。

ミッキーがまたたく変化なしというのがむかつく。

「巫女として才能があればあるほど、呪いに敏感になる」

なるほど。

マコトもミナミではないが少しは才能があるといつとか。

青白い顔のまま、ミナミが膝をつき、手を組む。

巫女が長い詠唱を行う間、護りを固めるために騎士がいる。

呪いは詠唱を嫌うので、詠唱している巫女に気付くと攻撃してくるからだ。

今回はリゲルが結界を張り、全員を保護する。

結界は万能ではない。

結界の力よりも強い攻撃を受ければ、当然消滅する。

そうならないように危険な敵が現われた場合は、騎士やミッキーが対応するのだ。

黒く変色した小鹿が、勢よく結界に突っ込む。

呪いが感染した生物は、黒く変色するのだ。

ミナミの細い声が呪文を紡ぐ。

この呪文が本当に長く、その間防御しなきゃならないので使い勝手が悪い。

精霊の巫女、というか才能がなければ九割は失敗に終わる。

ミナミは今のところ百発百中、リゲルだと七割くらい。

魔物の少ない場所なのか呪いに近づいて来ないだけなのか、小鹿以外の生物は見当たらない。

ミナミの初本番もあつさりと成功し、ミッキーの見せ場もなく。

呪いが消え倒れた小鹿。

リゲルはしゃがみこみ、そつと手を伸ばす。

回復魔術を掛けられた小鹿は元気に飛び上がり、仲間も元へと駆けて行つた。

「良かつたね」

一安心だ。

ミナミの成功も、小鹿の無事も。

ふと、リゲルの項に、赤い痕を見つけてしまった。

知り合いや友達のそういうものを見つけるとこいつのまゝ、何と言つか

恥ずかしい。

あえてそれには突つ込まないが、相手はビリセキイトだらけ。

「あ……」

ぽつりと、声が落ちた。

立ち上がったミナミが、リゲルの項を見ている。

あ、まずい、と思つたが、もう見てしまつてこじるし、ビリショウも

ない。

「あちやー……」

なんてこいつた。

マコトにとってはどちらも友人だ。

どうも上手く言つて欲しいけど、片方しか成り立たないわけで。  
遅かれ早かれ、いつなることはわかつていた。

「戻りましょう」

その顔をヴォールに隠し、歩き始める。  
だが声が震えている。

「春日さん」

ミツチーが素早くミナミの傍に立ち、手を取った。

「危ないから」

「……ありがとうございます」

ミツチーは気付いているのか、いないのか。

恋愛つて難しい。

さすがエディ。

仕事が早い。

紙の製作所の買い取りが成立した。

製作所と従業員が二名、キイトの指示で動かせるよつこなつたのである。

さつそくケーキの箱の「デザインを渡し、製作に取り掛かつてもらう。キイトは店で午前中は仕上げを、午後から仕込み、閉店後は事務仕事である。

事務仕事は最近の売り上げのまとめや商品との売り上げの数字を算出する予定なのだ。

当たり前のことなのだが、売れるものは数を増やしたりバリエーションを増やし、売れないものは販売中止にする。

「どうですか？ 最近お客様多いし、順調な気がするんですけど」

キイトの手元をイグレッソイオが覗き込む。

紙はわりと高価なものだが、キイトが書き込んでいるルーズリーフは貴い物。

マコトが召喚時に持つていたものである。

ケーキによつて原価が違うため、何が何個売れたのでいくらの利益が出る、という計算を最初に行つ。

そこから材料の仕入れ金額や魔動石代、給与などを引けば純利益が出てゐる。

この純利益から税金が引かれていくわけだが、エトランの税金制度は穴が多い。

それは今まで日本で暮らしていきたからそつとつのであって、じつは世界ではそれが普通、なのだが。

「うん、利益は上がってるな」

順調だ。

ビストロに卸してたる分も数が増えているし、店での売り上げも日々増加している。

利益を出したあとは商品」との売れ筋を確認。

「んー、やっぱりステイックパイの売り上げが他の倍くらいあるな

「それと最近、騎士様がよくいらっしゃいます」

「ノル？」

「いえ、ディスカ様もよくいらっしゃいますけどね、違う方も多いんです」「

王宮に住む騎士は、基本的に自分のことは自分で。

というより想像以上に従者や侍女、下働きのような人が少ない。

貴族一人につき数人、侍女がつき、何やかんやと世話を焼くのかと思つていた。

が、それは王族や上位の貴族くらいで、上位貴族の中にも従者がないということがある。

エディも従者はない。

屋敷には使用人がいるが、しかもそれは三人のみ。

その三人だけてやたら気安い関係で、中世ヨーロッパなイメージを持つていると裏切られることが多い。

貴族だけて自分で買い物をするし、お茶を淹れるし、着替える。さすがにドレスアップなどは一人ではないようだが、箸より重いものは、などということはない。

「一度にたくさん買われるので売り上げが上がつて嬉しいんですけど……」

イグレッシュイオは言葉を濁す。

確かに売り上げが上がれば嬉しいが、今まで見なかつた客層が増えると不審である。

「ノルが言つてたみたいに、討伐のおやつなんじゃね？」

「そうなんですかねえ」

今度ノルマンドに会つたら聞いてみよう。  
何か知つていいかもしない。

数日後、リゲルといつものビストロで待ち合せた。  
リゲルは昼が遅かったというので、軽くつまめるものを注文。  
一口サイズのクラッカーのようなものに、チーズやトマト、ディッシュなどがのつているものが運ばれてきた。

あとはポテトフライと野菜スティック。  
この一つは一緒についているソースとティップが旨いのだ。  
「先日はすまなかつた。そしてこれは土産」  
どん、とテーブルに置かれたのはかご盛りの梨のようだ。  
洋梨ではなく和梨である。

「ありがと」

現場近くに梨があつたのだろうか。

和梨は菓子に向かないで、冷やしてそのまま食べることにしよう。  
「それでなんだが。また少し忙しくなるから……当分家に帰れそう  
にない」

淡々とした口調だが、上田遣いでキイトを窺つリゲルは正直かわい  
い。

だがしかし。  
だがしかし。

ラブホもなければ屋敷に連れ込むのもどうかなこの状況で、唯一手  
出ししやすかつたのが、リゲルの家である。  
いやほら若いから。

「すまないな」

「いやいいよ。でも次帰るときは教えて欲しいかな」  
「わかった」

キイトの下心に気付かないリゲルは、じく普通に頷いた。

「魔術書は読んだか？」

「今半分くらいかな。時の魔術を覚えたいんだけど、リゲルは使える？」

「初歩の初歩くらいなら。今存命の魔術師で時の魔術を使える者はいない。本当に覚えたかつたら自力でがんばるしかないぞ」

「そんなに難易度が高いのか。

「初歩の初歩だけなら教えられるから、あとは自力でがんばってみてくれ。おそらく、大丈夫だと思つ」

「難しい魔術なんじやないの？」

「難しいな。ただ、異世界から召喚された五人なら、使える可能性が高いと思つ」

「へえ……」

リゲルがそういうなら、ちょっとやってみよう。

時の魔術はキイトが欲しいものを開発するために、絶対必要な魔術だ。

五人のうち一人でも使えるようになれば開発が進む。他の四人にも聞いてみて、希望者だけリゲルから教えてもらう」とになりそうだ。

少なくともジローは習いたいと言つだつ。

浄化の話や店の話、たつた数日しか経つていないが近況を聞く。

元の世界では気軽にメールや電話で連絡が取れたが、この世界は違う。

通信系の魔術は発達していないし、手紙を送るくらいなら直接会つたほうが早い距離だ。

「そういえば魔動石のエネルギーはうまくいつてるか？」

「ああ、今のところ順調。滋郎が連休の間も実験してた」

「せつかくの休みを……ジローは働きすぎじゃないか」

「働く方が楽しいんだってさ。食事と睡眠はきちんととつてたよ」

ジローの休みは昨日までだったのだが、結局いつもより睡眠を多くとるだけで休みらしいことはしていなかつた。

しいていうなら絵を描いていたことくらいで、それも一応仕事に關係する。

こちらにはない漫画の描き方を、イグレッティオに教えていたのだ。キイトの計画は絵本作成や小説に挿絵をつけることであつて、漫画作成ではないのだが。

ジローの説明をすぐにのみ込んだイグレッティオは、漫画らしい絵を数点書いていた。

この調子なら計画は順調に進みそうだ。

「ああ、そうだ。次の店休日の朝、城に来て欲しい」

「城に？」

「英雄の丘に行つてもうつことになつた」

「五人とも？」

「……五人ともだな」

以前聞いた精霊の武器か。

ちょうど数が五で、確實に怪しいと思っていた。

「わかつた」

“英雄の意志”ね。

初恋は、近所のケーキ屋さんで、お手伝いをしていた同じ年くらいの男の子。

家族の誕生日やクリスマス、お客さんが来る時、いつもそのケーキ屋さんだった。

“パーティスリー フジ”

わたしが生まれる少し前に出来たばかりの、新しいケーキ屋さん。お母さんがそのケーキ屋さんが好きだったのだ。

小学校2、3年頃から、同じ年くらいの男の子を見かけるようになつた。

お母さんが、ケーキ屋さんの三番田の息子さんでみなみより一つ年上なのよ、と教えてくれた。

一生懸命がんばってお手伝いをするかっこいい男の子。

わたしはケーキ屋さんに行くのがますます楽しみになつた。

お店の前を通りもつていちらちらと見てしまひ。

お母さんはそんなわたしを見て笑つてた。

4年生の誕生日に、ケーキを買いに行つた時。

男の子にケーキを手渡された。

今までお店側の手伝いをしたことがなかつた男の子。

不思議に思つたけど、嬉しくて。

その日の夜、その理由を知つた。

“ みなみちゃん お誕生日 おめでとう ”

定番のその文字は、今までと筆跡が違つて。  
あの男の子が書いたんだってわかつた。  
お母さんの話では、ずっと練習していく、最近書かせてもらひえるよ  
うになつたんだって。

たぶんそれがきっかけ。

クラスの友達に、みなみちゃんは誰が好きなの、と聞かれ思ひ浮か  
んだのはひとり。

遊んだこともない、話したこともない、男の子。

お父さんが一戸建てを購入したことで、引っ越しことになった。  
中高一貫制の私立中学に入学すると同時に、お店から大分離れてし  
まい。

嫌だつたけど、どうにもならないことだし、黙つてた。  
それでも年に数回、お店にケーキを買いに連れて行つてもらつて。  
それだけで充分だつた。  
それだけで満足だつた。

2年生になつて、ケーキ屋さんがなくなつたことを聞いた。  
事故で亡くなつたつて。

優しいおじさんとちやきちやきしたおばさん。

作る人がいなくなつてしまつたケーキ屋さんは閉店。

一番上のお兄さんは成人してたから、兄弟だけで暮らしてゐつて。

お店がなかつたら、もう会えない。

3年の夏、突然お母さんが言い出した。

好きな高校に行つてもいいのよ、と。

お母さんが勧めてきた高校は、色々な科のあるところ。

英語科なんていいんじやない、と、確かにわたしは英語好きだけど。調理科にあの男の子もいるし、なんて。

せつかく受験して中高一貫制の私立に入つたのに、とか。

入つたからつてあの男の子はわたしのこと覚えてないよ、とか。

色んなこと考えたけど、わたしは。

行つてもいいの。

咳くとお母さんは笑つた。

たまにはわがままくらひ言いなさい、と。

違つ場所でアルバイトをすると聞いて、行つてみたり。もうとつくな男の子、つていう感じではなくなつていて。すゞくドキドキした。

高校に入学して、よく見かけるようになつて。つい目で追つてしまつたり。

アルバイト先がお兄さんのお店なこと。高校に入つて彼女がいないこと。すごく仲のいい後輩がいること。今まで知らなかつたことをたくさん知つて嬉しくて。それだけで満足して。

……それを今、すゞく後悔してゐる。

もし、話しかけてたら、何か違つた?  
もし、告白してたら、意識してもらえてた?

藤村先輩の、リゲルさんを見る目が。

すごく、嫌。

そんな目で、表情で、他の人を見ないで欲しかつた。

わたしを、見てほしかつた。

リゲルさんにつけられていた、赤い痕。それをつけたのは、きっと藤村先輩だ。

泣いちゃダメ。

人のいないところじやなきや。

帰るまで、我慢しなきや。

「……その、リゲルさんは……なんていうか、年齢がアレだから……」

「え？」

及川先輩はすぐ真剣な表情で。

「か、春田さんは、かわいいし、その、がんばれば藤村も……どうやら慰めてくれていてるみたいで。」

必死に言葉を探す及川先輩がかわいくて、つい笑ってしまった。

「ありがとうございます」

わたしは大丈夫。

ただ想うだけなら、きっと許されるから。

ゆるやかな丘の上、巣穴。

店休日である今日、約束どおり英雄の丘に来ていた。

「この祠の奥に、精靈の武器を保管してある」

以前来た時から大分経っているのにアカの実は相変わらず。そのまま実っていたのか、朽ちてまた実ったのかはわからないが、不思議な植物である。

「中には五つの部屋がある。それぞれの武器を取つて来て貰いたい」「危険はないのか?」

「危険はない。罠もないし、魔物もない。どの部屋が誰の、なんて考えなくて良い。好きな部屋に行つてくれ」

「わかった。じゃ、行こつか!」

マコトの先導で巣穴に入った。

危険がないのならばと気楽なもので、互いに近況を話しながら歩を進める。

中は薄暗かつたので、ミッチャーが魔法で光を灯す。五つのその光はそれぞれの頭上でゆらゆら揺れて、ついてくる。便利だ。

入り口から細い道を進み、すぐに拓けた場所に出た。そこから分かれた五つの部屋。

「どこでもいいって言ってたよね。私ここでいいや」マコトが真っ直ぐに進む。

左から一一番田。

自然と隣にリナリ、その横にミッチャー。

残りの両端にキイトとジローが進む。

部屋の中央に台座、そして短剣が刺さっている。

キイトはそれを手に取る。

頭に響く声が気持ち悪い。

若い男の声。

声が気持ち悪いというのではなく、頭に響くから気持ち悪いのだ。  
もしやこの声は、アカの英雄のものだろうか。

ともかく声の通り、指示に従う。

自分の血液を、武器に与える。

どうやらそれが持ち主認定のための方法らしい。

たったそれだけのことなのですが、その短剣を抜く。  
鞘ごと台座に刺さっていたので、何か特殊な加工でもされているの  
だろうか。

使わないので待機状態、すなわち体内に隠すことにする。  
どうやらこの武器はそういうことも出来る、特殊なものらしい。  
原理はわからないが、魔術が関係しているのだろう。  
武器を手にしたのでここに用事はない。

先ほどの場所に戻ると、一番乗りだつたらしく、誰もいない。  
ミナミだけは血液に手間取りそつではあるが、他が遅いな。  
感覚的に数分経ち、ようやくマコトが戻り、ジローが戻り。  
ミナミ、ミッキーと戻ってきた。

「遅かつたな」

「何か説明がやたら長かつたつす」

「説明？」

「使用方法の説明が……」

使用方法の説明？

「取説？」

「いや、頭に響く声みたいな……あれ、長くなかつたつすか？」

「全然」

聞くと皆使用方法の説明があつたらしい。

キイトの武器は説明など隠し方、出現方法だけしかなかつたのだが。  
もしや持ち主認定されてない?  
いやいや認定はされたようだつた。

でなければ隠し方も説明されなかつただろう。

「とりあえず出るか。リゲルに聞けばわかるだろ」

何のためにこの武器を回収したのか、それも聞かない。

「皆武器は手にしたようだな」

リゲルが満足げに微笑む。

「んー、リゲル、それでこの武器つて何なの？ そろそろ説明してくれてもいいんじやない？」

マコトの言葉にリゲルが頷く。

「そうだな。皆、武器を出してくれ」

それぞれの手に武器が現われる。

それを見て一気にファンタジーだな、と感づ。

「どの武器にもついている、透明な魔動石」

それぞれの武器を見てみると、確かに透明な石がついている。

キイトの短剣。

ミナミのロッズ。

ジローのメイス。

マコトの剣。

ミッキーの剣。

キイトは自分の手元にある、短剣を見た。

何だろう、戦闘用つぼくない。

確かに戦闘するつもりはないが、明らかに自分の武器だけずれいる感じがする。

他の誰はらしいのに。

「その魔動石は、戻還用だ」

「……え？」

ぽかんと、リゲルを見返すマコトとミナミ。

ミッキーも目を瞠り、リゲルを見た。

ジローは無反応でメイスを観察している。

「つまり、この武器で元の世界に帰れる、と？ そういう訳つすか

？」

「そうだ。その武器を使い、馴染んでくれば力を發揮し帰ることが出来る」

使う。

短剣はリー・チが短いし戦いにくいんだけどな。

「使うといつても、魔物を屠れば良い、といつてではない。日頃から触れていれば、それだけで良い」

魔物討伐とか言われると、ミナミが中々持ち主になれないから、それは助かるな。

「それぞれ個人にあつた武器になつていいだろ？。説明があつたからわかると思うが」

「あ。俺の武器の説明、なかつたんだけど」

「……ああ。キイトの短剣は、説明が要らないからな。その武器には特殊な効果がないんだ」

「俺のだけ？」

「それだけだな。その……必要なかつたといつか、ジローの武器もあるし……」

確かに戦闘用はジローの武器があるし、特に必要はないが。しかし使って馴染ませるつて、用途がないのにどうやって。まあすでに帰る気はあまりないから良いんだけどな。

兄貴達には悪いと思つてゐるが、キイトは愛に生きる氣満々である。連れて戻れるのならばそれもありかと思うが、戸籍云々日本で暮らすのは厳しいだろう。

それならばキイトがこちらに永住した方が良い。

「この先救世主には、特に必要となる武器だ」

忘れがちだが、ミッキーは戦場に行く予定なのだ。

確かに武器は必要。

「精靈の加護のあるその剣は、他のどんな剣よりも強力だろう。使い方は聞いたな？」

「聞いた、けど……」

眉を顰め唸る。

使い方が難しいのか。

「ならば良い」

「それよりもそろそろ聞かせてほしいうす。俺たちが召喚された理由

由

「それは国ヒトツランを救つて欲しいと」

「それもあるかもしれないっすけど、そろそろ本当のことが知りたいっす」

リゲルは諦めたように、落ち着かせるように、息を吐いた。

「アカの英雄が現われ、この国を創つた」

マコトとキイトは以前この場所で聞いた話だ。

「英雄がのこした、書がある」

書。

この話は聞いていない。

「その書には、この国があるべき姿、進むべき方向、いろんなことが書かれてある」

「それが……わたしたちをよんだ……」

「そうだ。それに救世主を召喚することで、この国が救われるだろう、と」

目を閉じ、続ける。

「英雄の知識のすべて、英雄の望む未来を、私は辿つているだけ」

英雄がいなくなつてからも七百年以上、その書を頼りに、国ヒトツランを創り。

「書は、誰にも見せていない。見せられない。英雄と、約束、したから」

「戦争の、ことも？」

「書かれてあつた。隣国アステには警戒を呼びかけたが、相手にされなかつた。予兆もなかつたからな、疑われて仕方がないが」

もし隣国アステが信じていれば、戦争はなくならないにしても、犠牲は少なかつたかもしれないのに。

「予言みたいなもん？ これからのことも書かれてある？」

「そうだな。私は予言の書だと思つてゐる。ただ、これからの「J」とは、あまり書かれていない」

戦争の細部が書かれていれば、策が練れていたかもしないのだが。「私に対する指示はまだ続いているが、それも動機が見えないものだ。だが英雄は絶対だ。悪いようになるまい」

何だその信用度。

また少し英雄に対し苛立ちが募る。

もういない人間に對して。

いつからこんなに狭量になつたんだ。

「どちらにせよ、そう細かいことまで書かれていない。結局は今生きている人間が、最善を尽くしていかなくてはならない」

「……みつちーは、戦場に行くの？」

「悪いが、行つてもらう。しかし、悪い結果にはならないはずだ」

マコトがその言葉にほつと息を吐く。

「Jの戦争が終われば、元の世界に帰れるはずだ。あと少し、協力して欲しい」

「まあ悪い結果にならないなら、私はかまわないかな。その書が絶対つてわけじやないなら、ちょっと簡単に考えすぎとは思うけど。だけど、帰るには協力しないと、つていつことに間違はないんだし」

それはそうだ。

たとえ武器を使い馴染んでも、帰り方はわからない。

「齎すようで悪いが……戦争が終わらないと、召還は難しい。武器だけでは不十分だからな」

「Jの国にも愛着わいちゃつてるし、もちろん協力するよ」

「乗りかかった船だしな」

「わたしも、出来ることなら……」

弱弱しいミナミの笑み。

意外な発言に、ついミナミに視線を移す。

それに気付いたミナミが慌てて顔を伏せた。

「で、肝心の五人召喚された理由は、なしつすか？」

「書に書かれているのは取るべき行動だけで、理由は書かれてない」

「五人に対して取るべき行動は書かれているが、それだけだ」

リゲルがちらりとキイトを見た。

「……個人の、感情に関するようなことは、書かれていない。その……誰かを好きになれだとか嫌いになれだとか、恋仲になる、だと……か……」

ほんのりと頬が赤いように見える。

それは、ポジティブに受け取つても良いということか？

紙の箱が出来上がった。

その箱のサイドにアカの花を描く。  
底にはシリアル番号を入れる。

キイトとイグレツツイオが一人掛かりで取り掛かり、数時間。  
主にアカの花に時間が掛かる。

やはり印刷技術が欲しいところだ。

さてこの箱をどうするのかというと、もちろんケーキを入れるのだ。  
日本のケーキ屋ならどこでも使っているような、紙の箱。  
折り畳まれた薄い箱を、ケーキを入れるときに組み立てる、あの箱  
だ。

「これはどうするんですか？ 紙の箱は高いから採算が合わないつ  
て言つてたのに」

「無料じゃなくて有料だからな」

「有料……、誰も買わないと思いますけど……」

もちろんそんなに高く売りつけたりはしない。

原価、ぎりぎり程度で良いのだ。

「初回有料、次回から箱を持って来てくればそれに入れる  
エコバッグならぬエコ箱だ。

浄化の魔術を使えば衛生的にも問題ない。

本当は木の箱でも良かつたのだが、紙の方が絵が描きやすいことが  
一点、紙の製作所の仕事を増やすことに一点。  
一応意味はあるのだ。

「俺が滋郎がいれば浄化も出来るしな」  
アカの花の描かれた紙の箱は、目立つ。

歩く宣伝。

店によって色々な看板はかけられているが、ロゴの入った袋や箱の類はない。

そこそこ注目されるのでは、という狙いなのだ。

知名度大事。

ぶっちゃけ知名度が上がれば味がそこそこでも売り上げは上がる。知名度を上げるには味も大事だが、販売方法の方が重要だと思う。目立つたもの勝ちだ。

注目度が上がってきているこのタイミングでエコ箱の導入。そして新商品の導入。

紙の箱が出来たことで紙コップもどきも製作してもらつた。こちらにはアイスやスムージーを入れようと考えている。季節は秋でちょっと外れてしまったが、まずは売り上げよりも認知されること。

あとはパイに入れようと思つていて。

あれから他店を回つてみたがパイはなかつた。

パイの売り上げはあるのに他店が扱わない理由。

やはりパイのレシピが出回つてないと考えるのが妥当だらう。

いずれ出回るだらうが今のうちに売りまくり、この店発祥と謳つのも良い。

今のところはパイを貰える店はここだけ、と売り出さう。

パイ生地を細めにカットし、捩じる。

それに砂糖をまぶし焼き上げたものが主流商品だ。

あとはゴマやシナモンショガーナ、味のバリエーションを揃え、セット商品も並べる。

他にもアップルパイやパンプキンパイをホールサイズで売つていこう。

もう一つ考えているパイ商品があるのだが、こちらはまだ試作段階である。

「はー……色々知つてますよねえ」

「まあ、……他国出身だし、この国にない情報を持つてゐるわけだ……」

…ちょっと反則っぽいけど」

あまり気持ちの良いものではないが、売り上げは必要だ。  
稼げなくてもカネル家で援助してくれるだろ？が、いつまでもその状態で良いわけじゃない。

将来的には、家族を養うこともあるわけだし。  
たぶん、きっと。

閉店した後、ビストロに商品を搬入する。  
今日のデザートプレートは薄く焼いたパイにクリームを挟み、フルーツで飾るというも  
の。  
要するにミルフィーユだ。

「こんにちはー」

「あら、こんにちは。今日の分ね、ありがとうー。  
おばさんがここにこと笑顔で迎えてくれる。

最近はターシャばかりだったので珍しい。

きょろりと店内を見渡すと、奥の席にターシャと小さじ男の子と、  
若い男がいた。

ターシャの膝の上で男の子が美味しそうにシチューを食べている。  
それを慈愛に満ちた表情でみつめるターシャ。  
若い男もにこにことその様子を眺めている。  
もしかして子供と元ダンナか？

さすがに声は掛けられないし、見なかつたことにして立ち去り。しかしせつかくの気遣いもターシャによつてぶち壊された。

「あ、キイトくん！　じつちじつちー！」

何故呼ぶ。

渋々奥の席に近寄る。

「こんにちは、商品の搬入にきました」

「うん、座つて座つて」

だから何故。

「この子、私の息子でタロよ」

「は？」

太郎？

ついもれた声は聞こえなかつたようだ。

「ほらタロ、挨拶しなさい」

「……んわ」

声が小さすぎて聞き取れなかつた。

先ほどまでは笑っていたのに、今は無表情だ。

緊張してゐるのか警戒してゐるのか。

「こんばんは」

「じめんねえ、人見知りするのよ」

なら何故呼んだ。

「タロ、このお兄ちゃんがね、ママにお菓子の作り方を教えてくれてるのよ」

なるほど。

それで呼ばれたわけか。

「あとこっち。タロの世話を役のコマイ」

「コマイ・フルシャです。よろしく」

「キイト・カネルです」

手を差し出されたので握手を交わす。

金色の髪を一つに束ねた優男だ。

「えーっと、じゃあ俺はこれで」

「待つて待つて、ね、デザートプレート、一皿作ってくれない？」

ターシャはあまり息子から離れたくないのだろう。

他国から来ているのだとすればわからぬでもない。

厨房の隅を借り、デザートプレートを仕上げる。

せつかくなのでチョコレートで男の子の好きそうな絵を描こう。

しかし乗り物もなくアニメもない世界で男の好きそうな絵つて何だ。

無難にドラゴンっぽいものを描いておこう。

本格的なものは描けないので、デフォルメしたドラゴンだ。

テーブルに運ぶとタロは目を輝かせ見上げてきた。

「 ありがとう、おにいちゃん！」

興奮してゐるか大きな声で、今度はきりんと耳に届いた。

警戒心も薄れたのか、キイトが座つてもこじこじしている。

美味しいそつにパイを口に運ぶ。

特別子供が好きとか嫌いとかいつ」とはないが、やはり笑つている方がかわいいと思つ。

普通仕様はコマイが食べるようだ。

「 タロはいつまでこじこじ？」

「 明日の夜には帰るわ」

「 じゃあまた明日の午前中によみと寄るわ」

子供といえばやはりあらだ。

わざわざ準備しなくては。

### 3-03 プロポーズ

夜に用意したお菓子を持って、ビストロを訪ねた。

店はまだ開店していないが、店の奥が住居となっている。

「おはよづ、ターシャ。」  
「これ、土産」

「え？ ありがとう。タロ、良かつたね」

「うん！ ありがとう、おにいちゃん！」

せつそくがごの中を漁り始める。

中にはパイやクッキー、パウンドケーキなどの焼き菓子が入っている。

その中で一番のメインが、

「わあ！ ぐるぐるだ！」

飴である。

やはり子供といえば棒つきキャンディ。

ぐるぐると巻いた大きな飴だ。

実際に子供が食べているところはあまり見たことがない、というか商品自体あまりない。

が、やはり子供といえば、というイメージがあるため作りたかったのだ。

自分が末っ子で親戚もなく、小さな子供が身近にいなかつたので変なイメージがあるのかもしない。

喜ぶタロの頭を撫で、コマイに挨拶した後、城に向かった。

本日店休日。

城で走竜6-1番・マサムネを借り、リゲルの帰省に同行する。山を登りながら、質問を投げかける。

「そういえば、精霊の武器の持ち主って何か意味あんの？」

「ああ……出し入れと特殊効果は持ち主でないと使えないんだ」

「俺のは特殊効果ないけどな」

「す、すまない」

「リゲルが謝ることじやないと思うけど」

「いや……私も精靈の武器の製作に携わってるんだ」

「リゲルが？」

「私の生家は鍛冶をしていたからな。それに……精靈の力の付「」が出来るのは私だけだ」

精靈の武器は精靈そのものが作ったわけではなく、精靈の血を浴びた人間が作ったものということか。

「リゲルは精靈扱い？」

「精靈、というより半精靈……下級の精靈というか……精靈の能力が一部「」えられている」

精靈の能力。

キイトは精靈について詳しく聞いていないのでよくわからないが、おそらく不老不死がその精靈の能力なのだろう。

「精靈の能力つて具体的に他に何があんの？」

「そうだな……血を浴びてから、魔力が一気に上がった。使える魔法も増えたし……當時魔術は発達してなかつたからわからないが」「へえ……リゲルと異世界人だと比べてどうなの？」

キイトたちも魔力が高く、個人差はあるが使える魔法も多い。

「純粹に魔力だけなら同等だ。適性は個人差があるからな。私はさすがに全種は使えないし、そういう意味ではジローに勝てない。剣の技術で言えば……そうだな、おそらくミナミ以外には勝てないだろうし……」

何だか“魔女”があまりすごく感じないのだが。

「普通の刃物では私に傷一つつけことができやしない」

だからこそその不老不死。

「さて、ついたな」

その言葉にマサムネはひとりで歩き出した。

木陰を陣取りゆっくりと伏せ、気持ち良さそうに田を細める。

「私達も休憩しよう」

昼食はキイトが作った。

デザートまで平らげて、お茶を飲み、寝室に引き摺り込んで一時間。久々だつたからちょっとがつついてしまつた。

リゲルを腕の中に閉じ込めてまどろみ中。

細い銀色の髪を手で梳いてみたり、柔らかい部分を摘んでみたり、頸にキスしてみたり。

リゲルは擦つたそうに身を捩るが、嫌がる風ではない。このまま夕方までいちゃいちゃしてみたい。

「リゲル」

でもこれは言つておかないと。

「俺、この世界に残りたい」

「な……」

「」の世界に残つて、リゲルとずっと一緒にいたい

「……キイト、ありがとう」

密着しているから表情は見えない。

「だが、キイトは元の世界に戻るべきだ」

「嫌だ」

「……キイトは普通の人間だ。ずっと一緒にいることは出来ないし、元の世界に家族だつているだらつ」

確かにリゲルとは寿命が違う。

そもそもリゲルは不老不死なんだから寿命はない。

元の世界に、家族に未練がないかといわれれば、それはあるに決まつていて。

だがしかし、このまま元の世界に戻つても、このうの世界に未練が残る。

どつちもどつちだ。

遺伝なのか何なのか、キイトの家系は恋愛に関して情熱的というか一直線というか。

母親は父親と駆け落ちで結婚してゐるし、兄も長男なのに婿養子だし、

キイトが異世界で結婚しても決しておかしくない気がする。  
「だから……元の世界に帰るまでで良いんだ。……そばに、いくぐれ」

きゅんとした。

何かこうたまらない。

「リゲル」

「あ……」

耳朵を食べる。

「俺は帰らない。寿命が違うなんて当たり前だ。同時に死ぬなんて滅多にないんだから」

両親は事故死なので同時だが、基本夫婦同時、なんて普通の人間だつてありえない。

でもだからこそ、限られた時間を一緒にすごしたいと思つ。

「リゲルが寂しいっていうのなら、俺の子いっぱい産んで。ダンナ俺がい

なくても、ハジセ家族がいる」

野球チーム作れるくらい、産めば良い。

抱きしめる腕に力を込める。

「それでも寂しいっていうのなら……俺が死ぬ前に、リゲルを殺してやるよ」

喉元を噛む。

もちろん力は入れてない。

「俺の貰った短剣は、そのためのものなんだろ」

戦闘に向かない、精霊の武器。

だけど切れ味はよく、精霊に傷をつけることが出来る短剣。

ひとりだけ、特殊効果のない理由。

戦闘には使わないから。

「俺はそのために喚ばれた？」

リゲルではなく、英雄に。



紙の製作所の隣の土地に、魔動力の小さな工場が出来上がった。ここから城下町全体、発展すれば中継地点へと魔動力を飛ばす。まずはエディの屋敷とケーキ屋の一箇所。ようやく一箇所の家電もどきの動力を改造し終えたので、本日稼動である。

動力が不足すると自動的に魔動石に切り替わる仕組みだ。

停電（？）対策もばっちり。

朝、ジローからその報告を受けたキイトは、差し入れを持って城へ向かつた。

「先輩っ！ これっ！」

満面の笑みで突き付けられたものは、一枚の紙だった。

そこには何故か猫耳と肉球のある女の子がカラーで描かれている。

……何て言えば良いかわからない。

「反応薄いっす！」

いや意味がわからないから。

「これ、転写の魔術なんすよ！？」

最初からそれを言えと。

よくよく見ると作業台にはまつたく同じものがもう一枚。

「へえ、綺麗だな。色もそのままだし」

印刷ではなく転写なので、解像度の問題もなく、綺麗なものだ。そのまま転写しているので、絵が反転したりということはない。

「ただ、すつごい時間掛かるんすよ。慣れれば早くなるかもしけないすけど」

時間が掛かるのは問題だ。

だが複雑なものならば時間が掛かってもやる価値がある。

しかしアカの花の絵程度で時間が掛かってしまうなら、紙箱には取り入れられないかもしない。

「まあその辺りは色々やってみるつす。それと、浄化の魔動具は出来上がりつすよ」

こっちも中々難易度が高そうと思っていたのだが、それでもなかつたのだろうか。

浄化の魔道具は衛生面の浄化を専門に開発してもらつた。紙箱の浄化をエディにやってもらうためだ。

「汚れの浄化程度で大きさも小さめなんで、そんな難しくはなかつたつす」

簡単に言つてのけるジロー。

同僚らしき女性から睨まれてますが。

「すごく視線を感じますが。

「なんすか。見ないで下さい、減るんで」

「減るわけないでしょ！－」

顔を真っ赤にして怒鳴る女性。

青味掛かつた黒髪を肩で切り揃え、片眼鏡モノクルを着用している。

「くつ……！ キイト・カネル！ 私はクオル・ロアよ！ 覚えておきなさい！－！」

何で俺、とキイトが眉を顰める。

それを察したのかクオルが続ける。

「部外者の癖に妙に良い案持つてくるんじゃないわよつ－」「僻みか」

「ぐつ！ 僕んで何が悪い！ 部外者と臨時の癖につ！ エディ、何とか言いなさいよつ！」

「え、こっちに振るんですか。遠慮します」

何度もここには来ているが、あまり人に会つたことはなく、クオルとはおそらく初対面だと思うのだが。

おそらくジローに巻き込まれたんだな、と他人事のように考える。

しかし激しい人だ。

「あ、そうだ。差し入れ」

布を掛けたかごを差し出す。

布を取れば卵黄で焼き色をつけた一口サイズのパイが大量に顔を出す。

「あら美味しそう」

バターの良い香りがふんわりと鼻腔をくすぐり、食欲をそそる。

「パイの実つすか!?」

「だろ、パイの実っぽくしてみた。つつか商品名まんまパイの実にしようと思つてるくらいだし」

中身はチョコレートではなく、アカの実のジャムであるが。アカの実を砂糖とはちみつでとろつとろに煮込み、パイの中に詰めた。

自画自賛だが良い出来だと思つ。

「つまいつす！ マコト先輩が喜びそつすね」

確かに。

パイの実でお茶にすることにして、作業台からテーブルに移る。

お茶の準備をしていくと、来客があつた。

「リゲル！ ちょうど良かつた、一緒にお茶にしましょ」

キイトではなく、クオルがリゲルを誘つた。

エディに書類を届けに来たようなのだが、クオルと親しいのだろうか。

「いいか？」

「もちろん」

パイの実がキイトの差し入れだとわかつたのだろう。

キイトに伺いをたて、テーブルについた。

先日、返事を出来ないでいるリゲルに、キイトは笑つた。

笑つて、嘘だつて、と抱きしめた。

その後もわざと明るく話を変え、「いやむやい」。

キイトの召喚にどういった意図があらうと、自分の思つがままに行動する。

リゲルが死にたいといつても、帰つて欲しいといつても、好かれて  
いる限りはリゲルの傍を離れる気はない。

元々生き物はいつなにがあるかわからない。

一年後、半年後、明日にだつて自分が死んでしまうかもしれないの  
なら、出来るだけ後悔しない道を選ぶ。

「このパイの実を名物扱いにしようかなつて思つてさ」「名物?」

「なんつうのかな、看板商品?」ここに来たらこれ…つていつぞ  
温泉饅頭や に行つてきましたと書かれた土産物のようないメー  
ジだ。

このケーキ屋に寄つたらこれ、というのはもちろん、城下町に來た  
らこれがお土産! というところまで持つて行きたい。  
やはりパッケージに地名をいれるべきか?

“城下町名物・パイの実”とか。

まずは店で売り上げを上げていこう。

「リゲルさんとクオルさんは仲が良いみたいですね」

隣に座り、パイの実やお茶についてあれこれと話している二人に、  
ジローが声を掛けた。

「そうだな。クオルがまだ幼い頃、私に向かつてババアと……」

「あああああつ! やめてよつそういうことこうのつ!」

「本当のことじやないか」

ババアと言われて仲が良くなるのか?

不思議そうにしていたことに気付いたのか、リゲルが笑つた。

「影では言われても、面と向かつて言われたのは初めてだつた。あ  
れだけ笑つたのは久しぶりだつたな」

ババアと言われ大笑いし、暴言を吐いたクオルの両親が必死で土下  
座。

何てシユールな光景。

「私は元々ロア家の……クオルの叔母と仲が良くてな。よく屋敷を訪ねていたんだ」

エディと一緒にいることが多いので、カネル家と仲が良いのかと思っていたが。

権力のありそうな立場である魔女が特定の公爵家と仲が良いなんて、確執が生まれたりしないのだろうか。

が、この国で貴族や国民の反乱のような事件は、一回もないのだという。

魔女は王族や貴族という権力者ではなく、精霊のよつな不可侵な存在だと思われているようだ。

七百年以上国を支え発展させてきたのに、あまり表舞台に立つことなく、裏方に回ることであまり敵を作っていないのかもしれない。

「最近は留守にしてるから会つてないのだがな」

「叔母さん自由人だから」

何でも世界中を飛び回つてているそうだ。

文字通り、飛び回つてている、だ。

珍しい野生の飛竜を飼いならした豪傑で、ウナカーサ大陸だけでなく、他の大陸や島々も見て回つている。

東隣国アステと海を挟んだ隣国メンティとの戦争にいち早く気付いたのもその叔母さんらしい。

もつともこの戦争の開始時期は、大体のところわかつていたので警戒していたおかげでもある。

「今はメンティの偵察に行つてるんじゃないかな。そろそろ決着がつきそうだし」

「戦争が終わるつてことか？」

「おそらくアステが降参するだろ」と。その後メンティがどう出るかはわからぬが、おそらく……」

リゲルの表情で、戦争になるだろとわかる。

「その辺り対策とか練つてるんすか？」

「東の国境沿いはすでに避難している。騎士が駐在しているから、

何かあればすぐ知らせが来る

「こっちから攻めたりしないんすか？」

「侵略の動機もはつきりしないから何ともな。単なる領地拡大なら

ば遠慮なく叩き潰すのだが

物騒なことをさらりと言つてのける。

「まあ、調査を進めるしかない。何か発展があればすぐに知らせる

その後話題は魔動具やケーキのことに移り変わり、日が暮れるまで

お茶の時間は続いた。

魔動力式の家電の使用開始。

紙箱の使用開始。

浄化機の使用開始。

パイの実の販売開始。

売り上げも増加し、色々忙しくなつて來たので、従業員も増やした。紙の製作所と魔動力工場の兼任に三人、ケーキ屋の販売に一人。販売の二人が仕事を覚えたら、イグレツツイオが完全に製造へ回る予定だ。

製造で従業員を入れるのは、パイのレシピの流出を防ぐためである。

今はまだ秘匿しておきたい。

「さてと……今日は冷菓にするか

「冷菓?」

「ムースとかババロアとかゼリーとか……あんまりこつちぢや見ないけどな」

ゼラチンの類は一応存在するが、あまり流行つてないようだ。そもそも容器に入れて販売するケーキが見られないので当然ともいえる。

気候が涼しくクリームやバターの重いものが好まれていてるせいもあるだろう。

「そうですね、大通りの店で一度見かけたくらいで

「容器がないと売り難いんだよな」

安価な透明な容器がないので、容器ごと販売するケーキは売り難い。

ガラスの牛乳瓶風容器に入ったプリンなんてかわいいと思うのだが、それだけてケーキと同じくらいかそれ以上の価格である。

こちらは再利用するにしても高すぎるし、戻ってきてから仕込むわけなので数も多くいるし遣りづらいのだ。

「つうわけで、今回はビストロ用な」

ビストロで出す分には、容器は関係ない。

毎日使うわけじゃないので後日返却してもらえば良いだけだ。

まずカップの底に繰り抜いたスポンジシート。

それにアカの実で風味をつけたシロップをうつ。

その上にバニラビーンズをたっぷり入れたムース、その上にアカの実のムース。

そのまた上にアカの実のゼリーを重ねる。

あとは少しクリームを絞り、アカの実などのフルーツ、ミントの葉を飾れば完成だ。

イグレツツイオに作り方を説明しながら30個ほど作成。

冷菓のレシピはないので、量や味などは調整しながら作らなければならぬ。

今日はちょっと多すぎたので次回はもう少し分量を減らそう。

「グレツツが一人で製造出来るようにしとかないと、最近討伐が多いんだよなあ」

「そうですね。不穏な空氣というか」

緊急はまだ一度しかないが、討伐が増えているのだ。

期間中一度も討伐しない臨時もいるというのに、あまりにも多い。疑問に思い訊ねたところ、どうやら魔物が活性化しているという。戦争が近いということもあり、何か不吉な予感がするというか。

「生地はかなり多めにストックしてるけどさ……」

キイトならば一人で回せる仕事量でも、やはりグレツツだとキツイ。

経験値が違うので当たり前のだが。

とにかくキイト不在でも店が回るよう、ストックを増やすなり商品展開の工夫をするなり試行錯誤。

イグレッシュイオにはまず仕上げを重点的に教えている。

「ま、とにかく、明日も討伐だしな。一応滋郎が来てくれる」と云はなつてゐるけど、出来るだけグレッシュががんばれよ」

「はい！」

ジローは一応朝から店に来る。

グレッシュが一人で仕上げと製造をしてみて、間に合わなかつたりわからなかつたりしたらジローに頼る。

なのでジローも製造ではなく、開発をするために色々道具を持ち込むことになつてゐる。

何度も討伐もこなし、顔見知りの騎士にも慣れて來た。

そのうちの一人は店の常連でもあるノルマンド・ディスカだ。

「最近魔物多いねー」

「多いな。原因てわかつてんの？」

「うーん、西つていうか南つていうか……流れてきてるみたいなんだよねー」

「リダインも通つてるけど、大元はそこじやないんだよね。リダインも最近魔物が多いつてぼやいてるし」

もつと先から流れてきてるつてことか。

「ま、その分ケーキ屋さんがおやつ持つてきてくれるしー」

「…………」

そこを期待されても。

いや持つて来てますけども。

毎回借りるので、当番の騎士は何も言わずマサムネを回していくようになり、現在マサムネの上である。

他の騎士たちは1から50までの走竜ランダムラに乗つてゐる。

戦闘用という話だが、キイトにはその違いがわからない。

「61番はねー、乗り手を選ぶからー

「乗り手を選ぶ……ああ、気性が激しいもんな  
そいいえば最初威嚇されたんだっけ、と思い出す。

「うん。乗り手っていうか……他の走竜ランドラともあんまり馴染んでない  
し、元々野生だから仕方ないんだけど」

「ふーん?」

「討伐に正直戦闘用は必要ないんだけど、軽い運動つていうか準備  
体操も兼ねてねー」

散歩代わりってことか?

「あ、見えてきたー」

魔物の群れだ。

四足歩行型の茶色の大きな獣。

でかい野犬といった感じである。

素早さ注意、それと数匹で集中攻撃で来ること、肉食なことで警戒  
されている魔物だ。

大人数での討伐はかえつて難しいことで、少数精鋭、キイトを含め  
十人もいない。

「さつて、行くよー！」

ノルマンドの掛け声で、走竜ランドラが一斉に走り出す。

が、マサムネは違つた。

「あー……うん」

スピードは一切上げず、変わらぬ歩調。

戦闘用に回されないわけだ。

いや訓練されれば命令を聞くのかもしれないが。

「マサムネ、行こうぜ」

キイトの声に反応し、走り出す。

ノルマンドじやだめなのか。

討伐隊の隊長ではないのだが、それなりの地位にいるらしいので指  
示を出すことは多い。

特に今回の討伐ではリーダー役を務めている。

キイトは他のメンバーより少し遅れ、討伐に参加した。

短剣を使いたかったが、さすがにマサムネの上からだと無理がある。

ジロー印の武器で野犬もどきを撃ち抜いていく。

銃を撃つ時の反動がほとんどないのでかなり使いやすい。

マサムネも向かってきた野犬もどきを噛み殺したり、爪で切り裂いたりと善戦している。

さすが竜種。

すべて討伐を追え、皮を剥ぎ取り、身はその場で燃やす。

皮は加工され、衣服などになるらしい。

肉は臭みが強くかたすぎるるので、食用には向かない。

「さーおやつだー！」

いや言づと思つたけど。

ノルマンドがリーダーって違和感があるわ。

秋の終わり、アステ東隣国が降伏し、戦争は終わった。

メンティはアステに移住を始めているらしい。

侵略のはつきりした動機はわからないままだが、移住を始めるということは領地拡大が目的だったのだろうか。

今のところエトランへ侵略していく気配はないが、油断は出来ない。メンティも戦争で負傷しているだろうし、その回復とエトランが油断した時期が一番危ないだろう。

戦争が終わる前の一月で、色々と変化があつた。

若干スバルタでイグレッツィオを鍛えてみた結果、一人でも仕上げが出来るようになった。

最近ますます討伐が増えているので、それだけで大助かりだ。

販売の従業員も大分慣れて来たようだし、浄化機も順調に稼働中。他の魔動力式も問題ないので、次は城を切り替えていくようだ。

最終的にはエトラン全体が魔動力式になる予定である。

新たな魔動具もどんどん開発されており、ジローが過労死するのでは、と心配になるほどだ。

印刷機は製作所に設置し、稼働中。

用途は主に書籍の印刷。

つまり、レシピ本である。

写真の技術は魔術では応用出来そうになかったので、イグレッツィオにイラストをつけてもらつた。

レシピの内容はもちろんケーキ。

パイ菓子を数点とゼラチンを使ったものがメインである。

自費出版だし世界は違うが、レシピ本を出すことは密かな夢だったのちよつと嬉しい。

パイ菓子の売り上げで店は軌道に乗ったし、そろそろレシピを流出しようとしたのだ。

ちなみにレシピ本はかなりの高値をつける予定である。  
断じてほつたくりではない。

次は時の魔術を覚えて冷蔵庫の進化系を作るため、キイトヒジローで研究中だ。

時の魔術は現在リゲルとほんの数名が少し使える程度。

魔術書には詳細に書かれてある時の魔術だが、真偽は怪しい。

一応リゲルは高度な時の魔術を見たことがあるらしいが、その一人以外、使える人間は現われていないという。

戦争終結の知らせから数日後、クオルの叔母であるクウガが帰つて来た。

クオルによく似た顔立ちの女性で、思ったより若い。  
二十歳過ぎの姪がいるのだから四十くらいかと思つていたのだが、三十前後に見える。

「はじめて、クウガ・ロアだよ。よろしくね」  
挨拶を交わし、テーブルにつく。

クウガが帰つて来たことで、なぜかリゲルから呼び出されたのだ。  
「クウガ、頼む」

リゲルの言葉に頷き、報告を始めた。

「メンティは崩壊の危機みたいだね！ はつはつは  
はつはつは、じゃないだろう。  
リゲルも苦笑いだ。  
「そういうことだ。呪にかかつた精霊が暴れているせいで、国から

逃げるしかなかつたんじやないかというのが国の見解だ

「何で？ メンティは呪の浄化が出来ないわけ？」

出来ない国、というか巫女が存在しない国はいると聞いていたが。

「普通の魔物なら出来ると思う。精靈はちょっと特殊で……かなり難しい」

「加えて精靈に攻撃は効かないからな。逃げるしかなかつたんだろう

うよ」

リゲルが溜息を吐く。

腕を組み、頷くクウガ。

「ちょっと……もしかしてそれでアステに逃げるために戦争になつたんすか？」

「おそらく。陸続きじゃすぐに追いつかれると思つたんじやないか

「え、えー……そんな理由で……つていうかエトランから巫女派遣とか出来ないんすか？」

「事情を話してくれれば出来たがな」

いまさら、である。

「助けを求めることが恥とでも思つていてるのか、エトランでも無理だと思つていいのか……メンティのお国柄はよくわからん」

船があまり発達していないので、エトランからメンティへ行くとなると陸続きになり、エトランからみると大陸で一番遠い国なのだ。そもそも隣国でさえ交流の少ないエトランである。

そんな遠地と交流があるはずもなく、そんな相手に頼み「とも出来ない」と思つたのかもしれない。

実際は、精靈の巫女の派遣に関してわりとビの国も遠慮なく、エトランに持ちかけてくるのだが。

エトランも交流がない国でも派遣は積極的に行つている。

「まあ、それは置いていて……浄化はしないと被害は広がっていく一方だからね、浄化には行こうつな

「は？」

「……ミナミに行つてもらう。もともと精靈の呪は難しい。ミナミ

に出来なければ他の誰にも出来ないだろう。

「春日は了承したのか？」

「ああ。優しい子だからな……」

確かに、断れる性格ではないが。

「それで、キイト、ジロー、君たちにも同行してもらいたい」「は？」

「メンティの侵略を防ぐために、騎士はすべて出向する。単純に人手不足なのでミナミの護衛を頼みたい」

「いや、まあいいけどさ……」

「詳しくは道中話すが……とりあえず私も行くから竜車には四人だ

な。クウガは飛竜だし」

「竜車でつてだいぶ掛かるんじゃないのか？」

「結構かかるな。しかし飛竜は訓練しないと乗れないから、どうしても竜車が最短なんだ」

それは残念だ。

「長期間あけることになるからな、手配を頼む」「店を休むか、イグレツツイオに任せると、だな。

「わかった」

「準備があるから出発は三日後だ。……それと、キイトにちょっと頼みがある

英雄の書を開く。

時の魔術がかかつており、劣化はしない。

760年、少しづつこの書を読みすすめて来た。

一気に読まずにいたのは、英雄との約束だつたからだ。

英雄の知識が詰められた書。

英雄の望む未来が書かれた書。

その年に起ころる大きな出来事や、その年に私がやるべきことが書かれており、私は書を読みそれを目標に行動する。

出来ない、と思っても諦めなかつた。

少しくらい寝なぐても、食べなぐても、疲労はあつても死は訪れない。

書に忠実な未来を紡ぐ。

私は英雄に少しでも近付けただろうか。

英雄の望んだ未来に辿りつけただろうか。

大陸歴760年、現在。

書は761年の救世主たちの帰還で終わる。

未来以外の知識も、読んでいないものはない。

書にある魔術の三分の一は難しく、特に時の魔術などはほんの少ししか使えないが。

ただ私の役目は時の魔術を覚えることではなく、書に残すことなので問題ない。

すでに大抵の部分を書にして一般に流出してある。

その文字を指で辿る。

帰ってしまう。

どれだけ別れを繰り返しても、やはり別れとは寂しいものだ。  
親しくなってしまえば、なおさら。

脳裏に浮かぶのは一人の姿。

今回の件が無事に終われば、私はまたひとりになる。  
だけど……少しくらい、夢を見てもいいだらうか。  
キイトが帰るまで良い、“恋人”の隣にいてみたい。

もうすぐ私の役目も終わる。

英雄の望む未来がなければ、私のとるべき行動もない。  
ただ最後にある英雄からの手紙、これだけは読みたい。  
頁の端を閉じられたその部分は、もう少し未来の私宛だ。

「リゲルー！！」

明るく大きな声にはつとして、顔を上げる。

書を片付け、外に出た。

「帰ったのか、クウガ」

「ふふ、見つけたよ、原因！」

「原因？」

「そう！ 精霊種のね、呪を見つけたよ」

ああ、また。

「そんな顔しないでよ。今度は大丈夫でしょ？」

「ああ……」

どんな顔をしていたかわからない。  
だが今はミナミがいる。

「作戦開始でしょ。集合かけるなら私も付いていく！」

「別にかまわないが、なぜ？」

「ふふふ、噂のキイトくん見たいじゃん！」

「……そうか」

別に好きで話したわけではない。

なぜかバレただけだ。

断じて惚気たわけではない。

本當だ。

「ロアに渡さずカネルに入れたいだなんてさ。ロアだつたらリゲルと身内になれたのになあ」

なぜ結婚前提で話す。

「キイトはどうみてもロアの当主と相性が悪い」

ロアの当主はクオルの歳の離れた兄。

クオルとクウガが異端なだけで、ロアの気質はキイトには合わないだろう。

「確かにね、ロアと相性がいい人なんて早々いないでしょ」

「とにかく……明日、だな。ヒティの屋敷を訪ねよう」

「了解！」

「今日は城で会議だな。行こう」

救世主たちを無事、元の世界にかえすために。

一田田

本日のデザートプレートはキャラメル風味のフォンダンショコラだ。フォークを刺すと温かいショコラートソースがとろりと溢れる。即席の保温器にそれを入れ、あとは明日の分のレインボーゼリーと一緒に搬入する。

リゲルの話から二日間、ジローとキイトでかなりのストックをためた。

それこそ早朝から深夜まで、クリスマス時期のケーキ屋のじとく。去年のクリスマス、ジローとキイトは瀕死だった。

文字通り忙殺。

イグレッシュイオと話し合ひ、キイトが不在の間、店を代りにするかが決定した。

とりあえずイグレッシュイオがひとりで頑張るといつので、店は開ける。

ただスシトクがなくなつた場合、臨時休業になるだらう。念のためビストロにも事情を話しておかなければならぬ。

「俺ちょっと旅行に行くことになつてさ」

「旅行？」

「そう、南の方なんだけど……リゲルと一緒に」

「えつ！ もしかして……」

ターシャがとたんににせにやとキイトをつづく。

「やるじゃん！ そうかーなるほどね、うんうん」

説明しなくとも脳内で補完してくれているようだ。放つておこう。

「出発は四日後なんだけど、準備も色々あるし、明後日からの『ザート・プレートはグレッツに頼んでるから』」

「え、大丈夫なの？」

「粗方やつてるし大丈夫。ちょっと手間取るかもしれないけど」

「うん、大丈夫、大丈夫。私もフォローするし！」

「ごめん、頼むわ」

世間話として旅行の予定を話し、あとはプレートの盛り付けを教える。

ターシャには四日後と言つたが、実際の出発は今日の夜だ。リゲルからそういう風に話すよつに言われ、その通りにしたが、理由はまだ聞いていない。

菓子作りに専念していたので、準備がまだだ。急いで用意して、仮眠をとつておこう。

昨日、というか三日間、あまり寝ていないのだ。

夜になり、荷物を持つて城へ向かう。

キイトの荷物もジローの荷物も小さな麻袋ひとつ分だ。

浄化の魔術があるので着替え一式の必要がなく、荷物は少なくて済む。

城へ着くと、すでにリゲルが竜車の前で待機していた。竜車をひく走竜は、マサムネともう一頭は百番だ。リゲルが選んだのだろうか。

「悪い、待たせた？」

「大丈夫だ。ミナミは竜車の中にはいる。一人とも中へ」

促され竜車に乗り込む。

中は暖かい。  
魔術だらうか。

「よ」

「こんばんは、春日さん」

「こんばんは」

ミナミは巫女服ではなく、簡素なワンピース姿である。

もちろんベールもない。

トーカ  
白蛇が腕に巻きついており、なんというか、異様な光景だ。

「出発するぞ」

最後にリゲルが御者台に乗り込み、竜車が動き出す。

走竜は夜目が利くので夜間でも問題なく走ることが出来る。

街道を走れば魔物は出ないらしいが、念のため交替で番をする」とになつた。

揺れ防止されている竜車は意外と寝やすく、疲れていたキイトとジローは早々に眠りに就いた。

もともと電車やバスでも眠れるタイプである。

二日目

目が覚めたのは明け方だった。

「おはよ、リゲル」

「おはよう。よく眠れたか?」

「うん。今どこ?」

「国境だな。もうすぐ越える」

リゲルが指を差した方向に、城門のよつなものが見える。

「この大陸では街道沿いを行くと必ず検問所がある」

ウナカーサ大陸でははつきりとした戸籍などもなく、身分証明書もなく、移住も簡単だ。

パスポートも存在しないため、街道ではなく山などを越えれば検問所を通らず入出国が出来る。

もちろん違反ではない。

だが安全性を考えて検問所を通る人が圧倒的に多いらしい。

検問所で停止し、一言一言話したあとすぐに出発した。

特に手続きや荷物のチェックなどはないらしい。

検問とは名ばかりだ。

何か特別に事件でも起きない限り、実際に荷物のチェックなどはないらしい。

特に大陸の西側は平和なのだ。

「こ）のまま街道沿いなら、リゲルも寝たら？ 俺交代するし」

「そうだな……次の町で食事を摑つてからお願ひしても良いか？」

リラインで最初に通り掛かつた町で食事をとることになった。

ジローとミナミを起こし、町の食堂に入る。

リラインの一般的な朝食を四つ頼んだ。

隣の国だからか、内容はあまり変わらない。

失敗した。

久々の薄塙「ーンフレーク。  
どうにか流し込む。

「そういえば、クウガさんはどうしてるっすか？」

「クウガは数日遅れで出る。飛竜の方が速いからな。何もない限り合流しないから気にしなくて良いぞ」

「へー。いいっすねー、飛竜かあ」

「そのうち乗せてもらえば良い。少しくらいなら訓練しなくても乗れる。……命の保証は出来ないが

「……遠慮するっす」

口直しにフルーツジュースを飲み干す。

「さて……今後のスケジュールを説明しておこう」

要約すると走竜（ランドラン）の体力が尽きる頃に休憩を挟み、昼夜関係なく突っ走る、だ。

途中村や町に立ち寄り食料を補充しながら、街道沿いを走る。

呪の発生地点付近でクウガと合流。

上空から誘導してもらい、呪の浄化、と。

朝食を終え、日持ちのするパンや干し肉を買つ。

あとは今日の昼食と夕食にサンドイッチとパンケーキ。

水は魔法で出せるので良しとして、茶葉やフルーツジュースも買つた。

「キイト、走竜の疲労が見えたなら止めてくれ。それまでは街道沿いを」

「わかつた」

キイトが御者台に座ると、走竜ランドラが走り出す。

特に手綱を持つ必要もない。

リゲルは四時間程で目を覚まし、御者台に移動して来た。

「もうすぐリダインを抜けるな」

「もう?」

「ああ。リダインはあまり広くないんだ」

「へえ」

せっかく隣に座つてるので、二人の間にあつた隙間を埋めてみる。リゲルがそれに気付き、ちらりとキイトの顔を見た。

キイトは素早くリゲルにキスし、素知らぬ顔で前を向く。

「……キイト」

「何?」

「……何でもない」

「あ、そういうえば。何で四日後出発なわけ?」

リゲルの指示でターシャに嘘の日程を教えた。

その理由は聞いていない。

「……ああ……少し前にターシャの息子が来てただろ? その同行者なんだが」

言われて、金髪の男を思い出す。

名前は忘れた。

「メンティの、宫廷魔術師だ」

メンティといえば、戦争相手ではなかつただろ? か。

「ターシャはおそらく、メンティから戻つて来ている

「スペイ的な?」

「いや……そこまで期待はされてないだろ? ターシャ自身は何の訓練もしていない」

「だけど四日後つてのがメンティに伝わってる?」

「メンティが動きそうな気配はあつたんだ。四日後から魔女不在となればその隙を狙う可能性が高い」

「リゲルがいない方が都合が良い?」

「まあ、いるよりない方が勝率が高いだろうな。いなくても負けるつもりはないが」

単純な軍事力ではメンティの方が上だ。

しかし魔術の腕や人数でいえばエトランの方が上である。

英雄の言葉にどこまで信憑性があるかはわからないが、一応救世主ミッチもいる。

「四日後に出発といえば、攻めてくるのはおおらく七日前後。それまでに力タをつける」

精霊の呪の浄化。

それさえ無事に終われば、戦争も終わる可能性が高い。

それがエトランの考え方のようだ。

二田田

眠っていたリゲルが田を覚まし御者台に出たことだ、籠車にはジローとミナミが残された。

ジローは黙々とメモに何か書き込んでおり、ミナミはぼんやりと外を眺めた。

窓の外を流れる景色はとてものどかだ。

トーカは膝の上で丸くなっている。

時折しゅうしゅうと声が漏れるのだが、これは寝息なのだろうか。

ジローとミナミの間に会話はなく、居心地は悪い。

科は違うが店でも見たことはあるし、名前と顔くらいは知っているのだが。

「あ……えっと、もうすぐ、帰れるね」

とにかくミナミは沈黙を破りたくて、思いついた言葉を発した。

「そっすねー。良かつたっすね」

ジローのその言葉は、何となく他人事のように聞こえる。

「……富尾くんは、うれしくないの?」

「……二つちの世界の方がおもしろいっす」

きつぱりと言い切ったジローに、ミナミは不思議に思つ。

確かに魔法のある世界なんて、ジローのよつて漫画やゲームが好きな人から見ればおもしろいのかもしれない。

だがそれでも、家族や友達、何だかんだで元の世界への未練はあると思う。

望郷の念、ホームシック、言葉は何でも良い。

帰りたいとは思っていないのだろうか。

「春田さんこそ、いいんすか？　帰る前に告りなくて」

「え？」

ミナミは言われた言葉を一瞬理解出来なかつた。

「あ……」

ジローが知つてゐることに気付き、俯いた。

「先輩は帰らないだらうから、帰る前に言わないとそれつきりつすよ」

「それは……」

わかつてゐる。

キイトはリゲルがいる以上、この世界から帰る気はないだらう。ミナミが告白したところで、キイトがミナミを好きになることはないし、元の世界に帰ることもない。

何も、変わらない。

「言わなきや 視界にも入れない」

「え？」

ミナミは心臓が軋んだ氣がした。

「先輩、興味ないものは視界にも入れないつすからね」確かにそれはミナミも感じていた。

まつすぐだからこそ、要らないものは田に入らない。必要ないものには見向きもしない。

「今の春田さんは先輩の視界にすら入つてない」

それは本当のことだと思う。

だけどそれをジローに言われるのは、違ひ。

言われたくない。

だけどその感情をジローにぶつけたことは出来ず、ミナミはただ押し黙つた。

間もなくリダンの検問所に到着した。

検問所の出口は一つあり、大陸外海沿いの国と大陸内海沿いの国の分岐点となる。

竜車は内海沿い、フロウに進む。

フロウは内海沿いに細長い国である。

面積にすると広くないが、長さで言えば大陸一だ。

竜車を走らせながら昼食を摂る。

走竜はまとめ食いが出来るようで、まだ食べなくても大丈夫らしい。空腹や疲労を感じると訴えてくるので、その時に休憩を取る予定だ。

昼食後は昼寝したり景色を見たり話をしたり。

暇つぶしの道具などはなく、正直なところ暇である。

ジローだけはひたすら何か書き続けているのだが。

「何書いてんの」

「魔動具のアイデアとかつす」

メモには小さな字がびつしりと並び、ヒューリスティラストが挿入されている。

「次は何?」

「そうつすねえ、ゲーム欲しいつす」

「ゲームつてお前、難しくないか?」

ジローがいうゲームはもちろんテレビゲームの類であり、ボードゲームではない。

テレビもないし、パソコンもない。

部品ひとつ存在しないような世界だ。どれだけ時間を掛ける気なのか。

「何か良い魔術があんの?」

転写の魔術はあるが、動画ではない。

「まったくないつす。まあいずれ、なのでまずは映像、つすかね」

「やるのは自由だけど時間足りないだろ。その前に小説とか漫画にしようぜ」

「まあそんなんすけどね。漫画は広めたいつすよね

そもそも小説の挿絵すらないので漫画を広めよう、ところの途中々難易度が高い気がする。

逆に新鮮で受ける、といつ可能性もあるが。

「最初は四コマか？ 読みやすさ重視で」

「そうっすねー。つてそれもいいっすけど漫画は魔術使わないつすよ……何か欲しいものないっすか？ あ、パイローラーとかトリティ「とかブラストチラーとか」

「ああいいなあ。機械あると大分楽になる」

ああでもない、こうでもないと魔術の組み合わせを考える。

話し合っているうちに時間は過ぎ、いつの間にか辺りは暗い。

走竜たちの休憩のため、街道沿いの平地に竜車を止める。

リゲルが用意していたアカの実を与え、今日はここで野営することになった。

リゲルとミナミが竜車の中、男二人は外。

お決まりの焚き火を準備、火の番と魔物の見張りでキイトとジローは不眠である。

もともと野営の跡があり、焚火の準備は簡単だった。

薪なんかも残していく習慣があるようで、それが“普通”と聞くと、平和だなと思う。

ウナカーサ大陸の西側は特に平和なのだそうだ。

三日目

これといって何もなく、夜が明けた。

何もなさ過ぎて暇すぎる。

どうにかしてほしい。

浄化の魔術があるので衛生的に問題はないが、気分的に違つだらう、と村に立ち寄る。

有名な温泉地らしく、温泉に入ることになつたのだ。

温泉バンザイ。

竜車に長時間乗つているので体がバキバキする。

温泉から出たら次は食事だ。

村唯一の食堂で名物らしい粥を注文。

薄い小豆色の粥だ。

どう見ても小豆入り。

赤飯の粥バージョンだな、と匙で掬い口に運ぶ。

塩味が効いており、旨い。

寒い季節、やはり温かい料理が食べたくなる。  
しかも米。

ポイント高い。

鍋ものが食べたい。

「あ。魔動具の前に調理器具だ」

フライパンや中華鍋、土鍋。

ケーキの型もいろいろ欲しいものがある。

エトランに流通していないだけなのか、存在すらしないのかはわからないが。

「あ、炊飯器。炊飯器が欲しい

「いいっすね！」

麵もパンも好きだが、やはり一番食べ慣れているのは米だ。

鍋でも炊けるがやはり面倒である。

「じゃあ次は炊飯器にしましそう！ 完全私物のみになりそつす  
けど」

確かに、販売しても全然売れないだろう。

そもそもエトランには米を炊いて食べる習慣がない。  
スープやサラダの具として少量使われる程度である。  
この国であれば売れるかもしれないが。

小豆や大豆の豆類と海藻、米などを買い、村を出る。  
また長時間竜車の旅か。  
考えるだけで腰が痛い。

走竜たちの疲れも取れたらしく、軽快に街道を走る。  
 キイトは昨晩から眠つていないので、竜車の中で寝ることにした。  
 揺れもないのに、狭くて横になれないこと以外は快適に眠れる。  
 目が覚める頃には国境辺りだろう。

## 四日目

深夜に目が覚めた。

ジローとミナミも眠つてはいるようだつたので、御者台に移動する。

「リゲル」

「キイト、起きたのか」

リゲルの髪を梳き、キスする。

リゲルもそれに応える。

「今どこ?」

「そうだな……フロウのイルタ辺りだが……明け方には国境に着く

リゲルの腰を抱き、密着する。

御者台は寒いが、リゲルの体温はあたたかい。

「明け方まで寝ておく?」

「ん……そうだな……このまま……」

キイトに凭れかかったまま、リゲルは瞼を閉じる。

すぐに寝息が聞こえ始めた。

リゲルを抱いたまま、景色を眺める。

この世界は縁が多い。

フロウは山が多く、海沿いで、夏に来ると楽しそうだ。

夏。

次の夏、リゲルとここに来れたら良い。

検問所を通り、ステープに入国した。

ステープは大陸の最南端に位置する小さな国だ。

この国を抜けば大陸の東側に入る。

「ステープを越えたら街道から外れる。魔物も出るから注意してくれ」

いよいよか。

そこからは三人の睡眠を確実に交代制にする。

ミナミは戦闘力にならないので除外し、一人が寝ている時、常に二人は起きておく。

「ステープで出来るだけ食糧を買い込んでおこう」  
氣を抜けるのはこの国まで。

次からは氣を抜けない。

手強い魔物は早々いないが、少しの油断が命取りになることもある。少し走ったところに街があり、そこに寄ることになった。テントのような布製の建物の多い、雰囲気のある街だ。なぜか街の中に浅いプールのようなものがあり、そこで遊んでいる子供が大勢いる。

冬だからか中に入つてはないが、水を飛ばす玩具で遊んでいるようだ。

「元気つすねえ。水鉄砲には見えないっすけど……」  
気になるのかちらちらと子供たちを見てる。

「リゲルさん、気になるんでちょっと行つてきたいっす。ちょっと自由行動しましょう」

返事を待たず、ジローはプールに走つて行つた。

人のことを自由人だというわりに、ジローも大概である。

「……買い物を済ませるか」

食料品を取り扱う店に行き、日持ちのするものを買つ。

エトランは国産の保存食が少なかつたが、この国はそうでもないよ

うだ。

カンパンのようなもの、干し肉、燻製、ドライフルーツなどを購入。  
走竜ランドラたちの餌にするアカの実が売つてなかつたので、代わりになる  
果物を探す。

魔物の餌は魔力を含む植物だ。

アカの実ほど含有量があるものはなかつたが、大丈夫だろう。  
質が足りなければ量でカバー。

「ジローが戻つたら食事にしよう。それまで雑貨でも見るか？」  
果物屋の横に雑貨屋があるようだ。

布の上に様々な商品が並べられている。

「魔動石……？」

「これは魔光石だ。魔動石の一種ではあるが」

「兄ちゃんたち、観光？ 天然魔光石はステープの特産だよ！ 土  
産にどうだい？」

黒い石に黄色の筋が入つてゐるという不思議な模様。  
それを装飾品や雑貨に加工されてゐるのだが、何というか、趣味が  
合わない。

装飾品なのに綺麗ともかつこいいとも思えないとはどうこいつだ。  
デザインの問題ではなく、石の色の問題だ。

日本では見たことのないものだから先入観が邪魔するのか。

「魔光石は暗い所で光るんだ」

「へえ」

「普通の魔動石とは違ひ、人工ものがない。希少だから高値だ」

「……」

なるほど、わりと高い。

宝石だと思えばこんなものなのか？

今製造方法が解明されたら稼げるかな。

ケーキ屋の仕事だけでも生活は出来るだろ？が、将来のことを考え  
ると収入は多い方が良い。

「これください」

一番安い、加工されてない魔光石を購入した。  
せつかくなので研究してみよう。

調理器具や服などを見ていると、よつやくジローが戻ってきた。

「おせえよ、腹減った」

「サー、セン！」

朝にしては遅く、昼にしては早い食事。

蒸された米が主食でおかずが数品。

メインは魚介と野菜を蒸したもので、これをタレにつけて食べる。  
タレが旨い。

あとは串に刺さった獣肉や果物の和えものだ。

「あー、米は良いな」

やはり食べ慣れているものが一番おいしく感じる。

食事を終え、少し買い物をした後、出発した。

リゲルは次の検問所まで竜車の中で寝るといつので、キイトとジローは御者台で時の魔術を練習することにした。

時の魔術は物質の時間を止めたり、早めたり、緩やかにしたり、戻したりである。

竜車の上で出来てわかりやすい練習方法といつことで、咲いている花をつぼみに戻す、といつ練習することにした。

ちなみにキイトの最終目標は食品の長期保存である。

「時の魔術が完璧になつたらかなり便利つすね」

「確かに。悪用も増えそうだよな」

悪用されないよう対策を考えてから一般流通させないとまずいな。  
特に生身の人間には使用出来ないようにしないと。

「あ、先輩の花、ちょっと元気になつてしません?」

長時間水に浸してなく、萎れかけていた花が、ほんの少し復活しているような気がする。

「ちょっと成功してるのがもな」

さらに魔術を上掛けする。

一時間程かけ続け、花はつぼみになつた。

「出来た、けど、これ、マジ疲れる……！」

頭がクラクラする。

「大丈夫っすか？ 今日はこんぐらこじとります？」「そうだなあ……」

出来始めにやめるより、やり続けた方がコシは摑めそうだが。

「もうちょい、」

汗が滲む。

冬のにな。

今までにないくらいの集中で、花は種にまで戻つた。

「すげえっす。俺のまだつぼみっすよ……」

所要時間と疲労具合がこれだけだと、常用に時の魔術を使うのは難しいな。

魔動具を作るときくらいは良いかもしれないが。

慣れれば上達するかもしれないし、練習を重ねていこう。

## 四日目

日が暮れて腹も減ってきたので夕食にした。

魔法で水を出し、それを魔術で加熱し、簡単なわかめスープを作る。それに竹の皮のようなもので包まれた米。

街で購入したものだが、おこわのようで美味しい。

「そういえば今日で四日目か」

「あ、今日出発したことになってるんすよね」

ターシャに伝えた出発日は今日。

リゲルの見解ではあと三日前後で戦争が始まる。

翌日から戦闘する可能性が高くなるというところで、最後に宿に泊まることになった。

検問所手前の小さな村。

深夜だというのに迎え入れてくれて、優しいひとたちだ。

この世界に来て、悪人らしい悪人など見たことがない。

ツインを一部屋借り、もちろん男女で別れる。

温泉はなかつたが、風呂は存在したのでじっくりと入浴した。

風呂から上がり、ベッドの上で大の字に寝転ぶ。

この先は決着がつくまで宿に泊まることはない。

そう思うと少々億劫だ。

「いよいよ<sup>メンタル</sup>すねー。春日さん、大丈夫ですかね」

「何か精神弱そうだもんなあ」

討伐の時もあれほど気分が悪そだつたのだ。

今回は討伐ではなく浄化とはいえ、魔物に対峙することは変わりな

い。

「精靈以外寄つて来なければ良いんすけどね」  
他の魔物に攻撃されれば、応戦することになる。

そうなればもちろん殺すことになるだつて、それを見てミナミの  
気分が悪くなるのは想像に容易い。

「めんどくせえ」

「先輩ひどいっす」

想像し、漏れた本音にジローが突つ込む。

「つつわれてもなあ」

「もうちょっと春日わんに優しくしてやつてほしにっす……女の子  
なんで」

そんなこと言われてても。

「先輩つて本当興味のあるなしがはつきりしてるつていうか  
好きか嫌いか、どうでもいいか。

キイトにとつて大半はどうでもいいに分類される。  
どうでもいい人間は、きつとすぐに忘れてしまう。

現に小中学校のクラスメイトなんて、半分も覚えていない。  
元の世界に帰つたらそのうち忘れるのだつた。  
さすがにジローとマコトのことは忘れないと思つが。

## 五田田

宿で朝食を済ませ、買い物をする。

最後の補給になる可能性があるので、かなりの量を買い込んだ。  
そのままステープを抜け、大陸の西側に入る。

検問所を抜け、途中までは街道を走り、途中から脇道に入るらしい。  
脇道に入ると、少しずつ魔物を見かけるようになった。

好戦的な魔物は少ないようで、戦闘は今のところない。

好戦的でも走竜ランドラよりも弱い魔物は、さすがに襲つてこないようだ。  
草食とはいえ走竜ランドラも中々強い。

竜車の中で出来る簡単な調理で食事をすませつつ、ひたすら走る。魔物を警戒しながら走っているので、街道沿いを走っていた時に比べれば暇という感じではない。

雑談くらいはするものの、時の魔術の練習はお預け。

疲労が募り肝心な時に闘えないなんて事態は遠慮したい。

ミナミは緊張しているのか、いつも以上に口数が少なく、食欲も減退しているようだ。

「春日、食える時に食つとけよ。腹が減つては戦が出来ぬっていうだろ」「うう

呪の浄化をするのはミナミである。

この旅のメインはミナミなのだ。

「先輩その言葉好きっすね」

キイトが好きなわけではなく、姉の志麻がよく言つて移ったのだ。

「そりいえば貴志さんもよく言つてましたけど」

「あー、元々姉貴がな」

姉は寝坊が多いが、朝食を抜かない。

遅刻するから食うな、早く行けといつと、決まってこのセリフを返されていた。

懐かしい。

会いたい、帰りたいといった気持ちは膨らむが、それでもリゲルか

離れる気はない。

走竜ランドランは夜目が利くので止まることなく突き進む。

向かってくる魔物だけ竜車から魔法で討ち、スピードを落とさぬまま順調に進んだ。

竜車は現在、メンティの隣の国を走っている。

元々街道を逸れたのはメンティの戦争の関係で検問所が厳しいかも  
しない、という理由だ。

平和ボケしている西側と違い、メンティ付近はさすがに警戒態勢だ  
ううと。

ちらちらと雪が降っている。

竜車の中は暖かいので外の気温はわからない。

「戦争つて及川も行くんだよな？」

「ああ。マコトもな

「マコモ？ 何で？」

確かに騎士の訓練には参加しているが、救世主扱いではない。

「力を貸してほしいと頼んだんだ。エディも付いているし、大丈夫  
だ

「え、エディさんつて強いんですか？」

「ミナミも中々言つた。エディは防御の魔術が得意だからな。必ず  
護り切る」

一応、腕の良い魔術師である。

「マコト先輩と及川先輩が無事なら良いんですけど……」

「心配は無用だ。彼らは必ずやつてくれる」

「すげえ自信満々なんだけど……何かあんの？」

「何もなくてこの自信だと怖すぎるんだが。

「ああ、勿論。一人が負傷することはない」

「人が、というところが限定的で引っ掛かる。

「おつと。魔物が近づいてくるな」

雑談を中断し、二人は窓から魔法を放ち始めた。

## 七日目

「クウガが到着したようだ」

竜車を止め、リゲルが外に出る。

辺りに魔物の気配はない。

上空の飛竜がゆっくりと旋回しながら下降してくる。

「今朝、戦争が始まったよ」

「……そうか。詳細は」

「向こうの要求は予想通り、国を明け渡せ、だ」

クウガはゴーグルを外しながら、相手の戦力を細かく報告する。西の陸ルートではなく、東の上空を通つて来ているので、色々と丸見えだった。

「呪はこのままいけ方にはぶち当たるわね。誘導するわ」

クウガの誘導で竜車が走る。

もちろん検問所は通らず、メンティに入国。

町の近くを通つたが、明かりひとつなく、人の気配はない。

「やはり民は避難しているようだな。土地が足りないわけだ……」

アステだけでは、手狭過ぎる。

狭いから、もう一つ国が欲しい。

どうしてそこで、略奪に走るのか。

平和的な解決は出来なかつたのか。

クウガに誘導され、走ること一時間。

「……ツ……」

ミナミの顔色がだんだんと悪くなってきた。

次いでキイトとジローもなんとも言えない感覚に襲われる。

「何だ……？」

「呪だ」

「これが……？」

リゲルが緊張した面持ちで頷く。

竜車から大きな黒い塊が見えた。

「つていうか！ 精靈つて、アレ！？」

ジローが叫ぶ。

「せつかく、かわいい、のに……」「

ミナミの趣味が理解出来ない。

キイトは黒い大きな蜥蜴を見てそう感想を抱いた。

「精靈つて爬虫類限定！？ 俺の夢を返せええ！」

「いや人型だつたり哺乳類型だつたりするが」

「じゃあなんでトカゲ！ 人型、人型をよこせ！」

いやジローの趣味もわからないが。

精靈は自身を囲う透明な枠と共に北上中。

それを維持している魔術師が数名。

「精靈に通常の攻撃は効かないからな。ああやつて被害を少なくしているのだろう」

しかしそれでは根本的な解決にならない。

魔術師の魔力が切れれば、どうしようもなくなる。

「全員の移動が終われば魔術師たちは精靈を放つて逃げるのだろう。それしかないからな」

まだメンティに残っている民もいる。

大半が国の西ように逃げているが、こいつやって囲つていないと追いつかれたときに危ないと考えているのだろう。

「ミナミ、用意はいいか」

「……はい」

ミナミはロッドを握り締め、力強く頷いた。

浄化可能範囲まで到着した。

「ミナミ、浄化を開始してくれ。攻撃は私が防ぐ」

「はい……『我が名は』」

気分の悪さなど、気にしていられない。

ミナミは膝をつき、目を瞑り、詠唱を始める。

「キイト、精霊の短剣を貸してくれ」

「俺が防ぐ」

「血を浴びたらどうする。私が適任だ。それからじょっと、あちりの魔術師と交渉してくる」

「交渉?」

「ああ、結界の範囲を変えてもう」

リゲルはキイトから半ば強引に短剣を受け取り、魔術師のもとへ向かつた。

透明な枠を作つている魔術師数名は、ミナミの防御を固めていた。そうすれば「一重にミナミを守る」ことができる。キイトとジローはリゲルの交渉を、離れた場所から観察する。

「あれ……子供つか?」

その子供に気付いたのはジローだった。

魔術師から離れた場所に、見たことのない動物が繋がれた馬車がある。

その中に子供が乗つてているようだ。

「タロ……?」

「知り合いつすか?」

「ああ……ターシャの息子だ。あ、駒井」

「太郎? 駒井?」

「マイと田が合つた瞬間、馬車は勢いよく出発した。

「は? 何で?」

「交渉は成立したぞ。……どうした?」

「あの馬車、タロが乗つてた」

リゲルは眉を顰め、急いで竜車から走竜を外し始めた。

「気になるな。キイト、ジロー、馬車を追つてくれ」

「わかった」

二頭とも連れていく訳にはいかない、一人はマサムネに跨り竜車を追つた。

辿り着いた先は富殿だった。

無人のようで、声も気配もない。

ただ先ほどの馬車がぽつんとあるだけだ。

「とりあえず中に入るか」

一応辺りを警戒しつつ、富殿に入る。

入った瞬間に体が重くなつたよつたな気がした。

「今のは何だと思う?」

「結界つすかね……」

虱潰しに各部屋を見て回り、タロを探す。

そして一階のやたら豪華な角部屋でタロを見つけた。

コマイではない、魔術師風の男が一緒だ。

「お兄ちゃん!」

勢いよく飛びつかれたが、難なく受け止め持ち上げる。

「タロ、お前どうしてここにいるんだ?」

「えつと、この中は安全なんだつて!」

「…………」、HTランの使者

魔術師風の男が立ち上がり、優雅に礼をする。ナルシー臭がふんふんするのだが。

「使者つてわけじゃないんすけど…………とりあえず、タロくんはママのところに連れてつて良いっすか?」

追つては来たものの、何しに来たというわけではない。逃げられたから追う。

人間の本能です。

「どうやらあの黒いモノを討伐しに来たようですが……アレに攻撃

は効きません」

精靈に普通の攻撃は効かない。

それはリゲルから聞いていてすでに知っている情報だ。

「だから浄化するんだろ」

「浄化は試みましたが効果はありませんでした。無駄です」  
腕の問題なんじや。

それを言うとさすがに失礼か？

救世主云々の話は一応国の上層部のみにしか伝わっていないことなので、ここでそれを言って良いのか否かわからない。

異世界から来た巫女だから優秀なんですよ、と言えないわけだ。

「エトランーの優秀な精靈の巫女だからどうにかなるつす

あ、言った。

間接的だから良いのか？

「我が国の魔術師が無能だと言つのか！」

あ、駄目だつた。

魔力の塊が勢い良く飛んでくる。

キイトが避けると後ろの壁に穴が空いた。

「とりあえず先輩、先に行つてください。タロくん邪魔なんで」  
さらつと言いやがつた。  
だがしかし事実である。

「おー、頼むな」

「はいっす」

タロを小脇に抱えたまま廊下に飛び出した。

喧嘩は基本、先手必勝である。

「 / : ; 」

正しく魔記印を唱えたはずが、何の現象も起こらなかつた。

「 / : ; 」

やはり結果は同じ。

「くつくつく……ヒトランの魔術師も大したことはありませんね。この宮殿では魔力封じの魔術が掛けられているのですよ…」

高らかにそう宣言する魔術師。

「もちろん私は別ですがねえつ！ / : ; 」

ジローが唱えたものと同じ魔記印。

風の刃が勢いよく飛んでくる。

ジローはそれを躊躇し、思案した。

考えたところでどうしようもない。

魔法が駄目なら肉弾戦だろ？

「 来たれ 」

魔術師が何かを喚んだ。

現れたのは二メートルほどの二足歩行の魔物。

青い肌に腰蓑と棍棒の装備。

ごつごつとしたマッチョ風の体つき。

「俺なんか変なものに当たりすぎだと思つんすよね……どうせならピクシーとかピクシーとかピクシーとか。

ぶつぶつ咳きながらメイスを構える。

メイスでよかつた。

武器がロッドだつたらつんでいただろ？

「……あ、まずいっす。早く処理して先輩に迫りつかないと」

リゲルに短剣を貸したままのキイトの武器は銃剣のみ。

銃剣は魔力を使用する武器だ。

キイトは宮殿内で魔法が使えないことを知らないはずだ。

他に敵がいなければ良いが、少なくとも魔術師はもう一人いる。

向かつて来た棍棒をメイスで受け流す。

「ぐつ」

見た目通りすごい力だ。

純粹な力比べなど勝てるはずもない。

加えて魔法も使えない。

「ちつ」

魔力封じが効かないのはなぜだ？

特殊な装備品？ それとも予防系の魔術？

どちらにせよ今のジローにはわかるはずもない。

幸い速さではジローが勝っている。

メイスで思いつきり殴れば当たる。

ただダメージがほほないだけだ。

「持久力とか勝てる気がしない……！」

筋力も体力も魔物に勝てるわけがない。

「くくく……留めです！ / : ; !」

「うわー何かウザい！」

「 ; ; 」

辛うじて避けながら、距離を詰めていく。

魔物が無理なら魔術師から叩こう作戦。

それに気付いたのか魔物が魔術師の盾になつた。

「うざ！」

魔物は棍棒でメイスを受け止めようとしている。

ジローは咄嗟にメイスの持ち手、その下部を開けた。

「はつ！？」

魔術師が目を瞠る。

下部から飛び出た突起を、魔物の喉元を目掛け、突く。  
青い血飛沫を撒き散らしながら魔物は絶命した。

呆気ない。

呆気なくて助かつた。

ジローのメイスは、一般的なものと違い、持ち手に細工がしてあった。

通常攻撃はもちろん打撃だ。

しかし持ち手部分に恐ろしく切れ味の良い刃物が仕込んである。  
この部分は単純に細工なので魔力は関係なかったのだ。

他にも魔力を使う細工は多々あるのだが、どうせ今は使えないので割愛する。

とにかく魔物が終わつたので次は魔術師だ。  
さてどうしよう。

メイスで殴れば死ぬ危険もある。  
よしとりあえず黙らせよう。

声が出なければ魔記号も唱えられない。

もちろん刃物で喉を切り裂く　わけはなく。

メイスで足元を狙う。

転倒した魔術師にすかさず馬乗りになり、拳で数発殴る。

折れた歯や血を吐いている隙にカーテンを破り、猿轡をかませる。  
そのまま拘束。

「これでオッケー」

念の為に全裸に剥いた。

「これのどれかが魔力封じ防止つかね」

試しながら廊下を走り、ジローはキイトを探し始めた。

「あ、コマイだ！」

タロが嬉しそうに世話役の名前を呼んだ。

キイトの走る廊下の前方にコマイが立ちはだかっている。回れ右したい。

しかし背中を見せるにもマズイか。

キイトは立ち止まり、話し合いを試みる。

「どうも」

まずは挨拶か。

そもそもコマイが何を狙つて行動しているのか、キイトにはまったくわからないのだ。

「えーっと……精霊の呪なら巫女が浄化してるんだけど」

コマイは何も言わず杖をキイトに向けた。

「……タロ抱えてるからやめてほしいんだけど」

タロを巻き込むつもりなのか、コマイは笑っている。

「今頃エトランは我が国のもの

「は？」

「こ」の国の惨状は見たでしょう

確かに道中、呪の被害で荒れてはいたが。

「この地に住むのは難しい。我らには新たな地が必要です」

「いや復興しろよ」

呪は浄化される。

自分の国に愛着はないのか。

とりあえずタロをおろし、下がっているように言つ。

おとなしく言つとおりにする。

賢いな。

「そんな費用、どこから？」

それは知らない。

復興にかかる費用も、労力も、キイトには想像出来ない。

「エトランが手に入れば、何の問題もないっ！」

「それでエトランの人はどうなんの？」

双方問題なく平和に暮らせるならば、それも良いのかもと思わない

でもないが。

戦争でそんなうまいまとまるものではないだろ？。

「我が国のために犠牲になつてもうらうますー。」

「知るかうつうのー！」

銃剣を構え、撃つ。

「……あ？」

出ない。

「珍しいものをお持ちですね……魔動具ですか。さすがエトランの珍しい魔動具ですね？」

魔術師

「いや魔術師じゃねえし」

「だがしかし！ この宮殿では魔力は使えない！」

「人の話聞いてねえな。別にいいけど」

「この魔動具さえあれば使えますけどねー！」

高らかに宣言。

何で悪役って自分が不利になる情報を自分からペラペラしゃべるんだろう。

要するにあのブレスレットを奪えば良い、と。

「先手必勝！」

振りかぶって、投げました。

魔光石を。

かわいそうな魔術師は、悶絶している。

「ナイスコントロール。元野球部舐めんなよ  
ダツシューでブレスレットを奪い取り、装着。

銃剣を発動させる。

「よし、まだやる？」

返事はない。

魔術師は悶絶している。

「悪い、わざと狙つたけど、ごめんな？」

いやだつて魔光石一個しかなかつたし。  
一撃必殺つて急所そこしかないし。  
うん、ごめん。

戦場に赴く騎士たちが、国境沿いに集合した。

「え、こんなに少ないの？」

その人数の少なさにマコトは驚きの声を上げた。

騎士の数は百人もいないのではないだろうか。  
王宮騎士、警備隊、討伐隊、精霊の巫女や魔術師と、エトラン國中選りすぐり少數精銳だというが、それにしても。

「大丈夫ー、こっちには救世主がいるんだから」

「いやいやいやいや」

救世主すなわちみつちー。

訓練したとはい、普通の高校生だ。

剣道経験者で良い成績を残しているとはい、それと戦争は別物だ  
と思う。

「英雄の導きだから大丈夫ー」

リゲルの言つていた英雄の書か。

だがそれも確実な未来ではないはずだ。

「ま、よろしくねー。ノルマンド・ディスカ、討伐隊の代表だよ」  
マコトは救世主とともに作戦を教えられる。

作戦つてこんなぎりぎりに伝えられるものなのか。

普通もつと事前に叩き込むもののではないだろうか。

訣然としないまま、マコトは作戦に耳を傾ける。

まず総指揮はクオル・ロアがとる。

クオルは魔術師の中で唯一攻撃に向いている人物らしい。

自身で防御、治癒も可能、そして飛龍にも乗れることで、総指揮に任命されたようだ。

攻撃の要である前線に、救世主みつちとマコトが組み込まれている。

特攻に討伐隊、次いで王宮騎士、警備隊となる。

王宮騎士の代表はランル。

爪竜ネドラに騎乗し、長剣や槍を装備。

警備隊の代表はフレネス。

跳竜ジャンドラに騎乗し、槍や弓を装備。

後方に控える魔術師の代表はエゴトイ。

魔術師は防衛魔術を担当する。

その後ろに精靈の巫女が待機し、治癒を担当。

「つていうか討伐隊、少なくない……？」

特攻が一桁？

どう考へても捨て身である。

「まだ集合してないとか……」

「まっさかー！ いくら遅刻の多い討伐隊でもこんなシリアスな場面で遅刻なんてしないよー！」

シリアスな場面とかその口調とか、まったくシリアスにならない騎士である。

「大丈夫ー！ 君らはその鎧に守られてるからー」

マコトと救世主みつちは赤く輝く鎧を身に着けている。

今回の戦争のためにリゲルが作り上げたものらしい。

赤は英雄の色。

エトランの色ともされる赤は縁起が良いといつも、力があるとされているらしく、鎧も赤にしたらしい。

「来たわよ！ 全員位置について！！」

上空よりクオルの声が響いた。

「突撃！」

ノルマンドの号令に走り出す走竜ランドラたち。

その数、五十頭。

討伐隊の人数、その数一桁。  
え、なにこれ。

マコトは呆然と戦場を見た。  
メンティの騎士たちを次々に戦闘不能にしていく討伐隊の面々と走竜。

魔術のエトランといわれるだけあって、防御魔術は強力。  
討伐隊に怪我はほとんどない。

だが魔術師たちの魔力が尽きればそれも終了となるので、勝負は早く着くほど良い。

「マコト、私たちもいくぞ」

促され、爪竜を進める。

討伐隊によつて拓かれた道を進み、敵陣へ乗り込む。

「つていうか……走竜……」

戦闘用の走竜は騎手不在のまま、騎士数人分の活躍を見せていた。

「戦闘用つてそういう意味……」

予想外である。

走竜強い。

メンティのトップまで行き着くのは簡単だった。

あっけなさすぎて驚きだ。

何というかメンティにヤル気が感じられない。

不自然なほど。

何かの罠なのかと疑つ。

「早良、やるぞ」

「了解」

救世主の合図で、マコトは長剣を掲げた。

光と炎の剣。

それがマコトの武器の名前だ。

この武器の特殊効果に、詠唱なんて必要ない。

ただ願うだけ。

それが精靈の武器を初めて手にした日、教えられた使い方。使い方ですらないような気がするが。

剣が眩い光を放つ。

そして炎を纏う。

この戦争でのマコトの役目は救世主の防衛だ。

救世主の武器には長い詠唱が必要。

無防備になつてしまつその間、マコトは救世主を護る。救世主が胸の前で水平に剣を構えた。

「 我に応えよ

マコトの武器よりも救世主の武器の方が強力だ。

見た目は地味だが効果は高い。

むしろ一人で勝てるんじゃ、と思えるほどの反則ぶり。

もちろん長い詠唱が終わるまでの防御もあるので、実際に一人だと使い勝手が悪いのだが。

「 我が心を乙女に捧げる

「 ぶはつ」

救世主の詠唱にマコトはつい噴き出した。

詠唱は全体的にミナミに捧げるラブレターみたいになつてているのだ。もちろん詠唱は救世主が考えたわけではないので、まったくの偶然である。

耳まで赤くした救世主は何とか詠唱を終える。

「 跪け、愚民共！」

光と大地の剣をその地に突き刺す。

そして敵側は一斉に平伏した。

きっと私は間違っていない。

大丈夫、きっと大丈夫。

言い聞かせ、竜車を走らせる。

走竜ランドラ一頭で竜車を牽くのは骨だろうが、頑張つてもらうしかない。

走竜ランドラに回復魔術を掛けながら一人の後を追う。淨化は無事終了し、クウガは戦場に飛んだ。

呪が淨化が成功したことを伝えるためである。元々メンティとアステの復興の援助をする予定だったので、それも伝え、降伏を促すのだ。

これできっと戦争は終わる。

英雄の言う通り、五人を一手に分け行動した。

その理由や行動内容はあまり詳しく書かれていなかつたが、きっとこれが正解。

戦場できっと、救世主みつちの剣の特殊効果が役立つた。

重力操作ノーグという、この世界ワールドでは着目されていないもの。

詠唱し大地に突き刺すだけで、対象者に対して重力が重くなる。

これを使って戦争が終わることが目的だった。

その裏側で“何か”をする。

その裏側が何なのか、それは書かれていなかつたが、きっと呪の淨化だ。

そうであつてほしい。

もし間違つていて何か不足があれば、それがどういった未来になる

のか、それがわからない。

わからないことは不安だ。

今までずっと来るべき未来が見えていて、それに従つて行動し、生きてきた。

いざそれがなくなると、どうして良いかわからない。  
だがそれもこれで終わる。

復興作業を手伝い、平和条約を結ぶ。

五人を元の世界に帰し、数年後の私に宛てられた英雄の最後の手紙を読むまで生き続ける。

それが終われば私の役目は終わり。

それからどうすれば良いのかはわからないけれど。

手紙を読む頃には、隣にキイトはいない。

クウガとクオル、エディたちはいても、キイトはいないのだ。  
目を瞑る。

召喚の魔術が使えるのは怒りの口だけ。  
つまりあと二月。

あと二月、キイトがいる。

二月だけ、いや、二月もあるじゃないか。  
そう自分に言い聞かせ、切り替える。

これから忙しくなるんだから、感傷的になつていられない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3375t/>

---

ノーグ・コンフェクショナリー

2011年12月20日21時19分発行